

靈界物語 第二〇卷 如意寶珠 未の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二〇卷』愛善世界社

1997(平成9)年04月06日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序じよ

凡例はんれい

總説歌そうせつか

第一篇 宇都山郷うづやまがう

第一章 武志の宮たけしみや〔六六三〕

第二章 赤兒あかごの誤あやまり〔六六四〕

第三章 山河さんが不盡ふじん〔六六五〕

第四章 六六六みろく〔六六六〕

第二篇 運命うんめいの綱つな

第五章 親不知おやしらず〔六六七〕

第六章 梅花ばいくわの痣あざ〔六六八〕

第七章 再生さいせいの歡よろこび〔六六九〕

第八章 心こころの鬼おに〔六七〇〕

第三篇 三國みくにヶ嶽がだけ

第九章 童子教どうじけう〔六七一〕

第一〇章	山中の怪〔六七二〕
第十一章	鬼婆〔六七三〕
第十二章	如意寶珠〔六七四〕

靈たまの礎いしずゑ〔六〕
 靈たまの礎いしずゑ〔七〕

序じよ

鬼おにも十八じふはち蛇じやも二十はたちの卷まき物語ものがたり、いよいよ述のべ了をはりぬ。大江山おほえやま、三國みくにヶ嶽がだけ、鬼おにヶ城がじに立籠たてこもりたる神代かみよの鬼賊きぞく、バラモン教けうの棟梁とうりやう株鬼おにくも雲彦ひこ、鬼熊おにくま別わけは、正義せいぎの神軍しんぐんが發射はつしゃする善言ぜんげん美詞みしの言靈ことたまに驚おどろき、雲くもを霞かすみと遁走とんそうして、波斯フサの國くにに潛伏せんぷくし、鬼熊おにくま別の妻わけ蜈蚣むかで姫ひめが三國みくにヶ嶽がだけに隠かくれ、千變せんぺん萬化ばんくわの奸策かんさくを弄ろうし、バラモン教けうの回復くわいふくを企くはだ

て、聖地桶伏山の神寶を掠奪せるを、言依別命以下の活動の結果、再び神寶の聖地に還りたる、目出度き太古の物語。満載したる言靈車の跡、あらあらかくの如しと言爾。

大正十一年五月十四日 舊四月十八日

於錦水亭 王仁識

凡例

ストーナー夫人は言つてゐる。『總ての子供は生れながら、第六の感覺諧謔の感じを持つてゐる。しかし多くの者は、その育つ環境のためにこの感覺を鈍らされ、或は夙くから失つてしまふものである。楽しいものを見ても、笑ふ心の底から笑ふことが出来ず、苦笑ひや忍び笑ひすら出来ない人間ほど哀れに思はれるものはない。顔面筋肉の痙攣のために、冷笑したやうな表情に苦しむ人の如く、絶えず齒を露はしてゐる必要は少しもない。が小さい時から愛とほほゑみ

に取りまかれて育つた子供は、實に自然に笑ひ、またユーモアに敏感である。彼は苦惱の眞中に在つても、あらゆる事物の面白い半面を眺めることが出来る。彼は常に樂天家である。そしてこの事は、世の中で成功する男も女も、樂天家であるといふ事實を證明するものである。眞の厭世家が勝利を得ることは決してない。實際夫人の言つてゐるやうに「笑ひ」位人間生活にとつて貴いものはない。「笑ひ」は人間の本能である。殊に日本人は一般に諧謔好き、喜び好きで悲しみが嫌ひだといはれる。我々は何時までもペシミズムの暗い室の中にうめいてゐる必要はない。「靈界物語」の讀者は、このストーリーナー夫人の言を味はつて見る必要がある。「物語」を讀んで笑ふことの出来る人は幸福である。馬鹿らしいと感ずる人は、きつと不幸な人に相違ない。

大正十二年三月三日

編者識

待ちに待ちたる三月三日 彌生の春も夢と過ぎ
 若葉の色も濃厚に 彩る初夏の風清き
 松雲閣や教祖殿 奥の一間に王仁始め
 三男一女の筆將は 共に神助を蒙りつ
 五つの身魂睦まじく 五六七の神の永久に
 盡せぬ長き物語 西と東に立別れ
 錦の機のおりおりに 瑞雲たなびく大御空
 八千代の君が瑞光を 心の空に輝かし
 現はれ出口の瑞月が 卯月の中の六日より
 數へて三日の光陰を 呑んで吐き出す言絲の
 粗製濫造の譏り走りも 元より覺悟の夢物語
 神のまにまに傳へ侍りぬ。

大正十一年舊四月十八日 於錦水亭 王仁

第一篇 宇都山郷

第一章 武志の宮〔六六三〕

常世の暗を晴らさむと 神の御稜威も高熊の

静の岩窟の奥深き 恵の露の雨となり

雪ともなりて空蝉の 醜世を洗ひ照さむと

空に輝く旭子の 光も強き玉照彦の

伊豆の命を奉按し 言照姫の神靈や

數多の神に送られて 五六七の神代を松姫が

心イソイソ山坂を 涉りて来る玉鉾の

道も廣らに世繼王山 東表面の峰續き

紅葉の色も照山の

麓に立てる假の殿

神の御言を畏みて

悦子の姫が守りたる

珍の宮居に木の花の

姫の命の御水火より

出でし玉照彦の神

勇み進んで送り来る

天火水地と結びたる

紫姫や若彦は

喜び勇み彦神を

迎へ奉りて玉照の

姫の命の夫神と

稱へまつらむ真心の

限りを盡し仕へ居る

神素盞鳴の大神は

英子の姫を遣はして

五六七の神代の礎の

百の仕組に仕へしめ

國治立の大神が

國武彦と現はれて

曇り果てたる末の世を

照し清むる先驅と

姿隠して桶伏山

黄金の玉と諸共に

御稜威は四方に輝きぬ

言依別の宣傳使

齋苑の館を立出でて

雲路押分け遙々と綾の聖地に着き玉ひ
心の空に玉照彦の神の命や姫命
經と緯との皇神の分の御靈と嬉しみて
三五教を彌固にいや遠永に宣り傳ふ。

言依別命は、神素盞鳴大神の命を奉じ、照山と桶伏山の山間に、國治立の大神、
豊國姫の大神の、貴の御舎を仕へまつりて、其威靈を鎮祭し、玉照彦、玉照姫を
して宮仕へとなし、世界經綸の神業の基礎を樹立せむとしたまひ、遠近の山野の
木を伐り、瑞の御舎を仕へまつつた。神人等の道を思ひ、世を思ふ真心凝結して、
莊嚴無比の瑞の御舎は瞬く中に建造された。稱して錦の宮と云ふ。玉照彦、玉照
姫は幼時より數多の神人に秀で、神徳高く、神格勝れ、神代に於ける救世主とし
て、天下萬民の尊敬を集めたまふに到りけり。

言依別命は、素盞鳴大神の命を奉じ、錦の宮を背景として、自轉倒島に於ける
三五教の總統權を握り、コーカス山、齋苑の館と相俟つて、天下修齋の神業を宇

内に擴張し給ふ事となつた。三五教の宣傳使は云ふも更なり、ウラナイ教を樹て、
瑞之御靈に極力反抗したる高姫、黒姫、松姫は、夢の覺めたる如く心を翻し、身
命を三五教に奉じ、自轉倒島を始め、海外諸國を跋渉して、神徳を擴充すること
となつた。茲に元照彦の御靈の再來、天の眞浦は、大臺ヶ原の山麓に生れ、木樵
を業となし其日を送り居たるが、綾の高天に錦の宮の建造され、神徳四方に光り
輝くと聞きて、樵夫の業を廢し、遙々聖地に訪ね來り、言依別命に謁し、新に宣
傳使となることを得た。天の眞浦は大に喜び、晝夜の區引なく宣傳歌を謠ひ乍ら、
先づ自轉倒島に向つて、神徳宣布の神業を試みむとし、聖地を後に唯一人、霧の
海原押分けて風のまにまに、人の尾峠の西麓に着いた。道行く人も見えぬ許りの
粉雪、瀧の如くに降り來り、見る見る一尺許りも地上に積もり、日は黄昏れて、
道いよいよ遠く、眞浦は行手に迷ひ、進みもならず、退きもならず、蓑笠を着け
たる儘、路上に佇立して、聲低に天津祝詞を幾度となく繰返しつつあつた。怪し
き獸の影幾十となく隊をなして、山上より降り來る。されど眞浦は瀧と降り來る
雪に眼を遮られ、足許に進み來るまで知らざりき。唯何となく雪踏み碎く何者か

の足音、追々近づく聲のみ耳に入る。眞浦は獨言、

「今迄暖かい國に育ち、此様な深雪は見た事がなかつた。始めて神様のお道に入り、百日百夜の修行を積み、漸く許されて今茲に宣傳使補となり、足に任せて進みて来たが……ア、【ゆき】詰つたものだ。言依別命様より「汝は是れより人の尾峠を越え、河水清き宇都の郷に初宣傳を試みよ」と仰せられた。併し乍ら、斯う降り積る大雪、況して樹木茂れる此谷間、日は暮かかる……アア宣傳使も辛いものだ。追々積る雪の量、罷り違へば我身は雪に埋まつて、冷たくなつて了うであらう。進退惟谷まるとは此事だなア」

と心細げに呟く折しも、最前の足音追々近づき来る。見れば數十頭の熊の群、眞浦が足許を勢込んで走り行く。眞浦は驚いて雪の中に路を避けた。熊の群は何の遠慮もなくスタスタと列を組んで、西方さして走り行く。

眞浦はホツと息をつき、

「ア、有難い、澤山の熊が現はれて雪路を踏み分けて、立派な通路を開いて呉れた。是れも全く神様の御神徳であらう……有難し有難し」

と感謝しながら、熊の足跡を踏み分け上り行く。道の傍に一軒の茅屋が有ることが目に付いた。屋内には幽かな火影が瞬いて居る。風が持て来る雪しばき益々烈しく、熊の折角開いて呉れた雪の新道も、瞬く間に閉塞して了つた。屋内には氣樂さうに笑ひさざめく聲。眞浦は此愉快氣に笑ふ聲を聞き、

「ホンに羨ましい事だなア。我れは神命とは言ひ乍ら、此雪路に悩み、玉の緒さへも切れないむとする極寒の苦しみ、血管を流るる血潮も凝結せむとする辛さに引替へ、此家の内の面白さうな笑ひ聲、………實に人の境遇位運否のあるものはない。併し乍ら我れも神の道を傳ふる宣傳使の初陣、斯の如き雪に恐れ、人の家に這入つて、一夜の宿を請はんとするも、何となくウラ恥かしい、ア、如何にせむか」

と躊躇ふ折しも、屋内より男の聲、

男「オイ、どこの乞食だか知らぬが、此雪の降るのに、何を愚圖々々して居るのだ。チツと俺の宅へでも這入つて休んだらどうだ。あつたかい湯も沸いてある。澤山な火も焚いてあるぞ」

眞浦「ハイ有難う御座います。併し乍ら私はどうしても此峠を越さねばなりません。御志は有難う御座いますが……」

男「ナニ、俺の宅で休むのは厭だと云ふのか、馬鹿な奴だなア。俺は此邊の杣人だ。少しの雪はチツとも苦にならない男だが、流石山猿の俺でさへも、一步も今日の雪には歩む事は出来ない。どうして此坂が登れると思ふのか。マアそんな馬鹿な事を言はずに旅は道連れ世は情だ。一樹の蔭の雨宿り、一河の流れを汲む人も、深い縁の有るものだ。サア遠慮は要らぬ、這入つて休息したがいい」

眞浦は其言葉に稍心動き、

「どなたか知りませぬが、御親切に有難う御座います。左様ならば暫く休息をさせて頂きますせう」

男「ア、それが良い。サアサアお這入りなさい」

と眞浦の手を取り引き入れ、斜に歪んだ雨戸をピシヤツと閉めた。

男「大變な大雪で、倒れかかった家が益々怪しくなつて來た。愚圖々々して居ると雪の重みで、此家も平太つて了ふかも知れないぞ。……オイ駒公、お客さま

だ。どつさりとつさりと薪木たきぎを熏くべて御馳走ごちそうするのだぞ。寒い時さむいときには火ひが一番御馳走いちばんごちそうだ」
駒公こまこう「馬鹿言ばかふな。どこの馬うまの骨ほねか、鹿しかの骨ほねか分わかりもせぬ代物しろものを、物好ものずきにも駒こまさんの承諾しょうたたくも得えず、引ひき摺ずり込こみやがつて、火ひを焚たけも有あつたものかい。貴様きさまは何なんでも取込とりこむ事ことばつかり考かんがへて居ゐやがる。チツと執着心しつちやくしんを脱却だつきやくせぬかい。取とり込こむことなら犬いぬの葬式さうしきでも喜よろこんで引張ひっぱり込こむと云いふ代物しろものだから困こまつて了しまふ。そんな事ことで此この立派りっぱな家いえが、どうして立たつて行ゆくと思おもふのか、秋公あきこうの不經濟家ふけいざいかには俺おれも本當ほんたうに「アキ」が來きた。寒い時さむいときに俄にはかに體からだを火ひに近ちかづけると、却かへつて凍傷とうしやうを起おこすものだ。どこの奴やつか知しらぬが、赤裸まつぱだかにして頭あたまから冷水れいすゐでも、ドツサリ御馳走ごちそうしてやるのだなア。貴様きさまと二人斯ふたりかうして雪ゆきに閉とぎされて居をつても、チツとも面白おもしろ味みがない。此奴こいつの衣服いふく萬端ばんたんを奪うばひ取り、其上そのうへ赤裸まつぱだかにして水みづをかけ、それを肴さかなに一いっ杯ぱいやつたら面白おもしろからう」
眞浦まつら「なんだ、其方そのほうらは甘言かんげんを以もつて此方このほうをひつぱり込こみ、泥棒どろぼうを致いたすのか」
秋彦あきひこ「アハ、ハ、ハ、好いい頓馬とんまだなア。そんな事ことを尋たづねるのが馬鹿ばかだ。俺おれも今け日ふが泥棒どろぼうの初陣うひぢんだ。此家このいえは實じつは吾々われわれの物ものではない。老爺ぢいと婆ばばアとが居をつたのだが、凄すご

い文句を並べてやつた所、昨日の日の暮頃、どつかへ逃げて行きよつた。彼奴は雪爺に雪婆だつたと見えて俄にこんな大雪が降つて來た。サア皮を剥いてやらうと眞浦の身に着けたる衣服を剥奪せむとする。

眞浦 「それは、あまりぢや。一寸待つて呉れ」

秋彦 「松も檜も有つたものか。袋の鼠、どうしたつて剥かねば置かぬ」

眞浦 「此家を立去る時に脱ぎませう。それまで此衣服を私に貸して下さいませぬ

か」

駒彦 「オイ秋公、仕方がない、貸してやれ。……オイ何程借賃を出す？ それか

ら約束して置かねば喰逃げされては、泥棒商賣も棒が折れるからなア。ワ

ハ、ハ、ハ、」

眞浦 「自分の着物に利息をつけて貸して貰ふとは、又妙な規則の出來たものです

なア」

駒彦 「愚圖々々言ふない。郷に入つては郷に従へだ。是れが泥棒社會の規則だ」

眞浦 「貴様達は丸でバラモン教みたやうな奴だなア」

駒彦「きまつた事だ。鬼雲彦様の乾兒だよ。秋、駒と云つたら、それは本當に翔つ鳥も落すやうなバラモン教の有名な宣傳使だぞ。貴様は三五教の宣傳使、無抵抗主義を標榜して居る腰拔教の奴だから、指一本俺に觸へても、抗言一つ致しても、抵抗した事になる。頭をカチ割られようが、黙つて辛抱するのだぞ」

眞浦「アア困つた事になつたもんだワイ。三五教には噂に聞けば、もとは馬鹿と云ふ紫姫様の家來があつて、それが高城山の松姫さまを歸順させ、駒彦、秋彦と云ふ名を貰つたさうだが、お前の名は秋と云ひ、駒と云ひ、能く似て居る。何か因縁の縁が結ばれて居る様だ。もしや三五教の駒彦、秋彦ではなからうかな

ア」

秋彦「そんな腰拔の秋彦や、駒彦とはチト相場が違ふのだぞ。俺は三五教の宣傳使眞浦と云ふ新米者が宇都山の郷へ初陣に往くので、言依別の神様から……」

駒彦「オイ秋公、何を言ふのだ。ウツカリした事を言ふものでないぞ」

眞浦「アハ、ハ、ハ、大方そんな事だと思つた。言依別の神様が俺の信仰力を試す爲に、貴様を此處へ廻しおき、そうして此道を通れと仰有つたのだなア……オイ

秋彦、駒彦、モウ駄目だぞ。泥棒でも、バラモンでも、ベラボウでもない、貴様の襟の印は何だ」

駒、秋「アハ、ハ、ハ、到頭陰謀發覺したか。エ、仕方がない。そんなら事實をスツカリ白状致して遣はす」

眞浦「イヤもう澤山だ。何も承はる必要は有りませぬワイ」

駒公「先づ宣傳使の點數六十五點だ。速に言依別の神様に成績表を書留郵便で送つて置かう。夜が明ける迄三人鼎坐してお神酒を戴いて御日待をしようではないか」

眞浦「またそんな事言つて、點數を減らすのではないか」

秋彦「心配するな。一旦認めた以上は減點は決してしない。其代り俺の事もよく報告するのだぞ」

眞浦「能く報告してやらう。コンミツシヨンとしてモウ四十五點あげて呉れ」

秋彦「六十五點に四十五點を加へると満點以上になつて了ふ。それでは試験官として報告の仕方がないワ」

眞浦 俺の改心は百點以上だ。其代り貴様は百八十點に俺から報告してやらう。
併し二人合計してだから……
と他愛なき雑談に一夜を明かしたりける。

天の眞浦の宣傳使

秋彦駒彦諸共に

神の教を傳へむと

人の尾峠の急坂を

雪かき分けて登り行く

地は一面の銀世界

金鳥の光りキラキラと

またたき初めて大空は

拭ふが如く晴れ渡り

茲に三人は勇ましく

谷の流れに沿ひ乍ら

足踏みなづみ進み行く

旭輝く雪は照る

神の恵も白妙の

雪に包まる宇都の郷

武志の宮を祀りたる

浮木の里に辿り着く

又もや降り来る雪しばき

茲に三人は大宮の

脇に建ちたる社務所に

雪を凌いで車座に

なつて暖をば採り乍ら

携へ持てる握り飯

ムシヤリムシヤリと平げて

四方の話に耽る折

雪かき分けて登り来る

怪しの翁唯一人

覺束無げに杖を突き

宮の階段登り来る

眞浦秋彦駒彦は

眼を据ゑて眺むれば

怪しの翁は神前に

やうやう近づき拍手の

音も涼しく太祝詞

稱ふる聲の麗しく

三人の耳に透きとほる

神の使か眞人か

但は惡魔の化身かと

怪しみ乍ら秋彦は

此場を立ちてザクザクと

雪踏み鳴らし神前に

額づく翁に打向ひ

汝は何處の何人ぞ

人里離れし此森に

雪を冒して參來たり

祈願するは何故ぞ

聞かまほしやと尋ぬれば

翁は漸く顔を上げ

胸むねに垂たれたる白鬚しらひげを
二ふたつの手てにて撫なで乍ながら

四邊あたりキヨロキヨロ見廻みまはして
武志たけしの宮みやの神司かんづかさ

朝あさな夕ゆふなに眞心まこころを
盡つくして仕つかへ奉たてまつる

吾われは松鷹彦まつたかひこの司かみ
汝いましは何處いづくの何人なにびとぞ

訝いぶかしさよと問とひ返かへす
其容貌そのようぼうのどことなく

得えも言いはれざる氣高けだかさに
秋彦あきひこ思おもはず手てを突ついて

三五あななひけつ教せんの宣傳でんし使し
心こころの色いろも紅葉もみぢばの

錦にしきの宮みやに仕つかへたる
秋彦あきひこ駒彦こまひこ二人ふたり連れ

天あめの眞浦まつらも諸共もろともに
宇都山郷うづやまがうに現あらはれし

バラモン教けうの曲神まががみを
言こと向むけ和やはす鹿島かしま立たち

雪ゆきを冒をかしてやうやうに
此處ここまで進すすみ來きたりしぞ

雪ゆきに埋うづまる山里やまざとの
家や竝なみも見みえぬ淋さびしさに

武志たけしの宮みやの社務所ながとこを
借かりて休やすらひ居あたりけり

綾あやの高天たかまに現あらはれし
玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの

宇豆の命の仕へます
三五教の司神

言依別の御言もて
あもり來りし三人連れ

汝松鷹彦の司
吾等三人を宇都山の

バラモン館に伴なひて
太しき功績を建てませよ

應答如何と詰め寄れば
松鷹彦は畏みて

老の歩みもトボトボと
雪の階段降りつつ

天の眞浦や駒彦が
前に現はれ會釋なし

先頭に立たむと誘へば
三人は勇み喜びつつ

翁の後に従ひて
武志の宮に一禮し

東を指して進み行く。

松鷹彦は雪路を杖を突き乍ら先頭に立ちて、バラモン教の宣傳使と聞えたる友彦館に案内すべく進み行く。眞浦は翁の後に七八尺遅れて、一步々々深雪の中の足跡を目標に進む折しも、秋彦、駒彦は物をも云はず、眞浦を引抱へ、數丈の崖

下に突落した。突落された眞浦は何の負傷もせず、高く積もれる雪の上にニコニコと安坐して三人の姿を仰ぎ見て居る。

秋彦「モシ眞浦さま、どうだ、御氣分は宜しいかな。どこもお怪我は御座いませぬか」

眞浦「ハイ有難う、無事着陸致しました」

駒彦「サア六十五點に三十五點を加へて百點だ。肉體は高所から落第したが、御靈はいよいよ立派な宣傳使に及第したのだから喜び給へ」

松鷹彦、目を圓くし、

松鷹彦「コレコレお前達は何と云ふ亂暴な事をするのだい。世界の人民を助けて天國へ救ふ役であり乍ら、地獄のやうな斷崖から突落すと云ふ事が有るものか、グツグツして居ると此老人まで、どんな事をするか分つたものぢやない」

秋彦「お爺さま御心配下さいますな。身魂調べの爲に、吾々兩人は言依別様の御命令に依りて、あの男の修業をさせに來たのです。ここで腹を立てる様な事では、宣傳使の資格がないのだから、謂はば我々は宣傳使の試験委員だ。是れであの男

も立派な宣傳使になりました」

松鷹彦「こんな絶壁から落されては、どうする事も出来ない。何とか工夫をして

此處まで救ひ上げて來なさらねばなりません」

秋彦「何も御心配は要りませぬよ。獅子は兒を産んで三日目に谷底へ棄て、上つ

て來た奴を又突落し、三遍目に上がった奴を、始めて自分の子にすると云ふ事だ。

こんな所から一遍や二遍突落されて屁古垂れる様な者なら、到底駄目だ。惡魔の

榮ゆる世の中の宣傳使にはなれませぬ。上つて來よつたら、又突落す積りです」

松鷹彦「それだと言つて、それはあまり残酷ぢやないか。早く助けてお上げなさ

い」

秋彦「そんな宋襄の仁は却つてあの男を憎む様なものだ。可愛いから此斷崖から

突き落してやつたのです」

松鷹彦「なんと妙な可愛がり様も有つたものだなア。私も此年をして居るが、そ

んな愛は聞いた事が無い」

と不思議さうに覗き込んで居る。

駒彦「お爺さま、お前も一つ可愛がつてあげようか」

松鷹彦「イヤもう結構々々、お前等に可愛がられようものなら、生命も何も無くなつて了ふ。若い者は兔も角も、此老人がどうなるものか。恐ろしい人達だなア」と蒼惶として走り去る。

駒彦「アハ、ハ、ハ、到頭老爺さま肝を潰して逃げて了ひよつた。サア秋彦、モウ用が濟んだ。是れから各自手分けをして、命ぜられた方面へ行く事にしよう。：

コレコレ眞浦さま、マアゆつくりと雪の上でお鎮魂でもなさいませ。これでお暇致します。其代りに百點だよ」

と兩手を擴げて見せ、雪路を一生懸命に何處ともなく左右に別れて走り行く。眞浦は苦心慘憺の結果、漸く廻り路を見出して、元の所に驅上り、四邊をキヨロキ

ヨロ見廻し乍ら、

眞浦「ア、誰も彼も皆どつかへ埋没して了つた。エ、仕方がない、足型を便りに後追つかけよう」

と獨語しつつ雪に印した草鞋の跡を、犬が鋭利な嗅覺で猪の後を逐ふ様な調子で

すす 進んで行く。雪は鵝毛と降り頻り、足跡の窪みは殆ど埋没して了つた。見渡す限りの白雪の野を、一歩々々探る様にして、遂には大川の畔に辿り着いた。河の堤に細い煙の破風口より立昇る小さき茅屋が淋しげに立つて居る。眞浦は「御免」と押戸を開けて入り見れば以前の老爺が、婆アと二人茶を啜つて居る。

まつたかひこ 松鷹彦「ヤアお前は最前の宣傳使だつたなア。能う来て下さつた。随分亂暴な男も有つたものだ。あれは大方バラモンの殘黨であらう。お前氣を付けないと、どんな目に遭はされるか知れませぬぞや」

まつら 眞浦「ハイ有難う御座います。實は人の尾峠の西麓に於て、盜賊に出會ひました。それから其盜賊さまに武志の宮まで送つて頂いたのです」

まつたかひこ 松鷹彦「何か盗られましたかなア」

まつら 眞浦「イ工別に……盗られる處が結構な物を澤山頂戴致しました。盜難品は唯の一點も無く、貰つたものは前後二回で百點ばかりです。實に結構な御神徳を頂きました。最前もアノ絶壁から突き落され、其時にも三十五點呉れましたよ」

まつたかひこ 松鷹彦「ハテ合點のゆかぬ事を仰有る。その代物はどこに御所持なさるかなア」

眞浦「ハイ残らず私の腹の中に【しま】つてあります。要するに無形の寶ですよ」

松鷹彦、両手を拍ち、打諾づき乍ら、

松鷹彦「ハ、ハ、ハ、年を老つて、わしも餘程耄碌したと見えるワイ、ホンにそう

だ。わしもお前さまから寶を四五十點頂戴した。實に忍耐と云ふ寶は結構なもの

だ。さうでなくては誠の道は擴まりますまい。バラモン教は随分荒行を致します

が……私も元は三五教を奉じて居りました。それから三五教の宣傳使の行方があ

まり脱線だらけで、愛想が盡き、同じ事なら大勢の者の信ずるバラモン教の方が

處世上の便利だと思ひ、一旦は入信しましたが、これ亦どうしても私の腑に落ち

ない點が澤山ある。そうかうして居る間にバラモン教の一部を採り、ウラル教の

或點を加味し、三五教を加へて、新に起つたウライ教と云ふ新しき教が出て來

たので、又もやウライ教に間男をしました。そうして神様を武志の宮にお祀り

した處が、その夕から夫婦の者が俄に病氣付き大變な發熱で、幾度も死ぬ様な目

に遭ひ……コリヤやつぱり元の神様にすがらねばなるまい……と夫婦の者が三五

教の大神に謝罪をした處、不思議にも其時より熱が段々に降り、婆アは二三日の

後ケロリと嘘を吐いた様に全快して了つた。私は此れから一里許りある下の村の者から選まれて、武志の宮の神主をして居る者だが、村人にさう幾度も幾度も神様を出したり入れたりすると思はれては、信用がないから、ソツとウラナイ教の高姫さまが祀つて呉れた御神號を河に流し、今では三五教の神様をお祀りしたいのだが、一旦御神號を流して了つたので、戴く譯にもゆかず、空の宮を……今日も今日とて謝罪旁拜みに行きました。今日で此雪路を三七廿一日、毎日通ひました。が、不思議な事には、あなた方に宮様の前でお目にかつたのは、全く神様の御引き合せて御座いませう。併し詳しい教理は存じませぬが、三五教の宣傳使はみな貴方の様に忍耐が強い方ばかりですか」

眞浦「昔の三五教は随分亂暴な宣傳使もあり脱線者も澤山出たさうです。併し此頃は玉照彦、玉照姫と云ふ立派な神様の生れ替はりが、聖地に現はれ玉うてより、誰も彼も、緊張氣分になり、忍耐を第一として天下に宣傳を始め居ります。恥かし乍ら私は大臺ヶ原山麓の暖かい所に生れ、樂に育つて來た報いで、此雪國へ始めて宣傳に參り、餘程苦みました。さうして今日が宣傳の初陣です。僅かの時

日、神様の教を聞かして頂き、言依別の教主様から許されて、宣傳に参つた者ですから、詳細い事はまだ存じませぬ」

松鷹彦「さうすると、あなたは今日が始めてですか。それはそれは本當に結構です。宣傳使は分らぬ間こそ却て神徳もあり、人徳も備はるものだ。少し物が分ると知らず識らずに慢心が出て、終には信仰に苔が生え、又元の邪道に逆轉するものだ。私もさう云ふ初心な宣傳使に一度會ひたいと思つて居つた。どうぞ貴方はこれから私の茅屋に逗留し、武志の宮の御神體を齋つて下さい。さうして村の者にも教を傳へ、バラモン教を改めさせたいものです」

眞浦「神様を祀ると云つても、私の様なものでは、到底それだけの資格が有りませぬ。時を得て聖地にあなとも参拜し、言依別命様に面會して、御神體を奉迎してお歸りなさいませ。それが何より結構でせう。我々は宣傳をするばかりの役、神様の御神體を扱ふ事は出来ませぬ」

松鷹彦「如何にも、さう聞けばさうです。物品か何かの様に軽々しう扱ふ事は出来ずまい。時機をみて御願ひする事に致しませう。さうして三五教の教の樹て

方は、大體どう云ふ事が眼目になつて居りますか」

眞浦「あなたは最前も、三五教に入信て居たと仰有つた。私よりは、謂はば古參

者、能くお分りでせう」

松鷹彦「唯々世界統一の神様だと信じ、此曇つた世の中を早う安樂な、潔白に世

にしたたい許りに信仰を續けて居たのみで、言はば徹底せない信仰で有りました。

それ故あちら此方と迂路付いて見たのだが、どうしても三五教が齋る神様に御神

力がある様だ。何とはなしに戀しくなつて來ました」

眞浦「私が知つて居る事の大體だけを簡單に申しますれば、……世界を神の慈愛

の教に依りて、道義的に統一し、世の立替立直しを斷行する事。能ふ限り神様の

道を宣揚し、體主靈従の物質的教に心酔せざる様教ふる事。如何なる事も神様に

お任せ申し、自分の我を出さずに能ふ限り道に依りて力を盡す事。天地神明の鴻

恩を悟り、造次にも顛沛にも、感謝祈願の道を忘れざる事。常に謙讓の徳を養ふ

事。如何なる難儀に遇うとも、誠の道の爲ならば少しも恐れず、誠を以て切り抜

ける事。社會の爲に全力を盡し、天下救濟の神業に奉仕する事なぞを以て、吾々

は宣傳使の盡すべき職務と確信して居ります。併し乍ら、中々思つた様に行ひが出来ないので、神様に對して何時も恥入つて居る次第で御座います」

松鷹彦「オウ、それで大體の御主意が分りました。今までの三五教の宣傳使は、あなたには退却の二字は無いと云つて、随分亂暴な喧嘩もしたものです。然るに今日あなたのお説の通り、三五教自身に立替が出来た以上は、最早天下何者をおそれむやである。其實行さへ出来れば、此宇都山の里人も残らず歸順するでせう。どうぞ武志の宮の社務所にお止まり下さつて、不言實行の手本を見せて下さい。それが第一の宣傳です」

眞浦「有難う御座います。何分宜しく御願ひ致します。私の初陣として、あなたの御病氣の全快を神様に祈らして下さいませぬか」

松鷹彦「それは是非共頼まねばならぬ。併し乍ら不言實行だ。お前さまが私の宅へ來て間もなく、私の病氣が知らぬ間に癒る様になさらぬか。願はして呉れ……なぞと仰有るのが間違つて居る。まだお前さまはチツと許り名譽欲の魔が憑いて居ますな」

眞浦「ハイ恐れ入りました。それならモウ決して祈りませぬ。あなたの病氣には無関係ですから、さう思つて下さい」

松鷹彦「ハイハイ分つた分つた。御互に神様の御子ぢや。右の手より施す物を左の手が、知らぬ様にするのが、誠の不言實行、三五の教だ」

眞浦「あなたは何も彼も能く知つて居て、私を實地教育して下さるのだなア。有難う御座います。ア、神様は人の口を藉つて、イロイロと修業をさして下さるか、思へば思へば有難い、勿體ない」

と涙を袖に拭ふ。

松鷹彦「わしは何にも知らない。唯お前さまと話を居る際、俄に體が變になつて、あんな失禮な事を言ひました。どうぞ氣に止めて下さるな……ア、有難い、今迄ツキツキとウツいて居つた私の足が、何時の間にかスツカリ癒つて了つた」

と拍手再拜、眞浦を神の如くに手に合して拜み立てる。

雪に閉され四五日眞浦は、老夫婦の親切にほだされて、教話を説き乍ら冬の日を消した。

松鷹彦「此處は御存じの通り、山と山とに圍まれて不便の土地、御馳走も一度上げたいと思へども、斯う雪に閉されては、どうする事も出来ぬ。幸ひ此川の淵には、澤山な小魚が居つて、つい其處の淵には、冬の寒さで一所に籠つて居る。これを掬うて来て、お前さまの御馳走にして上げませう」

眞浦「ア、それは有難う」

と言ひつつ、後は小聲で、

眞浦「不言實行が肝腎だなかつたかなア」

と幽かに呟いた。老爺さまは玉網を擔げ、雪掻き分けて川縁に行つた。そうして玉網を淵に突つ込み、荐りに骨を折つて居る。此家の座敷から能く見える距離である。婆アさまと眞浦は、爺さんの川漁を面白げに眺めて居た。松鷹彦はどうした動機か、誤つてドブと川に落込み、チツとも浮いて來ない。婆アさまは素知らぬ顔して眺めて居る。眞浦は驚いて、眞浦「ヤアお爺さまが川へ落ち込んだ。助けてあげねばなるまい」と立ちあがる。婆アさまは初めて口を開き、

婆「不言實行だ」

眞浦「恐れ入りました。これから私もお前さまに代つてあの青淵目蒐けて、バサ
ンと飛び込み、チイさまを救はう」

婆「お手竝拜見の後御禮を申しませう。何は兔も有れ不言實行ですからなあ」

眞浦は尻ひつからげ雪の中を倒けつ轉びつ飛んで行く。爺イは此時柳の木に取
り付き、ムクムクと上つて來た。

眞浦「お爺さま、結構でした。能う助かつて下さつた。實は私もビツクリして助
けに來たのだ」

松鷹彦「あなたは有言不實行だ、アハ、ハ、ハ」

眞浦は黙つて老爺さまの着物を搾りかけた。

松鷹彦「自分の着物は自分が絞る。モツと忘れたものがあるだらう」

眞浦は黙つて引返し、矢庭に座敷の中をキヨロキヨロ見乍ら、おやぢさまの着
替を見付け、小脇に抱へて飛出した。婆アは、

婆「コレコレお前さま、それはおやぢの着物だ。老爺の陥つたのを幸ひ、大切な

着替を不言實行して、どこへ浚へて行くのだ。……ホンにホンに油斷のならぬ人
だなア、オホ、、、

眞浦「エー夫の危難を前に見乍ら、一言も頼みもせず、不言實行だなんて、謎を
かけやがつて、おまけに俺を盗人扱ひにして洒落て居やがる。此奴ア普通の狐……

……オツトドッコイ女ぢやあるまい。……早く行かぬと、爺が凍てて了ふ

と裏口を跨げかける。婆アは、

婆「眞浦さま、早く早く、不言實行だ」

眞浦は物をも言はず、爺の所に走り着いた。老爺は赤裸となりて眞浦の持つて

来た着物を、手早く身に着け「大きに」とも、「御苦勞」とも言はず、黙つてス

ゴスゴと吾家に歸る。眞浦は濡れた着物や網を引抱へ、

眞浦「ア、本當に不言實行歩と出よつたな。油斷のならぬ化物爺だ。モウこれか

らは暫時唾の修業だ」

と獨ごちつつ、爺の家に歸つて来た。

婆「流石三五教の宣傳使ぢや。能う氣が付いた。これでお前も又一點程點數が増

えましたデ、ホ、、、、、

松鷹彦「アイタ、、、又しても痛くなつた。此奴ア病氣が撥ね返るのではあるま

いか。非常な激痛だ」

と顔を顰め、

松鷹彦「不言實行不言實行」

と呶鳴つて居る。婆アは、

「折角御神徳を戴き乍ら……爺さま、お前は二口目には不言實行と仰有るが、取

らぬ狸の皮算用をする様に、棚の牡丹餅をおろして喰ふ様に、慢心して、眞浦さ

んに御馳走をしてあげようかなんテ、仰有るものだから、忽ち神様の御戒めを食

つて、有言不實行になり、そんな土産を頂戴して苦むのだよ。チツと神様に謝罪

をなさらぬか」

松鷹彦「俺は神様に對して不言實行、暗祈黙禱を行つて居るのだ。どつか其邊ら

に不言實行者が、モウ出さうなものだ。アイタ、、」

眞浦は赤裸となり、裏の川にザンブと飛び込み、御襖をなし、一生懸命で何事

か祈願し始めた。爺イの足の痛みは不思議にもピタリと止まった。

松鷹彦「眞浦様、有難う。御神徳を頂きました。サアどうぞ此方へ来て下さい。

火を焚いてあたらしてあげませう」

眞浦は川より這ひ上り、身體の露を拭ひ乍ら、

眞浦「お老爺さま、火を焚くのもヤツパリ不言實行だ、アハ、ハ、ハ、ハ」

(大正一一・五・一二 舊四・一六 松村眞澄録)

第二章 赤兒の誤〔六六四〕

雪に埋まる川端の 賤の伏家も春が来て

冷たき雪も何時しかに 溶けて嬉しき老夫婦

宇都山川の水温み 枯木も青芽を萌き出して

軒端の梅も匂ひ初め

谷の戸開けて鶯の

訪る季節となりける

山と山とに包まれし

此處は世界の祕密郷

人の心も質朴に

宛然神代の如くなり

時しもあれや婆羅門の

神の教の宣傳使

鬼雲彦の殘黨と

世に聞えたる友彦が

二十戸許りの里人に

靈主體従を標榜し

劍を渡り火を渡り

水底潜り浮き沈み

鳥さへとまらぬ茨室に

郷の男女を裸體とし

言葉巧に説きつけて

身體を破る曲の行

足駄の表に釘を打ち

穿ちて歩む村人は

神に仕ふる第一の

清き御業と迷信し

心を痛め身を痛め

無理往生の嬉し泣き

この慘状を救はむと

天の眞浦の宣傳使

松鷹彦が賤の家に

長らく足を留めつつ 朝な夕なに神の道

【うまら】に委曲に説きつれど 迷ひ切つたる里人の

肯ふ事とならずして 迷ひに迷ふ憫れさよ。

春は漸く深く、菜種の花も「すげ」なく散りて青い莢の針をいただき、大根の花遅れ馳せ乍ら白く咲いてゐる。一方は大川、一方は田圃で挟まれた川堤の松鷹彦の茅屋さして入り来る四五人の男女、

甲「ハイ御免なさいませ」

松鷹彦「ヤアお前は留公か。大勢伴れで血相變へて何處へ行くのだ」

留公「イヤ何處へも行かぬ。當家へ村人の代表者として、吾々五人がやつて来た

のだ。今日は確りと聞いて貰ひませう。お前等夫婦の身の上に関する大問題だから

松鷹彦「大問題とはソラ何だ。又水の中で河童が屁を放つたやうな事を針小棒大

に言つて来たのだらう」

留公は肩を張り、腕を捲り拵鉢巻をし乍ら、半分許り逃げ腰になつて、
留公「オイお前達、道をサツと開けて置けよ。【まさか】の時に邪魔になると困
るから」

松鷹彦「なんだ貴様は肩をいからし、腕をまくり、よう氣張つたものだなア。今
からそれだけ力一杯出して氣張つて居ると、力の原料が缺乏するぞ。先づ【じつ
くり】せぬかい」

留公は少し肩の角を削り、手持無沙汰にそつと捲つた腕を隠す。

松鷹彦「なんだ其の鉢巻は。他人の家へ出て来るのに、あまり無作法ぢやないか。
親の仇敵にでも出會つたやうな勢だなア」

留公「親の仇敵どころかい。大自在天大國彦の神様の、最も大切な仇敵をお前の
家に匿まうて居るでないか。其奴を一つ【ふん】縛つて歸り、友彦の宣傳使の御
前に曳き据ゑて、相當の處置をつけるのだ。サア爺、もう斯うなつた以上は隠し
ても駄目だ、キリキリと宣傳使を【おつ】放り出して吾々に渡すのだよ。ゴテゴ
テ吐すと村中が貴様の信用を買はないぞ。ボイコツトを始めが、それでもいい

か。さうすれば、武志の宮の宮司は、足袋屋の看板足上り、鼻の下の大旱魃、大
恐慌だ。悪いことは言はないからさつさと渡して呉れ。老爺の身に取つて實に大
切な場合ぢやぞ。焦頭爛額の急場と言ふのは今のことだ。サア早く神妙に宣傳使
を吾々に渡したがよからう。里人の代表者留公の言葉に二言はないぞ。覺悟を定
めて返答しろ」

松鷹彦「何事かと思へばそんな事かい。ベラボウ教のドモ彦だな。矢張り彼奴は
何時迄も頑張つて居るのかい。遠の昔に宇都山の里から消滅した筈だが、オイ留
公、此方には用が無いが訊ねたい事があれば、宣傳使は奥にチャンと祭りこみて
あるから、友彦と云ふ御大將を此處へ連れて来い。及ばず乍ら松鷹彦が天地の道
理を説き諭し、友彦の身魂を淨めて三五教の宣傳使眞浦様のお伴彦として使つて
やるから早く歸つて注進致せ」

留公「中々老耄の癖に俄に強くなりやがつたな。オイお春、お弓、樽公、捨公、
貴様等何を愚圖々々してゐるのだ。俺と一緒に奥へ踏んごみ、宣傳使を【ふん】
縛つて歸らうぢやないか。こんな奴が此の結構な里に来やがつて、三五教とかを

説きやがるものだから、この御天道様の色を見よ。御機嫌が悪うて黒い雲が出て居るぢやないか。御天道さまのお氣に入らぬ奴が此の里へ來ると、何時も黒い雲が出るでと云ふことだ。二三日前から人の尾峠の頂いただきに、眞黒けの鍋墨のやうな雲が現あらはれたのも、全くお前達まへたちが仕様しやうも無い奴やつを宿とめて居をるからだ。バラモン教けうの宣傳使友彦せんでんしともひこさまの御示おしめしだぞ□

奥おくの間まより眞浦まづらの聲こゑとして、涼すずしき宣傳歌せんでんかの聲こゑ聞きえ來きたる。

□ 天教山てんけうざんに現あらはれし

木花姫このはなひめの分靈わけみたま

玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの

神かみの命みことの朝夕あさゆふに

心こころを清きよめ身みを淨きよめ

仕つかへ給たまへる丹波あかなみの

國くにの眞秀良場まほらばただなはる

青垣山あそがきやまを繞めぐらせる

眞中まなかに立たてる世繼王山よつわうざん

御稜威みいづも高たかく照山てらやまの

袂たもとにひらく神かみの苑その

錦にしきの宮みやの最聖いときよき

心こころの花はなも咲さく耶姫やひめ

彦火ひこほ々ほ出見でみの二柱ふたはしら

國治立の大神や

豊國姫の大神の

嚴の御言を畏みて

天地にさやる曲津神

八岐大蛇や醜狐

バラモン教に立籠る

醜の曲鬼言向けて

此世を清め澄さむと

七十五聲の言靈を

朝な夕なに宣り出でて

教司を招び集へ

言依別を三五の

神の柱と【つき】立てて

錦の機の御經綸

開かせ給ふ常磐木の

われは小さき者なれど

神の恵を蒙りし

三五教の宣傳使

天の眞浦の命ぞや

高天原を立ち出でて

雲霧分けて降り来る

人の尾山は高くとも

宇都山川は深くとも

如何で及ばむ神の徳

バラモン教の友彦が

舌の劍に操られ

神よりうけし生血をば

瀧の如くに流し居る

哀れ果敢なき里人を

諭して誠の大道に

救はむための鹿島立

武志の宮に立寄りて

しばし憩らふ折柄に

宮の司の松鷹彦

現はれ來り吾々を

これの伏家に伴ひて

朝夕唱ふる太祝詞

神の恵みもいやちこに

五風十雨の順序よく

花は梢に咲き亂れ

梅の蕾はさわさわに

枝もたわわに重なり合ひ

見渡す限り野も山も

色蒼々と榮え行く

神の恵みを目の當り

眺め乍らに汝等は

何を狼狽へ騒ぐぞよ

一時も早く立歸り

汝が親と頼み居る

バラモン教の友彦を

わが目の前に伴れ來り

天と地とを守ります

誠の神の御心を

「うまら」に委曲に説き諭し

汝等里人悉が

眠れる眼を醒まさなむ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くとも

假令大地は沈むとも 我宗門の神力は

如何に強しと誇るとも 誠一つの言靈の

幸ひ助くる三五の 神の教に比ぶれば

月に靄雲に泥 天地の差別あることを

洩らさず落さず細やかに 教へて呉れむ里人よ

神代ながらの里人よ 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 唯何事も人の世は

直日に見直し聞直し 世の過ちを宣り直す

神の教に省みて 天地の道を誤りし

深き罪をも差赦し 高天原の神國の

教の御子と何時迄も 心に安きを與ふべし

榮えの花は永久に咲く 高天原の神の子と

生れ變りし其上は 此世に恐るるものは無し

ア、惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましまして

留公其他の里人とめこうそのたさとびとを 安やすきに救すくひ給たまへかし

ア、留公よ里人とめこうさとびとよ 友彦ともひこ伴ともなひ早來はやきたれ

天の眞浦の神司あめまづらかむづかさ 襟えりを正ただして待暮まちくらす

ア、惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましましてよ

と屋外をくわいに響ひびく龍聲りうせいに留公とめこう始めはじめ四人よにんの男女なんによは、

「ヤア大變たいへんだ。頭あたまが痛いたい、胸むねが苦くるしい。一先ひとまづ此家このやを立去たちさり、友彦ともひこの宣傳使せんでんしに注ちう

進しんせむ

と大麥おほむぎ、小麥こむぎ、豌豆えんどまめ、蠶豆そらまめ畑ばたけを踏躡ふみにじり、周章あわて狼狽ふためき歸かへり往ゆく。

松鷹彦まつたかひこ「此この村むらは質朴しつぽくな代りかはりに理解力りかいりよくが無いなので困こまる。信仰しんかうも結構けつこうだが無理解むりかいな

信仰しんかうにああ堅かたくなつては、何どうにも斯かうにも手ての付つけ方かたが無いな。まるで鐵てつを以もつて

固かためた城壁じやうへきに向むかつて、無手むてで子供こどもが襲撃しうげきするやうなものだ。ア、何どうしたら彼等かれら

の目めを醒さます事ことが出来できようかなア。斯かう云いふ時ときに不言實行ふげんじつかうの教理けうりを徹底的てつていてきに發揮はつきし

て欲しいものだ。廣い世界には何處かに、一人や半分位天から溢れて来て居り相
なものだなア」

と、わざと奥の間に聞えよがしに、

「ナアお竹」

と婆アに向つて話しかけたればお竹はウナヅイて、

「さうですな、随分いろいろの神様の教もあり、宣傳使も澤山ありますが、どれ

もこれも言葉の花の山吹ばかりで、實の「のつた」例は無い。あれだけ近くに

バラモンが跋扈して居るのだから、何とかして彼のような残酷な教を根底より轉覆

させ、せめて此の村だけなりと助けて呉れる眞人が現はれ相なものだなア」

とお竹も亦爺の言葉尻について、奥の間に聞けよがしに言つてゐる。眞浦は之を

聞くや否や、奥の間の戸を、音させじとソツと開き、スタスタと宇都山の里を

ざして走り行く。

留公の離れ座敷に陣取つて日夜怪氣焰を吐き里人を煙に捲いてゐるバラモン教

の友彦は、松鷹彦の茅屋に遣はしたる使の歸り来るを、今や遅しと首を長くして

日當りのよい角窓から覗いてゐる。倒けつ轉びつ、ハ―ハ―、ス―ス―と息を喘ませ歸り來る留公一行の姿を見るより、友彦は、

友彦「ヤア待ち兼ねた。様子は如何だ。早く返答聞かして呉れ」

留公「イヤもう暗雲低迷、前途暗黒、收拾すべからざる形勢で御座いました。この留公が深遠微妙の言靈に依つて、漸く騷亂鎮靜の曙光を認めました」

友彦「ア、さうか、それは大儀であつたのう」

お春「モシモシ宣傳使様、全くですよ。全くは全くだが零敗の大當違ひ、夜食に外れた梟鳥の憫れ儚なき列を亂した頓狂振り、實に目も當てられぬ慘状でしたワ」

留公「コラコラ女の差出るところでない。黙つて物言へ。それだから女に大事は明かされぬと昔の聖人が云つたのだ」

友彦「一體何方が本當だ。吉か凶か、天か地か、月か鼈か、雪か炭か」

お春「鼈に炭の様なものです。爺さま、中々の剛情者で村中の協議の結果を一も二もなく退け、青瓢箪のやうなへボ宣傳使の加勢ばかりやつて居ます。さうして奥の閒から何百人とも知れぬ大きな聲を揃へて、照るとか曇るとか歌ひ居つた。

其の聲に私達の結構な笠の臺は忽ち地異天變、目は暈ふ、鼻はうづく、口は自然に弛んで下顎が乳の邊まで垂下する、胸は早鐘をつく消防夫は驅出す、纏はガサ

ガサ チヤンチヤン

友彦 「オイオイ貴様何を言つてゐるのだ。何處へ行つて來たのだ」

留公 「ハイ一寸小火があつたものですから」

お春 「留さま、何をボヤボヤして居るのだ。火事つたら何處にあつたのだい」

留公 「エー貴様の見えない、遠い遠い神靈界に無形の火事があつたのだよ。靈眼の開けないデモ信者の窺知し得る限りでないワイ。女だてらブカブカと此の場面に浮き出して水をさすよりも女らしう暫らく沈艇をしてゐて呉れ」

友彦 「アハアお前たちはフの字だな」

お春 「フの字ですとも、それはそれは麩のやうな腑抜け魂ですよ。戦況を詳細に報告致しませうか」

留公 「オイ敗軍の將は兵を語らずだ。弱蟲は弱蟲らしう控へて居らう」

斯く争ふ所へ、スタスタと現はれて來た一人の男、鍬をかたげ頼被りをし乍ら、

男「留さん、一寸外へ出て下さい。俺ん所の大事な赤子を踏み殺しやがって、如何して呉れるのだい」

留公「貴様の家に赤子があるのか。何時の間に子を産んだのだ。嬢も無い癖に如何して赤子を踏まれる道理があるか」

男「有らいでか、有りやこそ言うて来たのだ。嘘と思ふなら俺ん所の畑までやつて来い。さうしたら一目瞭然貴様も成程と合點がいくだらう」

留公「赤子の三つや五つ踏み殺したつて、なんだい。此の村は今や地異天變の最中だ。ちつと位辛抱して作戦の用意にかからねばならぬだないか。悠々と野良へ出て仕事をして居る場合ぢやない。擧國一致で敵に當らねばならぬ危急存亡の場合だぞ」

男「それでも貴重な赤子を捨ててまで馬鹿らしい、斯んな戦争が出来るか。婦人國有論が起つて赤子を一人でも殖やさにならぬ時に、二十も三十も踏み殺されてたまるものかい」

留公「貴様鼠のやうな奴だな。澤山な赤子を如何して産んだのだい。あまり仕様

も無い種子を蒔くと、米が騰貴して國家的破産を來さねばならぬやうになるぞ。

産兒制限の問題が喧しい時だ。俺が踏み殺したのも國家の爲めだよ」

男「天地の大神様の御恵みで、やうやうと芽をふき、葉も出來、花も一寸咲きかけたとこだ。それを貴様が三五教の宣傳歌に驚き慌てて、廣い道路があるのに俺

ん所の芋畑を通りやがって、三度芋の赤子をすつかり踏割つて了ひやがった」

留公「何を吐しやがるのだい。俺は又人間の赤子だと早合點して、聊か同情の涙

にくれて居つたのだ。貴様の芋畑を通つたものは俺ばかりぢやないぞ、五人も居

るのだから、そりや大方人違だらう」

男「馬鹿言ふな、足型でよく分つて居る。六本も指のある奴は、此村には貴様一

人より無いのだ。指の型が證據だ。モシモシバラモン教の先生、あんなことを

しても神様は許されませんか。私は何時も貴方の御話を聞いてゐますが、畔放ちの

罪と云ふことは大變な重い罪だ。そんなことを致したものは直にバラモン教を破

門すると仰有いましたなア」

友彦「それは何時も言うて居る通りだ。オイ留公、お前は今日限り破門する。併

し乍ら明日は又明日のことだ。兔も角教が許さぬから此場を立去つたがよからう
留公「エー置きやがれ、今まで先生々と崇めてやれば、好い氣になりやがつて、
なんだい芋種子の二十や三十踏み躪つたと言つて、それがそれ程悪いのか。芋と
人間と何方が貴い、芋よりも安く見られるのなら、俺も此方から破門だ。其の代
りにタツタ今頭の痛い、胸の苦い宣傳歌を謠つて、天の眞浦とか云ふ偉い生神様
がやつて来るから、その時に犬突這ひになつて、ベソをかかぬやうに用心せい。
これが俺の別れのお土産だ。オイお春、貴様も好い加減に目を醒せ。俺はこれか
ら三五教の宣傳使に御味方するのだ」
と言ひ捨て、一目散に驅出した。

(大正一一・五・一二 舊四・一六 外山豊二録)

第三章 山河不盡 (六六五)

留公はドンドンと地響きさせ乍ら性凝りもなく芋畑の赤子を御丁寧に再び蹂躪り、『エイ、此芋の野郎、俺に影響を及ぼしやがった、芋だつて油断のならぬものだ、エ、もう斯うなる上は善【いも】、悪【いも】、恐【いも】、可愛【いも】、難かし【いも】、嬉し【いも】、悲し【いも】あつたものかい、三度芋の野郎、何處までも六本の指で蹂躪してやらう。アタ【いも】いもしい』と足に力を入れて心ゆく許り踏み砕いて居る。そこへ走つて來たのは眞浦の宣傳使、此態を見て、

眞浦 『留さん、何をして居なさる』

留公 『之はしたり、大變な所を發見されました。然し何卒もう宣傳歌文だけは許して下さい、頭の數が幾つにも分家する様な心持がしますから……』

眞浦 『よしよし嫌とあれば沈黙しませう、然し今お前の踏んで居るのは芋ではな
いか』

留公 『ハイ、物價騰貴の今日、斯う澤山に赤子が殖えては、第一國民が食糧に困ります。三度芋と云つて年に三度も子を生む奴ぢや、産兒制限の爲めにサンガー

夫人がやつて来て、今此處に大活動を開始した所ですよ。何卒大目に見て上陸を拒否せない様に願ひます、アハ、ハ、ハ、ハ、

眞浦「そんな事しては困るぢやないか、天津御空の星の數程人を殖やし、濱の眞砂の數程赤子を生まねばならぬ神様のお道ぢや、生成化育の大道を無視してその様な亂暴な事をして良いものか」

留公「私は之が國家の經濟上から見ても、人類共存上の學理から考へても最も神の意志に適した良法だと確信して居ます。何卒私の演説を一つ聞いて見なさい、

能く徹底して居ますよ」

眞浦「演説は中止、否絶對に解散を命じます」

斯る處へ以前の男、鋏を擔げ乍ら怒髪天を衝いて走り來り、

男「こらこら又しても大切の大切の赤子を殺すのか」

留公「オ、バラモン教と取換へこして迄、赤子を征伐する覺悟をきめたのだから、何と云つても中止はせない。マア之も前世の因縁だと諦めて鄭重に弔ひでもしてやるが良からう」

男は怒り心頭に達し、鍬を眞向に翳し、留公の頭を目蒐けて打ち下ろした。留公はヒラリと體を躲した機に、鍬は外れて眞浦の足の小指を斬り落した。眞浦は顔を顰め落した指を手早く拾つて傷口にあてた。指は其儘に密着した。餘り慌てたと見えて小指の先は裏表に付けて仕舞つた。之迄は眞浦に對し守彦と云ふ名が付いて居たが茲に初めて眞浦と云ふ名が出来たのである。

男「之は之は失禮な事を致しました、何卒赦して下さいませ。勿體ない、宣傳使の指を斬るなんて……私は如何して此罪を贖うたら宜しいでせう、神界に對して取返しのならん不調法を致しました」
と泣き沈む。

留公「世界を救ける生神の宣傳使様だ。指の一本や手の半本位取れたとて、そんな事で弱へる様では宣傳使ぢやない。それよりも貴様の所の赤子の生命、随分無残な事になつたものだのう」
男「之だけ丹精を凝らして作つた芋種を臺なしにして置き乍ら、まだ業託を吐きやがるか。エーもう堪忍袋の緒がきれた、覺悟をせよ」

と又もや鋤を振り翳し留公に迫る。宣傳使は此鋤の柄を確と受止め、眞浦「マアマアお待ちなさい、短氣は損氣だ。芋も大切だが人の生命も大切だ」男「朝から晩まで自分の産んだ子も同然に肥料を掛けたり、草を引いたり、色々と世話をして来た可愛い芋の子、それをムザムザ踏み潰されて……育ての親が如何して黙つて居れませう。芋は芋だけの精靈が宿つて居る。屹度苦しんで居るでせう。可哀相に……此赤子は誰に此無念を訴へる事が出来ませう、私が怒つてやらねば此赤子は能う浮びますまい……ア、芋の子よ、可憐相な者だが、もう斯うなつては仕方が無い、俺が之からお前の冥福を祈つてやるから心残さずに幽冥界に旅立して安樂に暮してくれ、アンアン」
と態と男泣きに泣き立てる。
留公「アハ、ハ、それだから田吾作、貴様は馬鹿だと云ふのだよ、それ程可愛い芋なら大きうなつた奴を何故釜煎にしたり庖丁にかけて喰ふのだ。そんな矛盾な事を云ふからキ印だと云はれるのだ。モシ宣傳使さま、ちつと理屈が合はぬぢやありませんか」

としたり顔に云ふ。

田吾作「それはそうだけれど……何だか可憐相で仕方が無い哩、西も東も知らぬ弱い赤子を無残にも斯んなに虐殺すると云ふ事があるものか、芋は芋としての壽命がある筈だ。秋が来て蔓が枯れた時は壽命の盡きた時だ、そこで喰ふのなら芋も得心するであらう、折角お前も生れて来て不運な奴だのう」

と又も涙含む。

留公「オイ田吾作、貴様は人の命が大切か、芋の子が大切か、何方を主とするのだ」

田吾作「きまつた事よ、貴様は芋で譬たら良い喰ひ頃だ。此世に最早用の無い代物だから別に惜しくも無ければ、國家の損失でも無い。却つて社會の塵埃掃除が出来た様なものだ」

眞浦「アハ、ハ、ハ、随分面白い芋論を聞かして貰ひました、併し乍ら萬物一切皆神様の靈が宿つてゐるのだから、貴賤老幼草木器具の區別なくそれ相當の靈魂がある。萬有一切は總て神様の大切なる御靈が宿つてるから、木の葉一枚だつて粗

末にしてはなりませぬぞや」

田吾作「そら見たか、留州、キ印の阿呆の云つた事でも矢張天地の眞理に適つて居るのが、ちと妙ではないか」

留公は首を傾け手を組んで青芝の上に端坐し何事が頻りに考へて居る。漸くにして顔を上げ、

留公「ヤ、何事も氷解しました。田吾作どの、どうぞ忪へて呉れ、之からは決してもう斯んな事はせないから……」

田吾作「何と云つても斯うなつた以上は仕方は無い、今後は氣をつけて呉れ。芋ばつかりぢやないよ、豆だつて麥だつて皆其通りだからなア」

留公「ハイ承知致しました、ちつと心得ます」
と以前に變つて丁寧に挨拶する。

眞浦「ア、之で凡ての解決がついた、芋の死骸で最早平和克復だ。サア之からバラモン教の友彦さんにお目に掛つてお話を承はりませうか」

と行かむとするを留公は引き留め、

留公「モシ、宣傳使様、一寸待つて下さい、貴方只一人でお出でになつては大變です、私等は勝手を能く覺えて居ますが、私の離座敷に宣傳使が置いてある、そこに神様も祀つてあります。然し乍ら家の周圍に廣い深い溝が掘つてあつて迂闊跨げようものなら……それこそ大變……生命が無くなりますぜ」

眞浦「それは本當の話か」

留公「本當ですとも、現在私の家ですもの、何間違つた事を云ひませう。軒下を貸して母屋を取られると云ふ譬の通り、初め乞食の様な態をしてやつて来た友彦の宣傳使が、今では大變な勢で私の座敷や本宅を我物顔に振舞ひ、私は丁稚役、主客顛倒も之位甚しい事はありません。私は初めの頃は實に立派な宣傳使だと思つて現を抜かし、云ふが儘にして居りましたが、此頃の宣傳使の言行の一致せない事、實にお話になりませぬ。けれども私が率先して村中の者に勧め廻つたと云ふ廉があるので、今更責任上此宣傳使は喰はせ者だつたと云つて告白する譯にもゆかず、本當に困り抜いて居つた所ですが、最前松鷹彦の宅へ使に行つた時、奥の間に何百人とも知れぬ人聲で宣傳歌が聞えて来た。その聲の恐ろしさ、實に無

限んの威力ありよくが備そなはつて居あました。私わたくしはバラモン教けうは愛想あいさうがつき三五教あななひけうへ入信にふしんしたいので御座ございますが、あの様な頭あたまの割われる宣傳歌せんでんかを謠うたはれては困こまるなり、如何どうしたら良いよいでせうかなア

眞浦まうら「宣傳歌せんでんかは聞きけば聞きく程ほど氣分きぶんが良よくなつて來くるものだ。お前まへに憑依ひょういして居をる副守護神ふくしゆごじんが嫌きらふのだ、それさへ體内たいないより放逐はうちくして仕舞しまへば何なんでも無ないのだ。さうしてあの小ちひさい家いへに百ひやく人も居ある筈はずがない、其實そのじつは私わたし一人ひとりより居をらなかつたのだ」

留公とめこう「イエイエそれでも澤山たくさんなお聲こゑでした。年寄としよりの聲こゑ、若い者わかものの聲こゑ、鈴すずの様な綺きれ麗いな女をんなの聲こゑも聞きこえましたがなア

眞浦まうら「そら、そうだらう、澤山たくさんな神様かみさまが集あつまつて宣傳歌せんでんかを合唱遊がっしやうあそばす事ことが始終しじうあるからだ。そりやお前まへの神德しんとくの頂いたげ口ぐちだ、天耳通てんじつうの開ひらけかけだから安心あんしんして吾々われわれの唱となふるお道みちへ這入はいるが宜よからう」

留公とめこう「そんなら私わたしを入信にふしんさせて下くださいますか」

眞浦まうら「ア、宜よろしい宜よろしい、何卒入信どうぞにふしんして下ください」

留公とめこう「之これは有難ありがたい、もう斯かうなる上うへは百人力ひやくにんりきだ。オイ田吾作たごさく、お前まへも仲直なかなほりをし

た以上は、俺と同様に此方に従つて三五教を信仰しようぢやないか」

田吾作「ウンそうだ、さうなれば此村も天下泰平だ。毎日にち血を見る残酷な

行を強壓的にさせられる心配も要らず、定めて女子供が喜ぶ事だらう」

眞浦「然し私がお前の宅へ出張すれば、友彦の宣傳使が随分妙な顔をするだらう

なア」

留公「そりや致しませうとも、今迄は無鳥郷の蝙蝠氣取りで随分威張つて居まし

たが、上には上があるから何時迄も世は持ちきりにはなりません、之が良い切

り替へ時でせう。サアサア世の立替立直しは之からだ、天の岩戸の開け口だ」

と雀躍し乍ら先に立ち二人を伴ひ吾家を指して歸り行く。

留公は矢庭に友彦の割據せる離座敷に躍り入り、

留公「サア友彦、今日から一寸都合があるので此家を開けて貰ひ度いのだ。俺も

今迄はバラモン教のお世話係をやつて来たが、お前さんから除名されてからは何

時迄も此家を貸す譯にはゆかない。之から三五教の宣傳をしようとするのだから、

未練残さずトツトと歸つてお呉れ」

友彦は怪訝な顔して、

友彦「オイ留公、そりや何を云ふのだ。貴様、初めに何と云つた、……私の家は

お粗末乍ら一切神様にお供へします。……と大勢の前に立派に誓つたぢやないか」

留公「そりや誓ひました、否違ひました。然し神様に上げるも上げぬもない、世

界中皆神様のものだ。假令上げると云つた所でお前に上げたのぢやない、天地の

元の大神様に奉つたものだから、何卒出て呉れやがれ」

友彦「左様な都合な事を申すと神罰は立所に當るぞ、それでも宜いか、此友彦

だつて天地の大神様、殊に大國別の神様の生宮だ、神様の生宮が神様の家に居る

のだ、貴様の様な四足の容器とは違ふぞ、エ、穢らはしい、トツト出てゆけ。左

様な無體な事を申すと神様は兔も角として村中の信者が承知致すまいぞ」

と信者をバツクに落日の孤城を固守せむとする。

留公「何といつても、もう駄目だよ。零落ぶれて袖に涙のかかる時、人の心の奥

ぞ知らると云つてな、除名された俺は村中の除外者になり、何處へ頼る所もな

し、自暴自棄となつて田吾作の芋畑に驅込み、事の起りは此奴ぢやと芋の赤子を

片端から踏み殺す最中に、一人で百人の聲を出すと云ふ立派な三五教の宣傳使が
其處に忽然として現はれ給ひ、此留公の頭を、膝に上つた猫でも撫でる様な調子
で可愛がり、一の乾兒にして下さつたのだ。サアサア早く出立致さぬと表に三五
教の御大將が見張つて御座るぞ」
友彦「何、三五教の宣傳使が見張つて居るとな、大方武志の宮の神主の宅に去年
の冬から潜伏して居た守彦と云ふ弱腰宣傳使だらう。バラモン教の友彦が威勢に
恐れて今まで蟄伏して居た蛙の様な代物だ、そんな者が假令千匹萬匹やつて來た
とて驚くものかい。萬々一此場へ進んで來ようものなら、それこそ神界の御仕組
の陥穽に眞逆様に顛倒し生命を捨つるは目の當りだ。心配致すな、貴様も今日限
り除名處分を取消すから安心せい」
留公「何を吐きやがるのだ、取消も何もあつたものかい、三五教の宣傳使は俺の
詳細なる報告に依つて陥穽の箇所は全部承知して御座るのだ。さうして俺は案内
役だから滅多に別條は無い、吾身の一大事が迫つて來て居るのにお前、人の疝氣
を頭痛に病む様な馬鹿な眞似はなさいますなや。大きに御心配……有難う」

と長い舌を出し、両手を鳶が羽翼を擴げた様な風にして二三遍虚空を掻き、尻を
ニユツと突出して舞うて見せる。

友彦は祭壇の前に額き祈願の詞を奏上し、言靈戦を以て眞浦の宣傳を撃退せむ
と、聲張り上げて謠ひ初めたり。

常世の國を守ります 大國彦の大神の

珍の御裔と現れませる 大國別の大神は

仁慈無限の救世主 常世の國より遙々と

イホの國迄渡りまし 靈主體從の御教を

開かむ爲に靈幸ふ 神に等しき鬼雲の

彦の命や鬼熊別や 其他數多の神々を

豐葦原の中津國 メソポタミヤの顯恩郷

果實豊かな樂園に 本據を定めフサの國

ツキの國まで教線を 擴め給ひて自轉倒の

島に又もや下りまし
大江の山を中心

神の光を三嶽山
鬼をも拉ぐ鬼ヶ城

伊吹の山まで開きまし
世人を救ひ助けむと

心を盡し魂を錬り
此世を亂す悪神の

神素盞鳴の枉津見が
下に仕ふる悦子姫

鬼武彦や高倉や
旭、月日の白狐等が

悪逆無道の振舞に
時を得ずして本國へ

一先づ退却し給へど
必ず捲土重來の

時こそ今に近づきて
コーカス山やウブスナの

山に建つたる齋苑館
黄金山はまだ愚

自轉倒島の中心地
世繼王の山の邊傍

錦の宮を忽ちに
手の掌翻す其如く

土崩瓦解は目の當り
先の見えたる三五の

神の教は風前の
燈火の如く日に月に

危険益々迫り行く
實に憐れな其教義

それをも知らぬ守彦が
天の使と名乗りつつ

圖々しくもバラモンの
神の使の友彦が

館を指して來るとは
飛んで火に入る夏の蟲

それに従ふ留公や
田吾作野郎の蚯蚓きり

蛙もきれぬ分際で
神徳高き友彦に

刃向ひ來るとは何事ぞ
身の程知らぬも程がある

天が地となり地が天と
變る此の世が來るとても

三五教に迷ふなよ
靈主體從の此教義

誠一つの神界の
深き經綸は三五の

浅き教ぢや分らない
飯守彦の宣傳使

留公田吾作諸共に
今から心を立直し

バラモン教の神徳を
受けて身魂を研き上げ

神世を來す神業に
心を盡し身を盡し

天地に代る功績を
千代萬代に樹てよかし

これ友彦が詐らぬ
誠一つの言葉ぞや

言靈幸はふ世の中に
善ぢや悪ぢやと何の事

朝日が照るとか曇るとか
月が盈つとか虧くるとか

大地が泥に沈むとか
世人欺くコケ嚇し

そんな馬鹿げた言靈を
之だけ開けた世の中の

人が如何して聞くものか
馬鹿を盡すも程がある

一時も早く目を覺せ
神の心は皆一つ

世界の氏子を助けむと
大國別の御言もて

憂瀬に沈む民草を
救はせ給ふ有難さ

一度は喰つて味はへよ
喰はず嫌ひは仕様がな

苦けりや吐き出せ甘ければ
遠慮は要らぬドシドシと

心ゆく迄喰ふがよい
善の中にも悪がある

悪の中にも善がある
三五教は表向

善ぜんと雖いへども内實ないじつは 惡鬼あくき惡魔あくまの囀言たはごとぞ

バラモン教けうは表おもてから 眺ながめて見みても善ぜんである

裏うらから見みても亦また善ぜんぢや 其内實そのないじつは殊更ことさらに

善ぜん一筋ひとすぢで固かためたる 昔むかしの元もとの神かみの道みち

斯こんな結構けつこうな御教みをしへを 調しらべもせずひとくちに一口ひとくちに

惡あくの雅號ががうで葬はうむりて 此世このよを潰つぶさうと企たくむ奴やつ

憎にくさも憎にくい三五あなひけう教けう 一時いちじも早はやく留とめ公こうよ

飯守彦めしもりひこと云いふ奴やつの 甘うまい言葉ことばにのせられて

お尻しりの毛け迄まで抜ぬかれなよ 憐あはれみ深ぶかい友彦ともひこが

眞心まごころ籠こめて氣きをつける 大國おほくに別の神かみさま様さまよ

彼等かれらが心こころに生命せいめいを 與あたえて再ふたびバラモンの

神かみの教をしへに救すくひませ あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈幸みたまさちはひ坐ましませよ あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈幸みたまさちはひ坐ましませよ

と口から出任せに汗をブルブル流し乍ら唝鳴り立てて居る。留公は此歌を聞いて躍起となり、

「オイ、バラモン教の御大將、随分立派な言靈だのう。雲煙模糊として捕捉すべからず、支離滅裂、聞くに堪へざる亡國の悲歌、そんな事を囀ると天地が暗くなつて仕舞ふ哩。サア之から此留公が十一七番の宣傳歌を謠つてやらう、耳を浚へて謹聴せい」

と長々と前置してエヘンと一つ咳拂ひ、鷹が翼を擴げた様な手付で腰を屈め足を踏ん張り、右や左へ身體を揺ぶり乍ら奇聲怪音を放つて揺ひ出した。

「此處は名に負ふ秘密郷 四面深山に包まれて

中を流るる宇都の川 流れも清く澄み渡る

武志の宮の御住家 大江の山を破壊されて

逃げて出て来たバラモンの 言靈濁る【ども】彦が

鳥なき里の蝙蝠か 蛇なき里の青蛙

威張散らして村人を
何ぢやかんぢやとチヨ口まかし

靈主體從を標榜し
利己一片の強欲心

最極端に發揮して
宇都山村の婆、嬢を

有難涙に咽ばせつ
遂に進んで吾々も

慣用手段の口の先
一寸うまうま乗つて見た

さはさり乍らつくづく
胸に手を當て眞夜中に

臥せりもやらず窺へば
表面を包む金鍍金

愈色は剥げかけた
時しもあれや三五の

誠一つの宣傳使
天の使の守彦が

雲路を分けて下りまし
武志の宮の御前に

現はれました雪の道
雪より清い神心

松鷹彦の住む家に
去年の冬から出でまして

世界の立替立直し
天地百の神等を

宇都の川邊に呼び集め
神徳茲に備はつて

バラモン教の枉神を
言向け和し如何しても

往生致さな是非はない
神の定めの根の國や

も一つ違うたら底の國
萬劫末代上れない

根底の底のまだ底の
眞黒暗のドン底へ

落してやらうかこりや如何ぢや
此世でさへも限りがある

早く心をきり替へて
瓦落多教に暇呉れて

誠の神の開きたる
三五教に歸順せよ

俺も長らく友彦を
師匠と仰いで來た誼

別れに際して親切に
誠心で氣をつける

氣をつけられた其中に
聞かねば後は知らぬぞよ

神の心を取り違へ
留公さまの眞心を

無にするならばするがよい
皆お前の身の上に

かかつて來ること許り
俺はもう早や三五の

神の教に歸順した
バラモン教に用は無

とは言ふものの人は皆
同じ御神の分靈

世界同胞の誼もて
一度は忠告仕る

早く改心して呉れよ
決して俺に損得の

一つも關はる事ぢやない
みんなお前が可愛から

お前が改心するなれば
宇都山村の神村も

天下泰平無事安穩
五穀成就目のあたり

改心せなけりや是非も無い
留の腕には骨がある

天地の神になり代り
貴様の雁首引き抜こか

眼玉を抜こか舌抜こか
地獄の鬼ぢやなけれども

止むに止まれぬ大和魂
とめてとまらぬ留公が

思ひ詰めたる善の道
道に迷うた里人を

助けにやならぬ此場合
先づ第一に友彦が

改心すれば三五の
神の司と手を引いて

元は一つの神の道
腹を合して仲好くし

お道を開く氣はないか 早く薰しい返事せよ

返事がなければ是非が無い 芋の赤子を潰す様に

片つ端から踏みにじり 鬼の餌食にしてやるか

サアサア早うサア早う お返事なされよ三五の

誠一つの宣傳使 言靈戦を開いたら

とても敵はぬ尻に帆を 掛けて走らにやなるまいぞ

そんな見つとも無い事を するより早く我がを折つて

改心なされ改心を すれば忽ち其日から

喜び勇んで神界の 御用が屹度出来まずぞ

三五教が善なるか 又悪なるか俺や知らぬ

俺の感じた動機こそ 不言實行の誠のみ

バラモン教は善の道 善ぢや善ぢやと謠へども

言心行が一致せぬ 一致を缺いだ御教は

半善半悪雑種教 斯んな教が世の中に

若しも擴まるものならば 世界の人は悉く

みんな不具者になつて仕舞ふ 生血に飢ゑたる枉神の

醜の企みと知らないか お前も天地の御徳にて

生れ出でたる神の宮 悪魔の巢ふ破れ屋と

なつて天地の神々に 如何して言譯立つものか

早く改心してお呉れ 留公さまが一生の

誠盡しのお願ぢや 之程誠で頼むのに

首を左右に振るならば もう是非なしと諦めて

直接行動にとりかかる 返答聞かせ友彦よ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも お前一人は如何しても

改心させねば措かないぞ あゝ惟神々々

御靈幸はひ坐しまして 頑固一途の友彦が

心を照させ給へかし 身魂を光らせ給へかし

と敵てきやら味方みかたやら譯わけの分わからぬ歌うたを謠うたひ首くびをすくめ、糞垂ばばたれ腰こしになつて、左右さいうの手てを胸むねの四邊あたりに「かまきり」がすくんだ様な手付てつきし、ピリピリふる慄ふるひ乍ながら左右さいうの足あしを一所いっしょにキチンと合せ待まつて居をる。その可笑をかしさに友彦ともひこも、跟ついて來きた田吾たごさく作くも、思おもはず聲こゑを上げて笑わらひ轉こけたり。

(大正一一・五・一二 舊四・一六 北村隆光録)

第四章 六六六みろく 六六六みろく 六六六みろく

鬼おにも十八じふはち、番茶ばんちやも出花でばな、蛇じやも甘はたちなる卷物語まきものがたり、六六六みろくの節せつに當あたつて少すこしく季節きせつは早はやけれど、蚊蜻蛉かとんぼぜん然ぜんたる細長ほそながき、加藤如來かとうにょらいに筆執ふでとらせ、横よこに臥ふしつづ瑞月ずいげつが、古こ今こんを混同こんどうしたる夢物語ゆめものがたり、ハートに浪なみもウツ山のやま、里さとに割據かつきよせし、バラモン教けうの宣せん傳使でんし、言靈濁ことたまにごる【ども】彦ひこが、天あめの眞浦まうらの言靈ことたまに、當あたりて逃にげ出す一ひとく條だり、天井てんじやうの棧さんを讀よみながら、布團ふとんを尻しりに敷しきしま敷島しきしまの煙けぶりと共に雲煙うんえん朦朧もうろう、捉つかまへ所のどころなき泣なき述のぶる

ドモ彦物語、嗚呼惟神々々、迂る言靈口車、いやいやながら乗つて行く。
田吾作は鋤を杖につき、煮染めたやうな垢ついた手拭で頬被りをし乍ら、留公の側にツと寄り添ひ、石原を石油の空罐でも引ずり廻したやうなガラガラ聲を振り上げて、お交際的に支離滅裂なる友彦征服歌を謠ひ始めたり。

☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

宇都山村の里人は 朝な夕なに鋤擔げ

婆も娘も野良仕事 いそしみ勵む其中へ

どこから降つて出て来たか 規律を亂すバラモンの

偽善一途の神柱 おん友彦がやつて来て

イの一番に留公を 言向け和し次ぎにお春の若後家が

現を抜かした其日より 二十餘軒の里人は

野良の仕事も打忘れ 朝から晩までバラモンの

譚も分らぬ經を讀み 隨喜の涙流しつつ

今年で恰度満三年

田畑は毎年荒れて行く

こんな事ではどうなると

道に迷うた里人に

ド偏屈よと笑はれつ

麥を蒔つけ豆を植ゑ

芋の赤子を朝夕に

肥料を與へて育みつ

其成人を樂みに

朝から晩まで汗をかき

作る畑へ留公が

三五教の守彦の

生言靈に怖ぢ恐れ

野路を外して我畑に

踏み込み赤子を無殘にも

躡り殺してしもた故

俺もチツとは腹が立ち

留公が宅へやつて來て

強談判と出て見れば

留公の奴の言ひ草が

どしても俺の腑に落ちぬ

女國有の説もある

此世の中に芋にせよ

赤子を踏まれて堪らうか

舊の通りにしてかやせ

バラモン教の御教は

天の恵を無殘にも

損ひ破つて良いものか

返答聞かむと詰め寄れば

此留公は面をあげ

頻りに冷笑浮かべつつ

サンガー夫人がやつて来て

産児の制限までもする

八釜し説を吐く時に

芋の赤子の二十三十

潰してやるのは國の爲

世人の爲ぢやと逆理屈

流石の俺も堪り兼ね

携へ持った鍬の先

留公の頭を的として

骨も砕けと打下ろす

忽ち留公身をかはし

逃げる機みに三五の

神の教の宣傳使

守彦さまが足の指

思ひがけなく切り落し

ビツクリ仰天地に這うて

無禮を謝すれば守彦の

仁慈無限の眞人は

顔に笑をば湛へつつ

罪を赦して下さつた

あゝ有難し有難し

バラモン教の友彦が

指であつたら何とせう

摺つた揉んだと苛められ

忽ち衣を剥ぎ取られ

鳥もとまらぬ茨畔

劍の橋や火渡りや

水底潛り荒行を

五日十日と強ひられて

生命の程も計られぬ

之を思へば三五の

神の教の尊さが

心の底に浸み込んで

喜び勇んで入信の

手続き終へた田吾作は

最早バラモン教でない

サア友彦よ友彦よ

最早汝が運の盡き

一日も早く改心の

實を示すかさもなくば

大江の山の鬼雲彦が

館を指して歸り行け

お前の様な悪神が

鳥なき里の蝙蝠と

羽振りを利かしたシーズンは

昔の夢となつたぞよ

田吾作ぢやとて馬鹿にすな

俺も天地の分靈

假令養子の身なりとて

家を嗣いだら主人ぢやぞ

貴様は口に蜜含み

尻に劍持つ土蜂の

女房子供に至るまで

うまく騙だましてくれた故ゆゑ

村中むらぢゆうの内輪うちわゴテゴテと

宗旨争しゆうしめらすひ絶間たえまなく

イカイ迷惑めいわくかけよつた

さはさり乍ながら今いまとなり

理屈りくつを言いふは野暮やぼなれど

腹はらの蟲奴むしめがをさまらぬ

一日ひとひも早く兜脱かぶとぬぎ

鋒逆ほこさかさま様に旗捲はたまいて

降参かうさんするなら田吾作たごさくが

日頃ひごろの恨み解とけようが

何時いつまで澁しぶとう威張ゐばるなら

堪忍袋かんにんぶくろの緒をを切きつて

蛙飛かはづとばしの蚯蚓切みみづきり

どん百姓びやくしやうと云いはれたる

此田このたごさく吾作しようちが承知しやうちせぬ

返答へんたふ聞きかせ早聞はやきかせ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人の世ひとよは

直日なほひに見直みなほせ聞き直なほせ

宣のり直なほせよと皇神すめかみの

尊たふとき教をしへは聞ききつれど

何どうしてこれが忘わすられよか

俺等おいらひとり一人ひとりの難儀なんぎでない

宇都山うづやま村むらは云いふも更さら

ひいて世界せかいの大難儀だいなんぎ

今いまの間に悪神あくがみの

根を断ち切つて葉を枯らし
昔の元の秘密郷

宇都山村を立直し
武志の宮の御前に

お禮参りをせにやならぬ
さあ友彦よ友彦よ

早く改心致さぬか
朝な夕なに清新の

同じ空気を吸うた俺
お前の難儀を目のあたり

見逃す譯にも行きませぬ
三五教の宣傳使

天の眞浦が言靈を
發射なさらぬ其間に

早く去就を決せよや
お前の行末案じての

我忠告を馬鹿にして
聞いてくれねば止むを得ず

神の御心に任すより
もはや仕方がない程に

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして

道に迷ひし友彦が
心を照らさせ給へかし

御魂を研かせ給へかし
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ
』

と揺うたひ終をはつて、頬ほほ被かむりをはづし、顔かほの汗あせを拭ぬぐひ鍬くはを擔かたげて表おもてへ飛とび出だした。友彦ともひこは閻魔えんまだいわう大王ねんまつが年くわいけいけんさ末けんさの會くわいけいけんさ計けんさ檢けんさ査けんさをするやうな面つらがま構がまへで、口くちを「へ」の字じに結むすび、ビリ

眞浦まうら 天地てんちを造つくり固かためたる 國くに治はる立たちの大おほ神かみの

大御神命おほみみことを畏かしこみて 豊國とよくにひめ姫わけみたまの分わけ靈たま

ミロクみよの御代おほやしまひこに大八洲おほやしまひこ彦かみ 神かみの命みことや大足彦おほだるひこの

教をしへを開ひらく宣傳せんでんし使し 開ひらくる御代みよも弘子彦ひろやすひこの

神かみの命みことの生御靈いくみたま 宇宙うちうばんいうす萬有ばんいうす統すべ守まもる

七十五しちじふごせい聲かみの神かみの教のり 言靈ことたまわけ別わけの伊都いづ能賣のめの

神かみは尊たふとき神界しんかいの 大經綸だいけいりんを果はたさむと

天教山てんけうざんに現あれませる 木花このはな姫ひめや烏羽玉うばたまの

閻世やみよを晴はらす日ひの神かみの 靈たまより現あれし日ひの出で神かみ

神素かむす蓋さ鳴をのおほかみ大神かみの 瑞みづの御靈みたまと諸もろ共ともに

珍うづの聖地せいちのエルサレム コーカス山ざんやウブスナの
 御山みやま續つづきの齋苑いその山やま エデンそのの園そのを始はじめとし
 自轉おのころ倒島じまの中心地ちうしんち 桶伏山をけふせやまの山麓さんろくに
 大宮柱おほみやばしら太ふとしりて 仕つかへ奉まつりし神かみの宮みや
 伊都いづの仕組しくみも三千歳みちとせの 花咲はなさく春はるに相生あひおひの
 玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの 珍うづの命みことと現あらはれて
 埴安彦はにやすひこの開ひらきたる 三五教あななひけうを立たて直なほし
 瑞みづの御靈みたまに反抗はむかひし ウラナイ教けうの神司かむづかさ
 高姫たかひめ黒姫くろひめ松姫まつひめが 心こころの底そこより悔悟くわいごして
 神かみの御伴みともに馳参はせさんじ 教をしへを四よ方もに傳つたへ行ゆく
 言靈ことたま天地てんちに鳴なり渡わたり 太平洋たいへいやうを控ひかへたる
 大臺おほだいヶ原がはらの山麓さんろくに 産聲うぶごゑ揚あげし守彦もりひこが
 靈夢れいむに感かんじて杣人そまびとの 業務なりはひ棄すてて照妙てるたへの
 綾あやの高天たかまに馳登はせのぼり 百日百夜ももかもよの行ぎやうを終をへ

言依別の大神に 差許されし宣傳使

雪踏み分けて人の尾の 山の麓に来て見れば

忽ち雪の槍ぶすま 進みもならず退くも

心に任せぬ雪の宵 忽ち聞ゆる足音に

何物ならむと佇めば 限り知られぬ黑影は

人か獣か曲神か 但しは敵の襲来かと

雪に埋もり窺へば 幽かに瞬く火の光

力の綱と近寄れば 半ば破れし門の戸を

サツと開いて出来る 雲突く許りの荒男

お這入りなされと親切に 顔に似氣なき御挨拶

薄き氷を踏む心地 進退ここに谷まりて

神のまにまに入り見れば 又もや一人の荒男

圍爐裏の側に安坐かき 厭らし眼付で睨めまはす

あゝ山賊の棲み家かと 怪しむ折しも向ふより

名乗り出でたる三五の神の教の宣傳使

秋彦駒彦兩人と判つた時の嬉しさは

常世の春に會ふ心地明くるを待ちて三人は

人の尾峠の雪をふみこけつ轉びつ浮木の里

武志の宮の御前に到りて祝詞を奏上し

暫し休らふ時もある杖を力に登り來る

白髪異様の老人は武志の宮の神司

松鷹彦の神參詣翁の後に從ひて

五尺有餘も積りたる雪に半身没しつつ

見上ぐる許りの斷崖にかかると折しも秋彦や

心のはやる駒彦が油斷を見すまし我體

力限りに突きつれば空中滑走の離れ業

雪積む崖下に着陸し神の試鍊と喜びて

感謝祈願をこらす折秋彦駒彦兩人は

口を揃へて語るやう

人の尾峠の山麓で

六十五點與へたり

又もや此處に我々が

檢定委員と現はれて

汝が身魂試験せり

いよいよ立派な宣傳使

三十五點を與ふれば

天下晴れての神使

御祝ひ申すと言ひ乍ら

姿は消えて白雪の

足音さへもかくれ行く

鵝毛と降り來る白雪を

冒して川邊の一つ家に

辿りて見ればこは如何に

松鷹彦の老夫婦

圍爐裏の前に端坐して

澁茶を啜る眞最中

居ること此處に三四日

翁は川に網を持ち

小魚を掬ひ守彦に

響應せむと出でて行く

忽ちバサンと水煙り

驚き駆け付け救はむと

到りて見れば老人は

川邊の柳に取り付いて

ニコニコ笑ひ上り來る

我れは忽ち驅せ歸り

不言實行の着替へ持ち
再び川邊に驅せ付けて

翁に渡し濡れ衣
絞りにて伏屋に立歸る

老人夫婦は喜びて
朝な夕なに神の教

問ひつ問はれつ語り合ひ
雪積む春を明けの春

梅さへ散りて麥の穂の
筆を含みし彌生空

バラモン教の友彦が
使と稱して入り来る

留公始め五人連れ
門の戸口に顔を出し

爺さん婆さんに打ち向ひ
何かヒソビソ語り合ふ

様子怪しと戸の破れ
垣間見れば五人連れ

形勢不穩と見えしより
始めて開く言靈の

車を押せば忽ちに
踵を返して逃げて行く

あゝ惟神々々
御靈の幸を目のあたり

眺めて神の大御稜威
【うまら】に委曲に讚へつつ

そつと此家を脱け出でて
豆麥茂る田圃路

進み來れる折柄に

先に來りし留公が

一人の男と何事か

芋の畑にいがみ合ふ

おつとり鍬を振あげて

芋の畑の赤ん坊を

踏んだ踏まぬと心まで

擦鉢巻の大喧譁

仲裁せむと立ち寄りて

折を伺ふ一刹那

力限りに田吾作が

打下したる鍬の尖

留公ヒラリと身をかはし

勢餘つて吾足に

力限りにかぶりつき

小指を一本喰ひちぎる

周章ふためき手を延ばし

親と頼みし小指をば

ついで直せば裏表

それより忽ち田吾作は

留公さんと手を握り

平和談判締結し

目出度く進み來て見れば

神の教の友彦が

悠悠然と構へつつ

天地に響く宣傳歌

耳をすまして聞くからに

どことはなしに善惡の

差別も分かぬ言靈戦

善悪正邪の判断に

苦み佇む時もあれ

留公さんが進み出で

俺の腕には骨がある

早返答と詰めかくる

其スタイルの可笑しさに

濟まぬ事とは知り乍ら

思はず知らず噴き出だす

續いて進む田吾作が

心をこめた宣傳歌

何れ劣らぬ花紅葉

實りはせねど紅葉の

上に閃くプロペラの

右と左に別れたる

支離滅裂の大虚空

空翔つ様な宣り言に

バラモン教の宣傳使

神の教の友彦が

不意を喰つた怪訝顔

館をめぐる陥穽

これぞ金城鐵壁と

頼みし甲斐も荒男の子

二人の男と友彦の

仲には深い陥穽の

近寄り難い深溝が

忽ち茲に穿たれた

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 皇大神の御恵みの

深き尊き事の由 友彦司の胸の奥

早く照らせ玉へかし 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 天の眞浦が眞心は

救ひまつらにや置くべきか 元は天地の分靈

三五教もバラモンも 仕ふる人は神の御子

一日も早く御心を 直させ玉へ神司

天の眞浦が眞心を 茲に披陳し奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひまませよ

と歌ひ終るや友彦は此聲に驚いてか、忽ち裏門より韋駄天走りに驅出し、川にザ
ンブと飛び込み、對岸指して流れ渡りに打渡り老木の茂みに姿を没したり。櫻を
散らす山嵐、川の面を撫でて、魚鱗の波を描いて居る。茲に眞浦は留公、田吾作
を始め、數多の里人に歓迎され、武志の宮に寄り集ひて、一同感謝祈願を奏上し、

次いで暫く松鷹彦が茅屋に足を留むる事となりける。

四方の山邊は新緑の
衣着飾る初夏の風

釋迦の生れた卯の月の
空晴れ渡る後の夜の

寒さに震ふ月の下
窓引あけて眺むれば

【新井】すました【如衣】寶珠
頂き照らす【山】の【上】へ
新井如衣

【郁太】の山の高し【郎】に
光も強く照り渡る
山上郁太郎

和知の流れは涼々と
波音高く自から

天津祝詞を奏上し
山川草木一時に

天地自然のダンスをば
春の名残と舞ひ暮す

山と山との【谷村】に
【眞】の【友】の寄り合ひて
谷村眞友

二十の巻の物語
六六六の節までやうやうに

述べつ記して【北村】の
筆の劔も【隆光】る
北村隆光

【出口】の【王仁】が口車 横に押すのを【松村】氏 出口王仁三郎
 心も【眞澄】の大御空 【外山】の頂き晴れ渡る 松村眞澄
 【豊】かな春【二】教子が 六六夜も寝ねもせで 外山豊二
 六六六の物語 【加藤】結んだ松の心 加藤明子
 一度に開く梅が香の 香りゆかしく説き【明】かす
 時しもあれや汽車の音 本宮山の麓をば
 矢を射る如く迂り行く 一瀉千里の勢に
 火車の車は走れども 餘り日永に草臥れて
 迂りあぐみし口車 いよいよここに留めおく
 あゝ惟神々々 御靈幸はひ玉へかし。

(大正一一・五・一二 舊四・一六 加藤明子録)

第二篇 運命の綱

第五章 親不知〔六六七〕

黄金の波も宇都山の

山と山との谷間を

縫うて流るる宇都の川

水も温みて遡り来る

眞鯉緋鯉や鮒雑魚

鮎の季節も漸くに

漁る人の此處彼處

中に勝れて背も高く

何とはなしに逞しき

白髪異様の老人は

立つる煙も細竿の

先に餌をば取りつけて

永き春日を過ぎさむと

釣を樂しむ折柄に

川邊を傳ひ上り来る

蓑笠着けた二人連れ

諸行無常是生滅法

生滅滅已寂滅爲樂と記したる

菅の小笠を頂きつ

金剛杖に助けられ

釣する翁の前に立ち

釣れますかなと阿呆面

翁は釣に氣を取られ

見向きもやらぬもどかしさ

行者はツカツカ側に寄り

コレコレ爺さまと背叩き

釣れますかなと又問へば

情無い浮世の一人者

婆アは川に誤つて

寂滅爲樂となりました

諸行無常の世の中の

是生滅法の道理に

洩れぬ人生を果敢なみて

餘生を送る川の邊の

吾れは松鷹彦翁

汝は夫婦の修験者

本來この世は無東西

何處有南北此れ宇宙

迷ふが故に三界城

悟るが故に十方空

食うて糞して寢て起きて

さて其後は死ぬるのみ

是れが人生の通路ぞや

汝は若い年に似ず

行者ぎやうじやになるは何故なにゆゑぞ

此れには仔細しさいあるならむ

委曲つぶさに語れと促うながせば

若わかき男をとこは笠かさを除とり

蓑みのぬ脱すぎ捨てて川の邊かはべに

どつかと坐ざして目めを拭ぬぐひ

バラモン教けうの修しう験げん者じゃ

宗彦むねひこお勝かつの兩りやう人にんが

一粒種ひとつぶだねの愛いとし子こに

先さき立だたれたる悲かなしさに

赤兒あかこの冥福めいふく祈いのらむと

二に世せを契ちぎつた妹いもと背せが

足あしに任まかせて雲水うんすゐの

行衛ゆくへ定さだめぬ草枕くさまくら

旅たびに出いでたる其日そのひより

憂うきを三みつ年ねんの夫ふう婦ふ連づれ

月日つきひの駒こまは矢やの如ごとく

吾われを見み棄すてて流ながれ行ゆく

二人ふたりの果はては小夜さよ砧きぬた

宇都うづ山やま川がはの水み音なも

悲かなしき無情むじやうの叫さけび聲こゑ

萬有ばんいう愛護あいごの御教みをしへを

守まもる吾等われらは河海かはうみに

泛うかび遊あそべるうろくづの

天津御神あまつみかみの精靈せいれいの

宿やどり玉たまうと聞きくからに

翁おきなの釣つりを見みるにつけ

諸行無常しよぎやうむじやうの感深かんふかし

生者必滅會者定離

世の慣習と云ひ乍ら

釣魚の歎きは目のあたり 見る吾こそは痛ましく

彼れが菩提を弔ひて せめて吾子の冥福を

祈りやらむと松鷹彦が 心をこめて釣りあげし

鮒や雑魚の死骸に 両手を合せ拜み居る

松鷹彦は驚いて 竿投げ棄てて釣りし魚を

川の瀬目蒐けて放ちやり 涙流してスゴスゴと

茅屋さして歸り行く 宗彦お勝の兩人は

悲哀の涙に暮れ乍ら 吐息つくづく老人が

後を慕うて探り行く。

川邊に建てる茅屋を、宗彦お勝の兩人は、漸く見つけたし、戸の外そとも面より、
「頼もう頼もう」

と訪へば、中より以前の翁、

翁「お前は、最前逢うたバラモン教の巡禮だらう。わしはバラモン教は嫌だ。けれど最前お前の言つた事に少しばかり首を傾けて考へねばならぬ事が有るやうだ。此里はバラモン教の信者許りであつたが、つい一年許り前から、三五教に全村擧つてなつたのだから、表向這入つて貰ふ事は出来ないのだが、川邊の一つ家を幸ひ、誰も見て居ないから、そつと這入つて下され。わしも此村の武志の宮の神主をして居る者だ。婆アに先立たれ、餘り淋しいので、毎日日々、漁りを樂しみ、婆アの靈前に清鮮な魚を供へて、せめてもの慰めとして居るのだ。それに就てお前に聞きたい事がある。サアサアお這入りなさい」

宗彦「バラモン教でも、三五教でも、道理に二つはない筈だ。開闢の初から、火は熱い水は冷たいと云ふ事は、チヤンと定つて居る。それ程バラモン教を排斥するのならば、お前の宅へ這入る事は中止致しませう。サアお勝、行かうぢやないか」

松鷹彦「お前は年が若いので直に腹を立てるが、マアじつくりとお茶でも飲んで、氣を落ち着け、話の交換をしたらどうだな。わしも一人暮しで、川端柳ぢやない

が、水の流れを見て、クヨクヨと世を送る者だから」

お勝「宗彦さま、お爺さまの仰有る通り、一服さして貰ひませうか」

宗彦「そうだなア、そんならドツと讓歩して這入つてやらうか」

松鷹彦「サアサア這入つてやらつしやい……（小聲で）……バラモン教の奴は、

どこまでも剛腹な奴だなア」

と呟き乍ら眞黒けの土瓶から、忍草の茶を汲んで勧める。

松鷹彦「お前は、見ればまだ若い夫婦と見えるが、能う其處まで發起したものだ

なア、是れには深い譯が有るだらう、一つ聞かして貰ひたいものだ」

宗彦「私も實の所は、來世が怖ろしくなつて來たので、罪亡ぼしに巡禮となつて、

各地の靈山靈場を巡拜し、今日で殆ど三年、この自轉倒島を廻つて來ました。私

も今こそ、斯うして猫の様に温順しくなつて了つたが、隨分名代の悪者でしたよ。

家妻を貰つては赤裸にして追出し、押かけ婿にいつては、其家を潰し、何度とな

く嬢泣かせの家潰しや、後家倒し借り倒しなど、悪い事の有らむ限りを盡して來

た所、最後の女房が私の不身持を苦にして、裏の溜池へドンブリコとやつて、ブ

ルブルブル、波立つ泡と共に寂滅爲樂となつて了つた。それから直に此お勝を女房となし、睦じう養家の財産を當に、朝から晩まで差向ひで、酒ばかり飲んで居つた所、嬢アの靈を祀つた靈壇から夜半頃になると、ポーツポーツと青白い火が燃えて来る。夫婦の者は夜着を被つて、息を凝らして慄へて居ると、冷たい手で二人の顔を撫で廻す厭らしさ。此奴ア先妻のお國の亡靈ぢやと合點し、一言謝罪らうと思つても、どうしたものか聲が出て來ぬ。長い夜中厭らしい聲がする。冷たい手で撫でる。こいつア堪らぬと、朝から晩までバラモン教のお經を唱へ通して居ると、其夜はお蔭で靈壇の怪は止んだ。さう斯うする間に、ザアザアと雨戸を叩く音、それが又死んだ女房の聲に聞えて來る。ソツと窓から透して見れば、お國の陥つた前栽の池から、白い煙が盛に立昇り、髪振り亂した青白い女房の顔、恨めし相に家の中を見詰めて居る。そこで女房に「別れて呉れ、さうしたらお國も解脱するであらうから」と何程頼んでも、此お勝の執念深さ、何うしても斯うしても離れて呉れませぬ。「お前が縁を切るなら切つて下さい。池に身を投げて幽靈になり、お國と一緒に幽靈同盟會を組織して襲撃してやる」……とアタ厭ら

しい事を吐しやがるので、家に居る事もならず、巡禮姿に化けて我家を飛び出しました。さうすると一年程経つた春の頃、辻堂の前を通れば、一人の女が癩氣を起して苦んで居る。……「オイお女中、此人通りのない辻堂で嘸御難儀であらう、介抱してあげませう」と近寄り見れば豈圖らむや執念深い此お勝が巡禮姿になつて、私の行衛を探して居るのにベツタリ出會し、アア何とした甚い惚方だらう、蛇に狙はれた様なものだ。こんな事と知つたなら黙つて通つたらよかつたのに……神ならぬ身の……ア、是非もなやと、天を仰いで歎息して居ました。死ねばよいのに、お勝の奴、私の顔を見るなり、癩も何もケロリと忘れ、「アイタ、アイタ……イタイはイタイが逢いたかつた」のぢや」とぬかしやがる。……エ、仕方がない、色男に生れたが我身の不仕合せ、と因果腰を定め、嫌ひでもない女房を……アタ恰好の悪くも何ともない……かうして伴れて歩いて居りますのだ」

お勝「コレ宗さま、何を言ひなさる。そりやお前の事ぢやらう。飛んで出たのは妾ぢやないか。お前、お國の亡靈が出るのは、妾が後妻に入り込んだのがお氣に容らぬのであらう。妾さへ出れば家は無事太平、お國の靈も解脱遊ばすに違ない。

是れ丈惚れた爺、何と言つても暇を呉れる氣遣はない、妾から飛び出すのが上分
別だと、お前に酒をドツサリ飲まし、夜陰に紛れて巡禮姿となり、バラモン教の
お經を稱へつつ、お國の冥福を祈つて、靈山靈地を參拜して彷徨ふ折しも、辻堂
の中で一人の男が、一尺位な光る物をニユツと出し、腹を出して自殺を圖らうと
して居る者がある。何處の誰人かは知らねども、是れが見捨てて行かれようかと、
吾身を忘れて躍りかかり、其光る短刀をひつたくり、……「モシモシ如何なる事
情か知りませぬが生は難く死は易し、先づ先づ氣を落ち着けなさいませ」……と
女の細腕に全身の力を籠めて止むれば、「イヤどこのお女中か知りませぬが、私
はどうしても死なねばならぬ深い理由が有る。お慈悲は却て無慈悲となる。どう
ぞ此腕放しやんせい」……と無理に振放さうとする。妾はバラモン教のお經を一
生懸命に唱へて居ると、其男は……「可愛い女房は幽靈が怖さに家を飛び出し、
行衛不明となりました。今迄澤山女も有つて見たが、あの位氣の好い、綺麗な女
房は持った事がない。あの女房と添はれぬのなら此世の中に生て居つても、何樂
みも無い。此廣い世の中を十年や二十年探し廻つた所で會へるとも會へぬとも分

りませぬ。娑婆の苦を遁れる爲に、此場で腹搔き切つて淨土參りをするのだ。ヒヨツとしたら女房も先にいつてるかも知れませぬ……と云つて見つともない、女の一人位に生命を捨てようとする馬鹿な奴は、どこの何者かと能く能く月影に照して見れば、アタ氣色の悪く無い、此人でしたよ。まるで蛇に狙はれた蛙の様なものだ」と、因果を定めて、此處まで隨いて來てやつたのですよ」

宗彦は眞赤な顔して俯向く。松鷹彦は、

「アハ、ハ、ハ、隨分おめでたいローマンスを澤山に拜聽致しました。千僧萬僧の讀經よりも、宅の婆アが聽いて喜ぶ事でせう。此爺だつて素より木や石では無い。若い時にや、隨分情話の種を蒔いたものだ。しかし過越苦勞は止めて置きませうかい。また姑の十八を言つて誇ると思はれても詰らぬからな、アハ、ハ、ハ。併しお前達はさうして夫婦仲良く意茶つき喧嘩をチヨコチヨコやつて、天下を遍歴して居れば隨分面白からう。……わしもお前等夫婦の苦樂を共にする状態を見て羨ましくなつて來た。どうしても人間は異性が付いて居らねば、世の中が何ともなしに寂しくて、春の暖かい日も冷たい様な氣分がするものだ」

宗彦「あなたのやうに年が寄つて、行先の短い爺さまでも、ヤツパリ女房が要り
ますかなア」

松鷹彦「定つた事だよ。雀百まで牝鳥忘れぬと云つて、年が寄れば寄る程、皴苦
茶婆でも戀しうなるものだ。夫婦と云ふものは、若い時よりも年が寄つてから本
當の力になるものだ。若い時には春の蝶が彼方の白い花や此方の黄色の花に飛び
交ひて、花の唇にキツスをする様に、花も亦喜んで受けてくれるが、斯う體中に
皴が寄り、皮が餘つて來、竹笠の様に骨と皮ばかりになつて、胃病の看板然と
瘦衰へては、誰だつて見向いてもくれやしない。其時には本當の力になつてくれ
る者は、爺に對しては婆ア、婆アの力になる者は爺だ。何程可愛い子が澤山有つ
てもヤツパリ大事の話は、夫婦でなければ、打解けて話せるものぢやない。……
ア、中年に「やもを」鳥になる者程不幸な者は有りませぬワイ」
宗彦「若い時の心と、年の寄つた時の心とは、それ丈違ふものですかいな。我々
から見ると、爺さまが皴苦茶婆を可愛がり、婆アが又目から汁を出し、水【ばな】
を垂れ、齒糞をためて枯木の様になつた、不潔い爺を大切にすることをみると胸が

悪い様な気がするものだが、なんと人間と云ふものは合點のゆかぬものですなア
松鷹彦「お前達は庚申の眷屬の様に、あつちやの枝に止まつては小便を掛け、こ
つちやの枝に止まつては小便を垂れて、結構な人間を弄物の様に取扱ひ、色が白
いの、黒いの、背が高いの短いのと、小言を云つて居られるが、わしの様な世捨
人になつて了へば、誰も相手になる者はありません。蚊だつて味が悪いと云つ
て吸ひ付きにも来てくれやしない。本當に寂しいものだ。それで、せめて婆アの
幽霊になりと、好きな魚を毎日供へてやつて、追懐して居るのだ。わしの眞心が通
うたと見えて、婆アは毎晩床の間に現はれ、わしと一緒に飯も食ひ、茶も飲み、
それはそれは大切にしてくれるが、併し何となしに便りないものだ。嬉しいと云
ふ表情は見せるが、唯の一言も爺さまとも、爺どのとも言やアしない。是れ丈が
現幽處を異にした爲でもあらうが、どうぞお前さまも今晚泊つて、婆アの幽霊を
一遍見なさつたらどうだ。お茶位は汲んでくれるなり、冷たい手でお前の様な若
い男なら握手して呉れるかも知れやしないぞ。そりやママ親切な者だ。死んでか
らでも、斯んな目脂、鼻汁を垂れる爺を慕うて来るのだから、わしもドツかに好

い所があるのだらう、アハ、ハ、ハ、
宗彦「お爺さま本當に出るのかい。……イヤお出ましになるのかい。私はもう幽
サン丈は眞平御免だ。併し随分よう惚けたものですか」
松鷹彦「きまつた事だよ。淋しい【やもを】の前で艶っぽい意茶つき話を聞かさ
れて、大變にわしも若やいだ。返禮の爲に一寸祕密の倉を開けて見せたのだ。夫
婦と云ふものはマアざつと斯んなものだ。夫婦の中の愛情は若いお方には一寸に
は分るものぢやない。併しお前さまは最前柳の木の前で、私が釣して居る時に、
一粒種の子に放れたのが悲しさに巡禮に廻つたと云うたぢやないか。今聞けば子
に別れたと言ふのは全くの嘘だらう。そんな憐れつぽい事を云つて、世人の同情
を買ひ、殊勝な若夫婦だと言はれようと思つて嘘八百を言ひ竝べて歩くのだらう」
宗彦「本來無東西、何處有南北、色即是空、空即是色、有ると思へば有る、無い
と思へば無い。死んだと思へばヤツパリ死んだのぢや。併し私の子を殺したと云
ふのは、ホギヤホギヤと唄ふ子ぢやない。日が暮れるのを待ち兼ねて妙な手つき
をして……コレコレ宗彦さま、夜も大分に更けました。隣のお竹さまはモウ就寢し

やつたと見えて砧の音が止まつた。あんたも好い加減にお就寝みなさいませ。又明日が大事ですから……と妙な目付して褥を布いて呉れる……猫が死んだと云ふのだ。猫かと思へばチウチウと啼く事もある。猫か鼠か赤ん坊か知らぬが、わしはマア、ニヤンチウ運の悪いものだ、ミカシラベにハラバヒ、御足邊にハラバヒテ泣き給ふ時現れませる神は、ウネヲのコノモトにます泣澤女の神と云ふ」

松鷹彦

「アハ、ハ、それは古事記の焼き直しぢやないか」

宗彦 「古事記の焼き直しぢやから、若夫婦が乞食に歩いとるのだ。お前さまも年を老つた癖に合點の悪い人だな。餘程耄碌したと見えるワイ。太公望氣取りで、何時まで川の縁で魚を釣つて居つても、西伯文王は釣れやしない。婆アの幽霊だつて喰ひ付きやしませぬぞえ。良い加減に諦めて、殺生は廢めなされ。【五生】が大事だ、そんな【六生】な事をする【七生】迄浮ばれぬからなア。今斯うして婆アさまの噂をして居ると、冥土に御座るお竹さまが今頃にや【八九生】と噓でもして居るだらう。【十生】も無い爺だと恨んで御座るであらうのに、思へば思へばお爺さま、私も身に詰されて、悲しうも何ともありません。……アン

アンアン」

と目に唾を付け泣いて見せる。

松鷹彦「年が寄つて目がウトイと思つて、そんな俄作りの同情の涙を零して見せても、聲の色に現れて居る。お前さまアタむさくるしい。唾を日月にも譬ふべき兩眼にこすりつけて、そんな虚禮虚式的な巧言は廢めて貰ひませうかい。本當に唾棄すべき心事と云ふのは常習乞食の遍歴行者の馬鹿夫婦……オツトドツコイ若夫婦連れ、モウモウわしも何だか胸が悪くなつて來た。サアサア早く此處を立つて貰ひませう」

宗彦「ハハア、俺が宗彦ぢやと思つて、胸が悪うなつたなぞと、爺さま隨分腹が悪いな」

松鷹彦「腹が悪いから、ムカつくのだよ。此冬枯れの木の様な寂しい爺イの所へ出て來て、お安くもないローマンスを見せ付けられて堪るものかい。お前も世界を遍歴して、苦勞の味が分つて居るなら、氣を利かして、トツトと歸つたらどうだ。併し乍らウラル教の言ひ草だないが、一寸先や暗の夜だ、諸行無常だ。隨分

足許あしもとに氣きを付つけて行ゆきなされ。左様さやうなら……」

お勝かつ「モシモシお爺ぢいさま、此この宗彦むねひこはチツト智慧ちゑを落おとして來きてますから、どうぞ氣きに障さへて下くださいますな。妾わたしだつて斯こんな分わからずやと旅行りょかうするのは、【胸むね】が惡わるい
のだけれど、妾わたしが【尻しり】を振ふれば宗むねさまが【腹はら】を立たて、【腰こし】を据すゑて頑張ぐわんばり、
【手て】にも【足あし】にも合あはないから、【口くち】惜やし乍ながら【目め】を塞ふさいで、【鼻はな】持ち
ならぬ香にほひのする男をとこを連つれて歩あるいて居をるのだ。本當ほんたうに好すかぬたらしい野郎やらうですよ」
宗彦むねひこ「コラコラお勝かつ、貴様きさまは何處どこまでも夫をとこを馬鹿ばかにするのか」

お勝かつ「へん、夫をとこなんて、膾膾をつとせい膾膾をつとせいが聞きいて呆あきれますワイ。お前まへさまは人ひとの宅うちを、女によう
房ばうの有ある身みを以もつて、毎まい晩ばん々まいばん連れん子じの窓まどを覗のぞきに來きて、水門壺すいもんつぼへ落おち込み恥はぢをかき、
結局しまひのはてにはお勝かつさまを呉くれねば、死しぬとか、走はしるとか、男をとこらしうもない吠面ほえづらかわい
て、近所きんじよ合壁がつべきに迷惑めいわくを掛かけたぢやないか。それを先妻せんさいのお國くにさまが苦くにして病氣びやうき
を起おこし、とうとう歸かへらぬ旅たびに赴おもむかしやつた。墓はかの土つちのまだ乾かわかぬ前さきに、無理矢理むりやり
に妾わたしを是非ぜひとも共ともと言いつて、ひつぱり込こんだと云いふデレさんだから、妾わたしもホトホトと
愛想あいさつが盡つきて來きた。三文一文さんもんいちもんたす助たすけて貰もらうたのでもなし。嫁入よめいりに持もつていつた着物きもの

も帶も、何も何も六一銀行へ無期徒刑に落してしまひ、本當に仕方のない男だよ。
誰か目鼻のついた女が出て来て、お前を喰はへて歸んで呉れるものがないかと、
朝から晩まで聞えぬ様に暗祈黙禱を續けて居るのだが、根っから、金勝要大神さまも
まもどうなさつたのか、添ひたい縁なら添はしてもやらう、切りたい縁なら切つ
てもやらうと仰有る癖に、此頃は神さまも聾になられたと見えて、見向きもして
下さらない。……ア、残念な、口惜しい、……わしはお國の靈魂ぢや、アンアン

アン

宗彦「何だ、最前から俺の……善くもない事の棚卸ばかりやりやがると思へば、

お國と二人連だな。随分厭らしい奴を連れて歩いたものだワい」

お勝「半顯半幽だよ。幽顯一致、靈魂の【奥に】は【おくに】さまが納まつて御

座るのだ。お國は何處と尋ねて見れば、……アイわたしは阿波の徳島で御座りま

す、……と云ふ様なものです、オホ、

宗彦「爺さま、一つ……あなたも武志の宮の神主さまと云ふ事だから、一遍此奴
を審神して下さらぬか。お國を放り出して、お勝の本當の肉體ばかりにして下

さいな

松鷹彦「ソリヤお前さま可いませぬぞえ。結構な神様の御神懸りだ。國常立尊様

の御分靈かも知れんぞや。イロイロに化けて化けて此世を御守護なさる神様ぢや

から……天勝國勝と云つて、お國様がお懸りなさつて御守護して御座るのだ。さ

うしてお前は女房のお勝に甘いだらう。そこでアマカツ、國カツだ。……結構な

國所を立ち退いて來たから、國所立ち退きの命様の御守護だよ。俺の様な者がウ

ツカリ審神でもしようものなら、それこそ又俺が憑りうつられて、年が寄つてか

ら住み慣れし第二の故郷を後に國所立退きの命にならねばならぬから、マア此審

判は御免蒙らうかい

お勝俄に體を振り、神懸り状態になり、

お勝「金勝要大神であるぞよ。切りたい縁なら切つてもやらう。添ひたい縁なら

添はしてはやらぬぞよ。宗彦は今迄澤山な女をチヨロまかした罪惡の報いに依り

て、唯今限りお勝との縁を切るぞよ。ウンウンウン

松鷹彦「アハ、ハ、ハ、お勝さま、ウマイウマイ、モウーしきり神懸りをやつて下

さい。此奴アどう考へても私憑だ。コレコレ宗彦さま、胸に手を當てて、今迄の事を能う考へて見るが宜い。神様は決して無理な事は仰有いませぬぞ」

宗彦「そうだつて、私の女房を、頼みもせぬのに、縁を切るとはあまりだ。切ると云つても、金輪際こつちから切りませぬワイ」

お勝「エー思ひ切りの悪い男だなア。それだから此肉體が嫌ふのだ。男は斷の一字が肝腎だ。どうだ是れから此肉體に先妻のお國に、お光、お福、お三、お四つ、

お市、お高が同盟軍を作つて憑依して來るが、それでも其方はまだ未練があるか、どうだ厭らしい事はないか」

宗彦「何が厭らしいかい。どれもこれも因縁あつて假令三日でも夫婦になつた仲ぢや、肉體の有る女房を數多連れて居ると、經濟上困るが、物も喰はん嬢アなら、

千人でも萬人でも出て來い。アア色男と云ふものは偉いものだ。幽冥界からまでもヤツパリ電波を送ると見える。何だか知らぬが、肩が重くなつたと思へば、

此れ丈澤山な女房に對し、責任を雙肩に擔つて居るのだから無理もないワイ。正式結婚の女房の靈も、準正式も、雜式も、野合も何も彼もやつて來い。此頃は多

數決の流行る時節だ。何程偉い者だつて少數黨では目醒ましい仕事は出来やしな

いワ

松鷹彦「オホ、宗彦さま、お前の背後を一寸御覽、針金の妄念の様な、蠅
螂腕を出して餓利法師が踊つて居るぢやないか」

宗彦「ア、そんな事言うて下さるな。見さへせねば良いのだ。目程不潔いものの、
恐ろしいものはない」

お勝は「ウーン、ドスン」を腰を下し、ケロリとした顔で、

お勝「宗サン、妾何か言ひましたかな。夢でも見とつたのか知らぬ。澤山な厭ら
しい亡者が、柳の木の下で、宗彦は生前に我々を機械扱ひにしよつたから、今

晩は餓鬼も人数だ。力を協して、素首を引き抜いてやらう」と相談して居りまし
たよ。その時に妾にも同盟せいと言はれたのです。けれども、あまりお前さまが

可哀相だから「さう皆さま慌るに及びませぬ。何れ彼奴も年が寄つたら此處へ來
るのだから、其時に苛めてやりさへすれば良いだないか」と一時遁れに其場を切

り抜けようとしたが、中々亡者の連中聞きませぬがな。今の間に宗サンの生命を

取らねば、死ぬ迄待つて居つたら我々は又もや現界に生れ替り、幽冥界は不在になつて了ふ。そうだから讎を討つのは今の内だと言つて、それはそれはエライ勢でしたよ。用心しなさいや」

宗彦「そりや貴様、本當か、嘘ぢやないか」

お勝「嘘か本真か、今晚中に分りますわいな」

宗彦「そら分るだらうが……どちらだ。實際か、虚言か聞かして呉れ」

お勝「幽冥の秘、妄りに語る可らずと、どこともなしに神様の聲が聞えました。

マア今迄の年貢納めだと思つて、楽しんで日の暮れるのを待ちなさい。あのマア青

い顔、オホ、々、々、」

宗彦「お爺さま、大變な事になつて來た。愚圖々々して居ると、忽ち此處に「や

もめ」が一人出來ますワイ。何とかして助けて下さいなア」

松鷹彦「わしも此村で「やもめ」の連れが無うて、寂しうて困つて居つたのだから、お前さまも早く「やもめ」が出來る様に死なつしやい、その方が結句氣樂

で宜からうぞい」

宗彦「何が何だか、サツパリ分らぬ様になつて来たワイ。夢でも見とるのでは有るまいかなア」
と頻りに頬を掴つて見て居る。かかる所へ捻鉢巻をした二人の男、慌ただしく入り來り、

留公「松鷹彦の神主さま、お前は聞く所に依れば、又してもバラモン教の行者を引張込んで、しやうもないお説教を聴聞しとると云ふ事だ。さう猫の目の様にクレクレと精神を變へて貰うと、村の者が迷つて仕方がない。一體どうする量見だ。お竹さまが死んでから、お前さまは益々變になつたぢやないか」

松鷹彦「チツトは變にならうかい」
留公「變にもならうかいも有つたものかい。改心して殺生を止め、神妙にお宮さまの御用を勤めたらどうだ。あんまりお前の行ひが悪いので、村の者が此間も庚申待に集つてお前をおつ放り出し、三五教の眞浦さまを跡釜に据わつて貰はうと云ふ相談があつたぞ。こんな事ども村の連中に聞えようものなら、それこそ今日限り叩き拂だ。そうなればお前さまも可哀相だからと思つて、氣を注げに來たの

だ。お春やお弓の奴、チヤンと知つて、俺に話しよつたから、俺は決して誰にも言ふぢやないと口止めをして来たのぢや。どうだ止めて下さるか」

松鷹彦「わしは武志の宮の神様にお仕へして居るのだ。決して村の人間のお給仕役ぢやない。神様から命じられたものを人間が寄つて集つて動かさうとした所で、そいつア駄目だ。そう云ふ事をする村中に神罰が當つて、米も麥も穫れぬ様な饑饉が出て来るぞや」

田吾作「お爺さま、お前の仰有るこたア一應尤もだが、ヤツパリ人間の皮を被つて居る以上は、人間の規則にもチツトは従はねばなるまい。そんな我が強い事を言はずに、チツトは省みたらどうだい」

松鷹彦「馬鹿にするない。人間の皮被つとるなんぞと……骨から腸まで、魂まで、皆人間だ。皮被つとる奴はお前達ぢや」

留公「爺さま、お前さまこそ魂が四つ足ぢやで。其證據にや、川瀬か何ぞの様に、神様の方はそつち除けにして、魚捕ばかりに憂身をやつし、盆過の幽霊の様に、水ばつかり羨りさうに眺めて暮して居るぢやないか。一體神様にお仕へする者が、

殺生せつじやうをするすると云いふ事ことが有あるものかいか」

松鷹彦まつたかひこ「わしは神様かみさまに仕つかへて居ゐるから魚さかなを捕とるのだ。御神前ごしんぜんで海河山野うみかはやまぬの珍味物うましもの

だとか、鰭はたの廣物ひろもの、鰭はたの狭物さなものと稱となへ乍ながら、魚一匹さかないつびき、誰たれもお供そなへする者ものがないのだ

から、仕方しかたなしに此老人このとしよりが魚さかなを漁とつてお供そなへするのだか」

留公とめこう「へん、うまい事こと言いつてるワイ。大方おほかた自分の喉のどの神さまかみに供そなへるのだらう。

神主かむぬしは神主かむぬしらしうやつて居をればいいのだ。猫ねこは鼠ねずみを捕とるのが商賣しやうばい、獵師れふしは獸けだものを獲と

り、漁夫ぎよふは魚さかなを漁とると、チヤンと天則てんそくが定きまつて居ゐるのだか」

松鷹彦まつたかひこ「それだつて、わしが漁とつても、漁師れふしが漁とつても、生命いのちの無なくなるのは同おな

じ事ことだ、そんな開ひらけぬ事ことを言いふものだないワイ。息子むすこは嫁取よめとる、娘むすめは婿取むことると云い

つて、お前達まへたちは若わかいから樂たのしみだが、俺おれの樣やうな老ぢぢ爺ぢは、あんまり外分ぐわいぶんが悪わるくつて、

嫁よめを取とる譯わけにも行ゆかず、仕方しかたが無ないから魚さかなを漁とるのだ。チツトは大目おほめに見みて、長ちやう

老らうを敬うやまふのだぞ。長幼序ちやうえうじよありと云いふ事ことを知しつて居をるか。今日こんにちは養老會やうらうくわいと云いつて、

老人としよりを大たい切せつにする會くわいが、彼方あちらにも此方こちらにも開ひらけて居ゐるぢやないか。それに此村このむらの

奴やつア、年としが老よつたら姥捨山うばすてやまへでも捨すてたら良いいものの樣やうに思おもつて居ゐるから、事ことが

面倒になるのだ。老人は村の寶、生字引だ。俺が此村に居ればこそ、古い事が分るのだないか。俺の體は俺一人のものぢやない。一方はお宮様の召使、一方は此村の骨董品だ……否如意寶珠の玉だ。今こそ貴様達は不潔い爺いだと云つて、澤山さうに思うて居るが、俺が死んでみい、思ひ出す事が幾らでも出来る。……アア松鷹彦様がモウちつと生きて御座つたら、御尋ねするのに……斯んな事なら生存中に……あれも聞いて置いたら良かったに、此れも教へて貰つて置けば宜かつたのに……と後悔をして、泣いても、悔んでも後の祭りだ。せめては故人の徳を忘れぬ爲だと云つて、宮の境内か川の縁に記念碑を建てて何程拜んだつて、石になつてから物は言やしないぞ」

留公「お前の様な爺さまに聞いたつて、何が分らうかい。併し一つ聞いて置かねばならぬ事がある。其奴ア、どこの淵には魚が餘計寄つとるか……と云ふ事だ。

なア川瀬の先生」

松鷹彦「エー大人髯りの骨なぶりだ。グツグツ言うと、死んだら目が潰れて物が言へなくなり、身體がビクとも動かなくなつて了ふぞ」

留公、肩を上げ下げし、鷹が羽を擴げた様な調子で、體を揺り、舌を出し、
留公「ウフ、、、」

と笑ふ。

松鷹彦「貴様の其状態は何だ。鳶の様なスタイルをしやがつて……」

留公「オイ、お前がバラモン教の驅落巡禮だなア。何だ人氣の悪い鯨面をしよつ

て……此川獺先生の所へ無心に來よつたのか。……コリヤ此村はバラモン教は禁

物だ。布教禁制の場所だぞ。而も氣樂さうに女房を連れて何の事だい。そんな事

で神聖な神様の御用が出來ると思つて居るのか。一時も早う、足許の明かるい間

に歸つて了へ。歸るのが厭なら、此川へドブンと飛び込め。さうすりや寧埒が明

いて良いワ」

宗彦「ハイハイ、私は御存じの通りバラモン教のお經を唱へて、巡禮に廻つて居

る者で吾子の冥福を祈る丈の者、人さんに宣傳なぞは決して致しませぬ。私の身

體には大變な地異天變が勃發したので、何所の騒ぎじゃ御座いませぬワイ。女房

が今となつて暇を呉れの、何のと言ふものだから……」

留公「ハツハア、地異天變て、どんな事かと思へば、嬪アにお尻を向けられたのだなア、そりや氣の毒だ。俺も覚えが有る。それなら兩手を擧げて同情：否贊成だ。オイオイ奥さま、斯んな結構な、青瓢箪然たるハズバンドを持ち乍ら、そんな綺麗な顔したナイスのお前が、こんな所までやつて来て、肱鐵砲を嚙ますとはチツト人情に外れては居やせぬかい」

お勝「妾は譯を聞いて貰はねば分りませぬが、あまりの事で、モウ見切りを付きました。同じ事なら：あの：見た様な何々に、何々したう御座います」

と笠に顔を隠す。

留公「ハツハツハア、分つた。お前のホの字とレの字は、トの字とメの字の付く男に秋波を送つて居るのだな。生憎様乍らトーさまには、立派な烏の様な色の黒い「おから」と云ふ奥さまが御座んすわいな」

お勝「イエイエ妾は若い人や、土臭い蛙切りは蟲がすきませぬ。同じ添ふのなら此お爺さまの女房になりたいたいのですよ。年は老つて居られても、どこともなしに崇高な御容貌、今年で三年が間、廣い世界を股にかけて探して見ましたが、こん

な立派な氣品の高いお方に逢うた事は有りませぬ。まるで太公望の様な御方ですワ。此處へ来るなり、宅のハズバンドが厭になつて了つたのですよ、ホ、ホ、ホ、ホ、

留公「是れは又エライ物好も有つたものだナア、ヘーン」

と言つた限り、舌を斜かひに噛み出し、白眼を剥いて、兩手の遣り場が無い様な調子で、下前方へ俯向けに手を垂らしシユーツと延ばし、呆れた「ふり」をして見せる。

田吾作「わしは未だ獨身だがナア。アアどつかに合口があつたら、一つ買ひたいものだ」

留公「コリヤコリヤ短刀なんか買つて如何するのだい。過激派取締の喧しい時に、そんな物でも買ひに往かうものなら、それこそポリスに追跡され、終局には高等警察要視察人簿に登録されて了ふぞ」

田吾作「女房を貰つて、警察に「つけ」られるのなら、村中の奴ア、みんな高警要視察人ぢやないか」

留公「貴様も譯の分らぬ奴ぢやナア。……破れ鍋に綴蓋と云つて、それ相當の女

房ばうを持たねば、遂つひには破鏡はきやうの悲かなしみを味あぢははねばならぬぞ。こんな立派りつぱなナイスに對たいして秋波しゅうはを送おくるのは、チツと提燈ちやうちんに釣鐘つりがねだ。併しかしお爺ぢいさま、枯木かれきに花はなが咲さいたやうなものだ。流石さすがはエライ。それなれば私わたしも贊成さんせいだ。貰もらひなさい。其代そのかはりに私わたしがチヨイチヨイと水汲みづくみ位くらゐ、手傳てつだひに來きてあげるワ

お勝かつ 『オホ、、、』

宗彦むねひこはクルクルと着物きものを脱ぬぎ棄すて、禪まはしまで除とつて、川かはの早瀬はやせへ惜をし氣げも無なく、笠かさも蓑みのも杖つゑも一いっしょ緒じょに投なげ込こんで了しまつた。

宗彦むねひこ 『ヤアお爺ぢいさま、モウ是これでバラモン教けうのレッテルを殘のこらず剥はがし、生うまれ赤あか兒こになつて了しまつた。どうぞお前まへさまの弟子でしにして下ください。さうして女房にやうぼうは貰もらつてやつて下くださいませ。今日けふからは女房にやうぼうをあなたあなたの奥おくさまとして敬うやまひます。ナアお勝かつ、遠慮えんりよは要いらぬから宗々むねむねと呼よびつけにするのだよ』

お勝かつは又またもヤクルクルと下帶したおびまで脱ぬぎ棄すて、同おなじく蓑みのも笠かさも、金剛杖こんがうじゑも一ひと括まとにしてザンプとばかり投なげ込こんだ。

宗彦むねひこ 『ア、やつぱり女房にやうぼうは女房にやうぼうだ。斯かうなるとチツとチツと、ミとレンが殘のこつと

る様な氣がする。併し乍らお爺さま、着物を私に恵んで下さい。何でも宜しいから……」

松鷹彦「さうだと云つて、わしも北國雷ぢやないが『着たなり』だ。山椒の木に飯粒で、『着の實着の儘』、どうする事も出来やしない。先祖譲りの洋服で、二人共暫く辛抱するのだなア」

留公「ヤア宅の嬢アの着物を、俺が取つて来て、裸ナイスに進上しよう。田吾作、貴様はお前の一張羅を献上せい」

田吾作「貰うて下さるだらうかな。わしはチツと背が低いから、身に合ふだらうか」

留公「合うても合はいで、無いより優しだ」

松鷹彦「ヤア留さま田吾作さま、世の中は相身互ひぢや。さうなくてはならぬ。是れもヤツパリ三五教の感化力のお神徳だ……」

(大正一一・五・一三 舊四・一七 松村眞澄録)

第六章 梅花の痣（六六八）

松鷹彦は今迄飯よりも好きであつた漁を斷念し、武志の宮の社務所に居を轉じ、宗彦、お勝の兩人と共に朝夕神に仕へ、且三五教の教理を細々乍ら傳へてゐた。田吾作、お春の兩人は御宮の參拜を兼ね、爺さんの話を聽く可く立寄つた。田吾作「お爺さま、お前さまも此頃は大分に村中の評判が善くなつたぞい。朝は早うから御祝詞の聲が聞えるお蔭で、村中が無病息災で全く松鷹彦様のお蔭だと言つてゐますぞや。尚宗彦さま、お勝さまの評判も仲々よろしい。併し村の者の話には、お前さまが此處へ來て神主になられてから、随分年も経つたが、お竹さまは亡くなり、後には女房子の無い一人の「やもを」暮し、本當に御氣の毒だ。一層の事宗彦さまとお勝さまを子に貰つて、後を繼がしたら如何だらうかとチヨイチヨイ村人の話頭に上りかけましたよ」

松鷹彦「私は最早三五教へ這入つてから、今迄の執着心を「すつかり」と除つて了ひ、幽界の結構なことも悟つたのだから、後繼を貰つて心配をするよりも一層

ひとり 一人で餘生を送る方が何程氣樂だか知れやしない。此やうな老耄れた爺の子になつて呉れる者は恐らく廣い世界にありますまい。私が亡くなつた時は滅多に捨てて置きはせまい。村人の情で何處かへ葬つてくれるだらう。それよりも幽界に行つて姿と一緒に暮す方が、現世に執着心が残らなくてよい」

お春 「お爺さま、そりやそうだがお前さまがもしも病氣になつた時には、矢張り世話をして呉れるものがないぢやないか。何程村のものだつてさうお前さまの病氣に付添うて看病する譯にも行くまい。野良の暇の時ならば兔も角も、田植の最中や、稻刈りの最中に患ひでもなさつたら、それこそ仕方がありますまい。なんとか後繼をこしらへて置きなさい」

松鷹彦 「イヤもう藁の上から育てた子供なれば、なんとか無理を言つて介抱もして貰へるだらうが、俄に貰つた息子に對して、さうツケツケと言へるものでもなしに、却て遠慮をせなくちやならない様なものだから、もう何卒それだけは勧めて下さるな」

田吾作 「お前さま、子は無かつたのかい」

松鷹彦「私は元は紀の國で生れたものだが、素盞鳴尊様が高天原を神追ひに追はれて遠い國へ御出ましになつた其時に、世の中は一旦は常暗の夜になつた事があ
る。其の時だつた、惡魔が横行して男二人、女一人の三人の子供を何者にか攫は
れて了ひ、女房と二人が泣きの涙で、十五六年前に此處へ出て来て村人の情に依
つて、此の宮守をさして貰ひ餘生を送つて居るのだ。アア我が子は如何なつた
であらう。今迄は女房や子の事は好きな漁に心を紛らして忘れてゐたが、こんな
話が出ると又思ひ出す」

と涙含む。宗彦は、

宗彦「もしお爺さま、貴方は今紀の國のものだと仰有いましたな。一體何の邊で

ございます」

松鷹彦「私は熊野の生れた」

宗彦「ハテ不思議なことを承はります。私も實の所兩親がわからず、他人から熊
野邊の生れたと子供の時分に聞いたことがあります。私は大臺ヶ原の山奥の巖窟
に惡神に攫へられて、長らく閉ぢこめられて居りました。其處へ立派な神様が現

はれて、「お前はこれから浪速の里へ往て苦勞せよ。一人前になつたら世界を順禮せい」と仰有いました。それを未だに夢のやうに覺えて居ります。さうして私も兄弟が三人あつたさうです。何處へ行つても親もなければ兄弟もない者は、誰も可愛がつては呉れず、漸く成人して牛馬にも踏まれないやうになつた頃から、徐々酒を呑み、そこら邊りへ養子にも幾度か行つて見、又家も持つて見ましたが、何分子供の時分から乞食のやうに、其處中を彷徨うて育つて來たものですから、家を持つつの、養子に往くのと云ふことは窮屈でツイ飛び出し、自棄酒を呑んで女房に心配をかけ、澤山の女房を先立たしました。或人に聞けば私は丙午の年に生れたとかで、女に崇る身魂ぢやさうです。私も今は斯うして若い、子が出來ないのでお爺さまのことを思ふにつけ、先が案じられてなりませぬ」

松鷹彦「お前さま、腋の下に梅の花のやうな痣がありはせぬかなア」

宗彦「そりや又貴老は何うして御存じですか」

松鷹彦「イヤ私の子供は男の方は二人とも梅の花の痣が付いて居る。兄は左の腋の下、弟の方は右の腋の下にハッキリと出てゐた筈ぢや。それを頼りに夫婦連れ、

四五年が間探して見たが、人を捉まへて一々裸體になつて腋を見せて呉れと言ふ譯にも行かず、夏になると海水浴場へ往つて、わが子の年輩位な人の腋の下を一々調べて見たが、何を言つても見え難いところ、温泉へ行つても見當らず、これ位心配したことは無い」

と又俯向く。

宗彦「お爺さま、私の右の腋の下に何だか花のやうな型がありますが、一寸見て下さらぬか」

松鷹彦はビクリツと身を自然的に「しやくり」乍ら、

松鷹彦「ドレドレ一寸見せて下さい。アアほんにほんに擬ふ方なき梅の花の痣、五辨の梅が上の方は少し缺けて居つたが、矢張り缺けて居る。さうするとお前は竹と云ふ男ぢやなかつたか」

宗彦「ハイ子供の時は竹と云ひました。バラモン教から宗彦といふ名を貰つたのです」

田吾作は二人の顔を見較べて見て、

田吾作「お爺さま、頭の恰好と云ひ、小鼻のつんもりとした邊から耳の鹽梅、よく似てをるぢやないか。ヒヨツとしたらお前さまの子ぢやあるまいかな」

松鷹彦「擬ふ方ない私の息子だ。アーこれ宗彦、ようマア無事で居つて呉れた。これと云ふのも矢張り神様の御神徳だなア」

と泣き伏す。

宗彦「お父さままでございましたか、存ぜぬこととて御無禮を申しました。どうぞ許して下さいませ」

と宗彦は、カツパと伏して嬉し泣きに聲を上げて泣く。お勝は手を組み思案に暮れ乍ら、松鷹彦を抱き起し、

お勝「モシモシお爺さま、貴老、一人の息女があつたと仰有いましたなア、其の息女さまには何か特徴は有りませぬか」

松鷹彦は聲をかすめて、

松鷹彦「息女の特徴と云ふのは、臍の上に三角形なりに黒子が行儀よく出来て居たやうに覺えて居る。アーアー一人の倅に廻り合つて嬉しいが、兄の松や、お梅は

何處の何處に暮して居るであらうか。一つ叶へば又一つ、折角除れた執着心が再發して來た、ほんに苦しい浮世だなア」

と打沈む。お勝の胸にグツとこたへたのは臍の上の三角形の黒子、宗彦と夫婦になつて暮して來た關係上、名乗りもならず、一人胸を痛めてゐる。

松鷹彦「妙なことを訊ねるが私の心の「せい」か、何となくお前が戀しいやうな氣がしてならぬのだ。竹に何處ともなしに似たやうな所もあり、女房のお竹にも何處か似て居るやうだが、若しや私の息女ではあるまいか」

お勝は口ごもり乍ら、

お勝「私も親も兄弟もあつたさうですが、行方は今にわかりませぬ。併し乍ら今あなたのお有りる黒子はありませぬ」

松鷹彦「アーさうかな、それは幸ひだつた。萬一娘だとすれば血族結婚になり、天則違反で神様に罪せられるから、可愛さうだがマア兄妹でなくて結構だつた」
お勝「兄妹の結婚はそれ程罪が重いのですか。併し乍ら萬一知らずに結婚をしたら、それは如何になりますか？」

松鷹彦「サア、それは何とも私にはわからない。餘り例の無い事だから、この年になつても聞いたこともなし、三五教の眞浦さまにも教へて貰つたこともないのだから」

宗彦「知らぬ神に祟りなしと云ふぢやありませんか。萬一世間にそんな夫婦があるとしても、慈悲深い神様は屹度赦して下さいませう」

お勝は兩の袂を顔に當て、身を悶えて泣いて居る。

田吾作「コレコレお勝殿、結構な父子の對面にお前さまが泣くと云ふことがあるものか、ハ―羨りのだなア。宗彦さまは焦れて居つたお父さまに會うて嬉しからうが、私は何時になつたら會へるだらうと思ひ出して泣くのだな。マ、何事も神様に任して時節を待ちなさい。屹度信心の徳に依つてお父さまや、お母さまが現世にござつたら、會はして下さるでせう」

お勝「ハイ有難うございます。よう云つて下さいました。折角親子の……イエイエ親と子と御對面なさつて喜んでゐられるのを御喜びもせず涙を零して見せました。誠に濟まぬことでございます。何卒お父様否宗彦さまのお父様、どうぞ私も

子の様に思うて可愛がつて下さいませ。これからは打つて變つて親のやうに思つて孝行致します」

松鷹彦「ア、よう言うて下さつた。私も他人のやうには、どうしても思へない。

親子も同然互に親切を盡し合つて神様の御用を致しませう」

三人は嬉し涙に暮れて、暫時無言の儘沈黙の幕が下りた。春の日は晃々として

武志の森の千年杉の梢にかかつてゐる。鳥は卵を孵化し、雌雄互に飛び交ひ、餌を漁つて子鳥に與へてゐる。子鳥は黄色い口を裂ける程開けてゐる。

田吾作は性來の慌者、

田吾作「ヤア爺さま、宗さま、親子の對面御芽出度う。ドーレこれから歸つて御祝ひでも持つて來ませう。オイお春さま、お前も何か祝はにやなるまい。さア歸らう」

松鷹彦「モシモシ田吾作さま、お春さま、どうぞ暫らく村の人に言うて下さるな。

又騒がせると氣の毒だから」

田吾作「何を爺さま仰有るのだ。地異天變、手の舞ひ脚の踏む所を知らざる大觀

喜天様の御來迎、これが黙つて居られますか。サアお春さま、早く早く」

と促し、爺の呼び留るのも聞かばこそ、捻鉢巻をグツと締め、尻【ひん】捲り、我家を指して馳歸る。

松鷹彦「アア親切な男だ。よう【ちよかつく】人だが、併し彼れ位心のキレイな方はない、アア見えても心は確りして居る。村中の賞めものだ。どうぞ好い嫁さまをお世話して上げたいものだ」

一方田吾作は何よりも早く留公が離家に居る眞浦の宣傳使に報告せむとし、大變大變」

と道々呼ばはり乍ら、近所に火事でも起つた様な周章方で走つて來た。留公は鋏を擔げて門口へ出ようとするとところであつた。

田吾作は、

「オイ留公、貴様は鋏を擔げて何處へゆくのだ。大變だ、地異天變だ、欣喜雀躍手の舞ひ、脚の踏む所を知らぬ大事件が突發した。サアサア早く貴様も用意をせぬかい、何をグツグツしてゐるのだ、野良仕事位は休んでも好い。天變だ天變だ」

と地團太ふんで踊り廻る。

留公「貴様さう云つたつて理由も言はずに解らぬぢやないか。一體なんだい」

田吾作「なんだつて解つとるぢやないか。芽出度いことだ。夕々、大變だ。早く

宣傳使の眞浦さまに取次で呉れ」

留公「そら取次がぬ事は無いが、ちつと落ちつかぬかい。詳細に報告せなくては

事件の眞相どころか、端緒も探れぬぢやないか」

田吾作「エー邪魔臭い、愚圖々々して居ると喜びが何處かへ消滅して了ふと大變

だ。邪魔ひろぐな」

と無理矢理に眞浦の居間に走り込んだ。

眞浦「田吾作さま、大變な勢ひで何事が起つたのだ」

田吾作「何事が起つたもあるものか。梅ぢや梅ぢや、梅の花ぢや」

眞浦「梅だと云つたつて解らぬぢやないか。梅が必要なら裏に澤山なつてゐる。

トツトとむしつてゆかつしやれ」

田吾作「そんな事どころか。梅と云つたら梅ぢやな。合點の行かぬ宣傳使だな。

親子の対面だ」

斯かる處へ留公は跡を追つて走り來り、

留公「オイ田吾作、貴様は氣が違ひ居つたのか。チト確りせぬかい」

と背中を握り拳で二つ三つ叩いた。

田吾作「アイタ、腕が抜けるやうな目に會はせやがつた。オーそれぞれ

「かひな」ぢや、かひなぢや かひなぢや」

と腋を左の食指で頻りに指し示す。

眞浦「腕が何うしたと云ふのだい」

田吾作「腕に梅の花が咲いたのだ。五辨の上の奴がちよつと缺けて居る。それで

親子の対面だ。武志の森の社務所で腕に咲いた梅の花、三千世界一度に開く梅の

花のやうな喜悅だ」

眞浦「とんと合點が行かぬ哩。田吾さま、もうチツト落ちついて云つて下さい」

田吾作「他人の乃公まで、あまり嬉しうて、これが何うして落ちつけよう。梅ぢ

や梅ぢや。武志の森まで往つて見りや解る」

眞浦「益々解らぬことを云ふぢやないか」

と訝かし相に首を傾ける。其處へお春が遅れ馳せにやつて来た。

お春「モシモシ大變な喜びが出来ました。田吾作さまに大體のことは、御聴きで

せうから私が申上げるものも二重ですが、本當に結構でございますよ。松鷹彦の

お爺さまも到頭親子の對面をなさいました」

眞浦「何ツ、お爺さまが親子の對面、して其子と云ふのは誰のことだな」

お春「彼の此間行者になつて出て来た宗彦さまが、お爺さまの子だつた相です。

右の腋の下に梅の花の痣があつたので、それで親子と云ふことに氣が付いたので

す。彼の方は紀の國の生れで、名前は竹さまとか云つたさうです。さうしてまだ

松さまといふ兄があり、お梅さまといふ妹があるさうです。それは未だ分りませ

ぬ。併し乍らお爺さまは竹さまに會つたので大變な御喜び、どうぞ貴方も早く武

志の森迄いつて神様に御禮を申して下さい。村中明日は總休みをして御祝ひをせ

なくてはなりませぬから」

眞浦「何ツ、三人兄妹、さうして竹と云ふのが彼の男か」

田吾作「オーさうぢやさうぢや、なにを愚圖々々して居るのだ。早くいきなさらぬか。お春さま女だてら構はひでも好いワ。早く歸つて御馳走の用意をせないか」
お春は「ハイ」と答へて足早に立ち去つた。眞浦は手を組み、

眞浦「ハテナ」
と云つたきり、深き思案に沈むものの如くである。

田吾作「ハテナもあつたものかい。サアサア御輿を上げたり上げたり。お前さまは斯んな芽出度いことが何とも無いのか。何を愚圖々々してゐるのだ。それだから私に鍬の尖で指を斬られるやうな事が出来るのだ。サア早う早ういつてお呉れなさい」

眞浦は何故か太息を吐き、無言の儘うつむいて頻りに考へてゐる。

田吾作「オー今思ひ出した。此間お前さまが襷身の時に私がチラと見ておいた、お前さまの腋の下に梅の痣がありましたなア。それならひよつとしたら爺さまの子で松と云ふ男かも知れはしない。何うだい、違ひはありませんまいがな」

眞浦「コレコレ田吾作さま、滅多な事を云つて下さるな。梅の紋の痣のあるもの

は、廣い世界には澤山あるだらう。さう輕率に云つて貰つては困るからなア」

田吾作「なに化物のやうに人間の身體に、梅の花の咲いた奴が、さう澤山あつてたまりますかい。「うめ」い言ひ譯をしなさるな。ドーレー一つこれから爺さまの所へトツ走つて注進だ。ヤア天變だ、天變だ」

と驅出す。

眞浦「コレコレ留さま、一寸田吾作さまを捉まへて下さいな」

留公は、

留公「合點だ」

と田吾作の後を追ひ驅る。田吾作は一生懸命走り出す。踏み外して崖下の麥畑へ顛落し、

田吾作「アアアやつぱり地異天變だ。麥一升な目に會つたものだ。オイ留公、この報告は俺が承はつたのだ、先へいつて喜ばしやがると承知せぬぞ」

留公「貴様の言ふことは何が何だか、薩張解らせんワ。俺ん所の麥畑をワヤにしやがつて何うして呉れるのだい」

田吾作「何うも斯うもあつたものかい。麥の一升や二升ワヤになつたつて、此の喜びに替へられるものか。親子の人に寄附したと思へば濟むのだ。此の場合になつて吝嗇くさいことを言ふな」

留公は又もや兩手を組んで、

留公「ハテナ」

と思案に暮れてゐる。松鷹彦は二人に留守を命じ置き、「あかざ」の杖をつき田吾作の後を追うてヒヨロヒヨロと此處までやつて來た。

留公「ヤア貴方は宮のお爺さま」

松鷹彦「お前は留さまぢやないか。斯んな路傍に何心配さうにして立つてござるのだ」

留公「別に心配も何もありませんが、田吾作の奴俄に發狂し居つて、これ此通り此の高土手から顛落し、譯のわからぬ事を言つてます」

爺さんは恐相に崖下をソツと覗いた。高所から落ちて腰を痛め、脚の蝶番を破損した田吾作は、爺の顔を見るより、

田吾作「ヨーお爺さま、大變大變、左の腋下にモ一つの梅の花が咲いた」

松鷹彦「それは何處に咲いたのだな」

田吾作「何處にも彼處にも咲いて咲いて咲き亂れて居る。眞浦ぢや眞浦ぢや、眞浦の左の腋下に梅の花の痣があるのだよ。的切りお前の倅の松さまに間違ひなからう。いつて來なさい。私はお前に報告のため、駄賃取らずの飛脚さまで今日一日は、お前のために社會奉仕をするのだよ」

松鷹彦「それはマア妙なことを聞くが實際そんなことがあるのかい。嘘ぢやあるまいなア」

田吾作「嘘を云つた所で一文の徳にもなりはせぬ。早く歸つて親子對面の用意を

しなさい。オイ留公、眞浦さまを宮の社務所まで引張つて來るのだよ」

と身體の痛みも忘れて、一生懸命に叫んでゐる。松鷹彦は半信半疑乍らも、何か心に期する所あるものの如く、覺束なき足も欣々と輕げに元來し道へ踵を返した。

留公は田吾作を助けむと、少しく迂回して側に近付き、

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

留公「オイ田吾作、しつかりせぬか、口ばつかり噪やぎ居つて、腰がチツとも立

たぬぢやないか」

田吾作「あまり嬉しくて嬉し腰が抜け居つたのだい」

留公「サア、俺が負うてやるから俺の背中に喰ひつくのだ」

田吾作「俺を負ふ人があるのだ。それ迄待つてゐるのだよ。大きに憚りさま」

留公「負惜みの強い奴だな。俺が親切に負うてやらうと言ふのに、何故負はれぬ

のか」

田吾作「かうして此處に平太つて居れば、屹度通る人があるのだよ。カ、エー

矢張構うてくれな。何事も惟神に任すのだ」

留公「ハハア、カ、と云ひやがつて、大方お勝さまに負うて貰はうと思つてゐ

るのだらう、サアサ俺がお勝さまの所へ負つて連れて行つてやらう。背中に喰ひ

つくのだよ」

田吾作はソ一と腰を上げてみて、

田吾作「アー妙だ、何時の間にか自然療法で全快し居つた。マア生命に別條はな

い。安心してくれ」

留公「こんな奴に相手になつて居ると狐につままれたやうなものだ。エ、怪體の悪い」

とボヤキボヤキ上つて行く。田吾作はシヤンシヤンとして後を追ふ。漸く顛落した箇所までやつて來た。

田吾作「ア、此處だ、俺の一生一代の放れ業の遺跡だ。臨時に目標でも建てて記念にして置かうかな」

其處へ慌しくやつて來たのは眞浦である。

眞浦「留さま、田吾作さま、何をしてゐるのだ」

留公「今田吾作が空中滑走の曲藝を演じ、此の留さまに御覽に供した所です」

田吾作「ヤア左の腋の下の梅の花か、サア早く來た。もう爺さんに注進濟みだ。

屹度四頭立ての黒塗りの馬車か、自動車を以て迎ひに來ますぜ。マア、ゆつくり此の田圃路に待つて居なさい」

眞浦はニタリと笑ひ乍ら、足早に武志の森をさして急ぎ行く。二人も捻鉢巻し乍ら大股に宙を飛んで、宮の社務所目蒐けて驅け出した。

第七章 再生の歡(六六九)

松鷹彦は「あかざ」の杖をつき、田吾作、お春の慌てて驅出した跡を氣遣ひ、覺束ない足つきにて二人に留守を托しながら出て往つて仕舞つた。後には夫婦連れ、何れも喜びと驚きの涙に暮れて居る。

お勝 「モシ宗彦さま、何卒私に暇を下さいませぬか」

宗彦 「そりやお前、本當に欲しいのか」

お勝 「何しに心にもない事を云ひませう、一寸感じた事が御座いますから、何卒今日限り縁を切つて下さい」

宗彦 「八八分つた、お前は、私の父親は、もつと立派なものと思つて居たのだらう、あの爺さまが、私の親と云ふ事が分つたので俄に嫌になつたのだな」

お勝「イエイエどうしてどうして、嫌になりますものか、層一層懐しうなつて來ました」

宗彦「そんなら尚更の事、夫婦睦まじく暮して呉れたらどうだ。俺も折角お父さまに遇うて喜ぶ間もなく、女の方から暇を貰つてどうして親に合す顔があらうか、昨日迄なら止むを得ざれば切つてもやるが、今となつてそんな事が出来るものか、俺の心も些とは察して呉れたらどうだ」

お勝「それはさうで御座いますが、これには云ふに云はれぬ仔細があつて」

宗彦「遠慮會釋もない夫婦の仲、云はれぬ秘密があらう筈はない、サアその秘密を聞かして呉れ」

お勝「其秘密を申し上げたら貴方は吃驚をきつとなさいませう、是許りは死んでも申し上げられませぬ」

宗彦「ハ、ア、さうするとお前は田吾作さまと、なんか俺に内證で契約でもしたのだらう、田吾作とお前の視線がどうも怪しかつた」

お勝「何と云ふ情ない事を仰しやるのですか、私の腹を切つてでも見せて上げた

い、何れ死なねばならぬ罪の重いこの體」

と云ふり早く懷の懷劍を取り出し、帷子の薄衣の上からグサリと突き立てようとした。宗彦は驚いてぐつと其手を握り、

宗彦「待て待て」

お勝「イエエ何うぞ留めて下さいませ、潔く死なして下さいませ、腹を切つて臨終の際に一言申し上げて、神様や貴方にお詫を申し上げます」

宗彦「生死を共にしようと言つて、山野河海を見窄らしい巡禮姿となり下がり、手に手を把つて此處迄互に父母の後を慕ひ來たのではないか、お前は大方私が親子の對面をしたので恨めしうなつたのだらう、イヤ失望落膽したのであらう、きつと遇ふ時節が來るから短氣を起して呉れな、夫が妻に手をついて、サア此通りだ」

と片手にお勝の腕を握り、片手を目の前に突きつけて、涙と共にお勝を拜む。

お勝「ア、勿體ない、そこ迄思つて下さるなれば死ぬのは止めませう、安心して下さいませ、その代り只今限り無條件でお暇を願ひたう御座います」

宗彦「暇をやらねば死ぬと云ふなり、暇をやれば親父に心配をかけるなり、嗚呼恩と戀との締木にかかつて、こんな苦い事が世にあらうか。これお勝、何卒暫くでいいから夫婦になつて居てくれ、又時をみてお前の望み通り、離縁をするからお勝「それが待たれるやうな事なれば、なぜ私がお願ひ致しませう、女房が夫に對し離縁を申込むなぞと云ふやうな、不合理な事が何處に御座いませう。貴方は嗚々不貞腐れの女だと思召すでせうが、私の胸の中は千萬無量、焼鏝を當てるやうで御座います」

宗彦「ア、何うしたら此苦みを逃れる事が出来ようかなア、暇をくれと云へば云ふ程心の中の戀と云ふ曲者が躍り出し、俺の體も焦熱地獄に陥ちたやうだ」

と太息をつく。夫婦の間に得も云はれぬ悲惨な雲の幕が下りた。斯かる所へ松鷹彦はいそいそと歸り來り、

松鷹彦「ヤア宗彦、お勝、お前は泣いて居るのか、こんな目出度い時に夫婦が揃うて泣くと云ふ事があるものか、泣きたければ又夜中に悠くりと泣いて満足するがよい、今其處へ村の衆が出て御座るから、サアサア早う機嫌直して呉れ」

宗彦「お父さま、餘り嬉しうて嬉し涙が溢れたのです、御心配下さいませな」

松鷹彦「ア、さうだらう さうだらう無理も無い、併しお勝も泣いて居たやうだ、目を腫らして居るぢやないか、これこれお勝、見つともない、泣いて呉れな」と留めながら松鷹彦は自分も泣き出した。

宗彦「お父さま、申上げ悪い事ですが、女房が只今より暇が欲しいと云ふのです、それで實は二人が談判して居つたのです」

松鷹彦「若い者と云ふものは仕方がないものだな、私も覚えがある。天下御免だから犬も喰はぬ喧嘩を精出してやつて呉れ」

後は嬉し涙をしやくり上げる。

斯る所へ、天の眞浦の宣傳使を始め、田吾作、留公、お春は四五の里人と共に、スタスタとやつて來た。

田吾作「モシモシ、お爺さま、お喜びなさいませ、眞浦の宣傳使は確に左の腋の下に梅の紋が鮮かに現はれて居ります。屹度最前仰有つた、貴方の御長男松さまに間違ひありません。ナア眞浦さま、さうでせう」

眞浦「ハイ」

と云つたきり、何となく心落ち着かぬ返事をして居る。

松鷹彦「モシモシ眞浦さま、失禮な事をお尋ね致しますが、あなたのお國は何所で御座いましたか」

眞浦「ハイ、私は紀の國熊野の生れで御座います」

松鷹彦「お父さま、お母さまはお達者にして御座るでせうな」

眞浦「イエ父も母も行方不明となり、三人の兄妹も何うなつたか、何分小さい時に分れたのものですから顔も知らず、全然世の中に親族も何も無い一人ぼつちです。私の力とするのは唯もう仁慈無限の神様許り、度々夢を見ますが、私の父はどうも貴方に良く似て居るやうに思ひます。併しこれは夢の事ですから、あてに

はなりません。何卒お心に「さへ」て下さいますな」

松鷹彦「お前さま左の腋に梅の花の痣があると云ふ事ぢやが、それは眞實ですか、眞實なら一寸見せて下さい。私の子供には兄弟とも兄は左に弟は右に、不思議な事には梅の紋の痣がついて居る、何でも是は神様の生れ變りと聞いて居る。一人

の娘には臍の上に三角星のやうな黒子があつた

眞浦「是は妙な事を承はります、サア何うぞお調べ下さいませ」

と肌を脱ぐ。松鷹彦は眼を光らし、つくづくと眺めて、

松鷹彦「マ、擬ふ方なき私の悴であつた。有難い有難い、これと云ふのも神様の

お引き合せ、婆が生て居たらどれだけ喜ぶであらうに、可憐さうな事をした。婆

と明け暮れ三人の子供の事を思ひ出しては泣き、云ひ出しては泣き、可憐さうに

泣いて泣いて泣き暮し、終には自暴自棄になつて、河の魚を漁り、殺生ばかりし

て悶々の情を慰めて居た。アア可憐さうだつた

と流石妻を思ふ愛情の雲に包まれて其場に力なく泣き沈む。

田吾作「こんな目出度い時に何をベソベソ泣くのだ。男と云ふものは涙を目から

外へ落すのは大變な恥だ、潔うなさいませ。歌でも謡つて祝ひの酒でも飲んで機

嫌ようするのだなア、私も何だか陰氣になつて來た。サア一つ歌つて見ようかな、

ぢやと云うて酒も吞まずに何だか拍子抜がしたやうだ。お弓の奴、酒を買つて持

つて往くと云ひながら、何をして居るのだらう。又爺と「いちぢや」ついて居るの

だなかからうかなア」

と態と潔う喋り立てる。留公は、

留公「モシモシ、眞浦の宣傳使さま、何を俯向いて居るのだ。早くお父さまに久

し振りの御對面の御挨拶をなさらぬか、何だか目出度い事だと思つて來たのに薩

張座が濕つて仕舞ひ、五月雨の空のやうだ。ヤアお弓さんが酒を持って來た。オ

イ田吾作、お前は酒好きだから、早く飲んで一つ踊つて此場の空気を一洗してく

れ、俺は御馳走の用意にかかるから、追々村の者が出て來る時分ぢやから愚圖々々

しては居られぬぞや」

と足早に炊事場指して走り行く。

田吾作はお弓の持つて來た酒をグイと引つ手繰り、其儘口にあてて法螺貝飲み

を始めて居る。松鷹彦、眞浦、宗彦、お勝の四人は喜びと悲しさの雲に包まれ、

默念として傾首れて居る。田吾作は酒の機嫌で謠ひ出した。

「とうとうたらりや とうたらり たらりや たらりや たらりや とうたらり

天下泰平國土成就

神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す

三五教の神の道

神の御稜威のいや高き

武志の宮の御前に

親子夫婦の邂逅

三千世界の梅の花

左の腕は嚴御靈

右りの腕は瑞御靈

嚴と瑞との神の子が

彌此處に現はれて

三五の月の御教を

四方に廣むる常磐木の

松鷹彦のお喜び

齊下丹田のその上に

瑞の御靈の印ある

黒子の出来たお勝さま

私ばかりは知つて居る

さはさりながら皆の人

必ず怪しみ給ふなよ

わしとお勝さんの其仲は

汚れた事は露もない

宇都の河原にお勝さま

御禊せられた其時に

横から一寸見て置いた

松鷹彦の先刻の

御物語を伺へば

これぞてつきり御兄妹

松竹梅の三人が

彌揃うた神の前

皆さま喜びなさいませ

こんな目出度い事はない

假令天地は變るとも

親子の縁は變りやせぬ

親子は一世夫婦二世

切るに切られぬ親と子が

長い間の生き別れ

此處で遇うたは優曇華の

花咲く春の梅の花

開いて散るな實を結べ

七重に八重に九重に

十重に廿重に咲き匂ふ

神の教の瑞祥ぞ

ア、惟神々々

御靈幸倍ましまして

知らず知らずに犯したる

宗彦夫婦が身の罪を

三五教の大御神

直日に見直しまして

罪も汚れもあら川の

淵瀨ふちせに流ながして清きよめませ
御靈みたま幸さち倍はましませよ
ア、惟かむ神ながら々々

と剽へう輕きんな男をとこに似にず、今け日ふに限かぎつて眞ま面じ目めに謠うたひ、眞ま面じ目めに舞まうて見みせた。この言こと
靈たまに白しらけかかつた一いち座ざは俄にはかに陽やう氣きだち、何いづれも顔かほ色いろ變かへて春はる風かせに櫻さくらの綻ほころぶ如ごとき笑えが
顔ほを見みせたり。

宗彦むねひこ「ア、お勝かつ、お前まへは合がてん點てんの行ゆかぬ事ことを俄にはかに云いうと思おもつて居ゐたが、ア、妹いもうとであ
つたか。なぜ遠ゑん慮りよをするのだ、素もとより兄きやう妹たいと知しつて天てん則そくを犯をかしたのでもなし、知し
らず識しらずの反はん則そくであるから神かみ様さまも赦ゆるして下くださるだらう。何どうぞ心しん配ぱいしてくれな、
併しかし兄きやう妹たいと分わかつた以い上じやうは、お前まへの望のぞみ通どほり暇ひまを上げませう」
松鷹彦まつたかひこ、眞浦まうらは打うち驚おどろき、夢ゆめか現うつか、親おやか子こか兄きやう妹たいかと、目めと目めを見み合あし、呆あきれ
て言葉ことばも泣なく許ばかり。天あめの眞浦まうらは立たち上あがり、

「天あめと地つちとの其その中なかに

生うま
れ來きたりし人ひと草くさの

中にも別けて我が親子

運命の神に操られ

親子は四方に離散して

行方も知らぬ旅の空

親は我子の行先を

尋ねて風雨に身を曝らし

慈愛の涙そそぎつつ

山河渡り荒野越え

我等が跡を老の身の

憂を忘れてあちこちと

彷徨ひませる親心

山より高く海よりも

深き尊き御恵み

我等三人の兄妹は

親に離れし雛鳥の

寄る邊渚の捨小舟

流れ漂ひあちこちと

情なき人に虐まれ

百の艱みを凌ぎつつ

我垂乳根の行先を

朝な夕なに當もなく

探りし事の悲しさよ

天地に神のますならば

悲しき我等がこの思ひ

晴らさせ給ひて片時も

早く遇はさせ給へやと

神に祈りをかけまくも

畏き御稜威幸はひて

思ひもかけぬ親と子が 今日けふの對面たいめん何なんとして

天地てんちの神かみに禮代いやしろの 言靈ことたまさへもなくばかり

ア、惟かむながらかむながら神々々 御靈みたまの幸さちを賜たまはりし

惠めぐみも深ふかき三五あななひの 道みちを守まもらす大御神おほみかみ

神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみの 瑞みづの光ひかりに照てらされて

月滿つきみつ今日けふの邂逅めぐりあひ 父ちちは此世このよにましませど

母ははは早はやくも娑婆世界しやばせかい 後あとに見捨みすてて去さりましぬ

さはさりながら吾われのみは 戀こひしき母ははと知しらずして

お目めにかかりし嬉うれしさよ 此世このよに母ははのましまさば

如何いかに喜よろこび給たまふらむ 嗚呼ああ父上ちちうへよ弟おとうとよ

日頃ひごろ尋たづねし妹いもつとよ いざ是これよりは大神おほかみの

眞まことの道みちに服從まつろひて 生命いのちの限かぎり身みの極きはみ

誠まこと一つの言靈ことたまに 惡魔あくまの猛たけぶ現世うつしよを

洗あらひ清きよめて母上ははうへの 御心慰みこころなぐさめ奉たてまつり

父ちちの譽ほまれを萬代よろづよに傳つたへむものと勵はげみませ

淵瀨ふちせと變かはる人ひとの世よは明日あすをも知しらぬ身みの上うへぞ

嬉うれしき春はるに廻めぐり遭あひ互たがひに顔かほをみたり連づれ

一度いちどに開ひらく梅うめの花はな三千さんぜん世界せかいの名なを負おひし

三角さんかく星座せいざの印しるしある名なさへ目め出で度たき梅子うめこ姫ひめ

常磐とぎは堅磐かきはにいつ迄までも松竹梅まつたけうめの勇いさましく

生き長ながらへて吾わが父ちちに能あたふ限かぎりの孝養かうやうを

盡つくすも嬉うれし兄妹けうたいの今日けふの喜よろこび月照つきてるの

ミロクみろくの神かみの御前おんまへに喜よろこび感謝かんしゃし奉たてまつる

ア、惟かむながら神かむながら々々かむながら御靈みたま幸倍さちはへましませよ〆

と謠うたひ終をはつて座ざについた。

村中むらちゆうの老若男女らうにやくなんによは残のこらず空家あきやにして此場このばに馳集はせあつまり、飲のめよ謠うたへよの大祝おほいはひに
夜よを明あかした。

天の眞浦は永く武志の宮に留まりて父に孝養を盡し、お春を女房に持ち、父の後を繼ぐ事となつた。お勝は留公の媒酌にて田吾作の妻となり、夫婦仲よく一生涯を送り、子孫繁榮して裕な身となつた。

宗彦及び田吾作の二人はこれより聖地に上り、言依別命に謁し、三五教の教理を體得し、自轉倒島を始め、世界到る所に足跡を印し神業に参加し、遂には素盞鳴大神に見出されて立派なる大宣傳使となりける。

(大正一一・五・一三 舊四・一七 加藤明子録)

第八章 心の鬼(六七〇)

宗彦は親兄妹に別れを告げ一旦聖地に參みのぼり、言依別命より天晴れ宣傳使の役を命ぜられ、心いそいそとして再び宇都山の里に立ち歸り、武志の宮の前に報告祭を行ひ里人に別れを告げて、山奥深く三國ヶ嶽に割據する魔神を征服せむ

と、旅装を整へ宣傳の初旅に就いた。留公、田吾作の二人は村の外れに先廻りして待つて居た。

宗彦「お前は義弟の田吾作ぢやないか、おゝ留さまも其處に居るなア、何處へ行くのだ」

田吾作「何卒私を二三日、宣傳使のお伴に連れて行つて下さいな、留さまと相談の上此處に待伏して居りました」

宗彦「それは折角だが宣傳使は一人のものだと言依別命様より承はつて居る。外の事なら一緒に行かうが、今日は宣傳の初陣だから、御親切は有難いが是非なく

お断り申す」

田吾作「私は宣傳使でない以上は、信者としてお伴しても差支ありませんまい」

留公「何卒二三日で宜敷いから連れて行つて下さい」

宗彦「お前の足でお前が勝手に行くのなら差支無からう、同じ一條の道を通るのでから……然し宣傳使として宗彦は徹頭徹尾一人旅だ」

留公「貴方は何處を指してお出でになるのですか」

宗彦「そうだなア、言依別命様は明石峠を越え、それから山國を経て三國ヶ嶽の

悪魔を征服して来いとこの事だつた。随分高い山だらうなア」

留公「近江の國と若狭、田庭三國に跨る高山です、大變な猛獸や猿が棲み大蛇が

居ると云ふ事です」

田吾作「さう聞くと私は貴方一人をやる譯にはゆきませぬ、是非お伴をさして下

さいな」

宗彦「絶対にになりませぬ」

と首を振り振り先に立つて行く。

折しも秋の初め、田庭名物の深霧に六尺先は少しも見えない。宗彦は足を速め

て明石峠をさして進み行く。二人の男は霧に隠れて足を速め、先廻りして明石峠

の麓に落つる大瀑布に眞裸となり、身褌し乍ら宗彦の進み来るを待つて居た。宗

彦は二人の瀧にうたれて居るのを霧にさへぎられて氣がつかず、

宗彦「何だか大變な水音がして居るなア」

と小聲に囁き乍ら坂を登り行く。二人の男は宗彦が我二三間前の道を通つて居

るのに少しも氣がつかかなかつた。宗彦は明石峠の頂上に登り着いた。霧は谷間を埋めて處々に高山の頂きのみ畫の様に浮いて居る。

宗彦「ア、何と霧の海の景色と云ふものは綺麗なものだなア、到底紀の國では見られぬ圖だ。此景色を眺めて居る心持は全で第一天國へ遊樂して居る様な氣分だと獨語して居る。」

時しも窺れ果てた四十位の一人の女、見「すばら」しき風姿をしてスタスタと霧の中から浮いた様に現はれて來た。

宗彦「イヨー、妙な女がやつて來よつたぞ、大變に忙し相に歩いて居る、何か之には様子が有り相だ、一つ此處へ近づいたら訊ねて見よう」

と心に思つて居る。女は宗彦の姿に氣がつきキツト立ち止り、怪しの目を「ぎよる」つかせ此方を見詰めて居る。

宗彦「貴女は此高い峠を越えて女の身の只一人、何處へ行くのだ」

女は怖相に、

女「ハイ、私は此下の熊田と云ふ小村の者で御座います。明石の瀧へ是から打た

れに参ります」

宗彦「明石の瀧と云ふのは何處にあるのだ」

女「此山を七八丁許り下つた處に御座います」

宗彦「私も今此坂を登つて來たのだが餘りの深霧で氣がつかなくつた。道理で水

音のした箇所があつた様に思つた。して又瀧に打たれに行くと云ふのは何か深い

理由があるであらう、それを言つて見なさい」

女「ハイ、私の夫は原彦と申すもの、二三年前からフラフラと患ひつき此頃では

大變な大病で御座います。それで明石の瀧の神様へお願い申して夫の病氣を助け

たさに、瀧に身を浸しに参る者で御座います」

宗彦「何んな病氣だな、都合に依つたら神様に願つて助けて上げようと思ふのだ

が……」

女「ハイ、有難う御座います、夜分になると色々のもので出て参ります、さうし

て苦めるのです、その度毎に冷汗をグツスリかき日に日に瘦衰へ、今は最早骨と

皮ばかりに見【すばら】しくなつて居ります」

宗彦「そりや何か物の怪の病氣であらう。サア一遍調べて見るから案内をしてお呉れ」

女「それは有難う御座います。之から此山坂を下り、四五丁許り行つた所の小さき村で、山の麓に私の茅屋が建つて居ります。御苦勞乍らお頼み申します」
と先に立つて案内する。漸く女の家に着いた。大樹の森の下に冠木門をあしらつた一棟の相當に廣い家がある、それが此女の邸宅。

女「見「すばら」しき茅屋で御座いますが、何卒お這入り下さいませ」

と會釋して内に入る。夫原彦の何物にか魘されて苦しむ聲は戸外に迄洩れて來た。女は「又來よつたなア」と小聲でつぶやき乍ら、慌てて屋内に飛び込み、病人の枕許に駆け寄つた。宗彦は少し遅れて鬨を跨げ、床上に上り天津祝詞を奏上するや、病人は益々苦悶の聲を放ち狂ひ廻る。四五人の村人は次の間に控へて何事か話し合つて居た。祝詞の聲を聞くより二三人の男其場に現はれ、
男「何處の方かは知りませぬが、定めてお露さまがお連れ申して歸つた方でせう、サア何卒此方へ來て御休息下さいませ」

宗彦は「御免」と云ひつつ招かれて一閒に踏込み座に着いた。何事か確とは聞きとれないが、非常に病人はお露を相手に呶鳴つて居る。此聲を聞いて宗彦は村人に向ひ、

宗彦「何時も病氣はあの通りですか」

甲「此四五日前から一層烈しく成つて來ました。田吾が來る田吾が來る」と云ひ出しまして……それはそれは随分苦しむのです。さうして又ケロリと嘘を吐いた様に癒る事もあるのです。理由の分らぬ病氣……何でも死靈の祟りだと云ふ事です」

宗彦「死靈の祟りとは、……そりや又何か心當りがあるのですか」

甲「吾々村人も初めはちつとも病氣の原因が分りませなんだが、此頃そろそろ死靈だと云ふ事が分り出したのです。何でも茲二三日の間に生命を取らねば措かぬと口走り、それはそれは大變な藻掻き様です」

乙「何でも此處の主人の原彦は上方の者らしいが、お露さんの婿になつてから早十三年にもなりますのに素姓を明かさないので、何處の人だか、何をして居つた

のか分らなかつたのだが、病人の囁言を云ふのを聞いて見れば、大きな聲では言はれませぬが、此男は泥棒をして人を殺した奴らしいですよ。そして殺された男の死霊が祟つて居るのだと云ふ事、病人自ら現になつて喋ります。天罰と云ふものは恐ろしいものですなア」

宗彦「人間と云ふものは随分不知不識の間に罪を作つて居るものだ、人を殺し火を放ち、或は強盗、詐偽等の罪惡を犯す者は實に天下の爲に憎むべき者であります。然し乍ら其罪を憎んで人を憎まずと云ふ事がある、公平無私な神様は肉體を罰し給ふ様な事はありませんまい、屹度其罪の爲めに苦しめられて居るのでせう。

罪さへとれれば原彦さまも間もなく本復するでせう。世の中には人間の目に見えぬ罪人が澤山ある、中でも一番罪の重いのは學者と宗教家だ。神様から頂いた結構な靈魂を曇らせ、腐らせ、殺すのは、誤つた學説を流布したり、神様の御心を取違へて誠しやかに宣傳したり、或は神様の眞似をするデモ宗教家、デモ學者が最も重罪を神の國に犯して居るものですよ」

甲「へイ、そんなものではすかなア、心に犯した罪や、學者や宗教家の罪は何處で

善惡を調べるのですか」

宗彦「到底不完全な人間が善惡ぢやとか、功罪だとか云ふ事は判断のつくものぢ

やありません。それだから神が表に現はれて善と惡とを立別け遊ばすので、人間

は只何事でも善意に解釋し、直靈の神にお願し、神直日大直日に罪を見直し聞直

し詔直して貰ふより仕方がありませんよ。我々は日々一生懸命に國家の爲め、お

道の爲め、社會の爲めと思つてやつてる事に大變な罪惡を包含して居ることが不

知不識に出來て居るものです。それだと云つて善だと信じた事は何處迄も敢行せ

ねば、天地經綸の司宰者としての天職が務まらず、罪惡になつてはならぬと云つ

てジツとして居れば、怠惰者の大罪を犯すものですから、最善と信じた事は飽迄

も決行し、朝夕に祝詞を奏上し神様に見直し聞直しを願ふより仕方はありません

乙「今の法律は行爲の上の罪許りを罰して、精神上の罪を罰する事はせないいで

すが、萬一靈魂が罪を犯し、肉體が道具に使はれても矢張其肉體が罪人になると

云ふのは、神界の上から見れば實に矛盾の甚しいものではありません。はいか」

宗彦「そこが人間ですよ、兔も角法律と云ふものは人間相互の生活上、都合の惡

い事は皆罪とするのですから……假令法律上の罪人になつても神界に於ては結構な御用として褒めらるる事もあり、法律上立派な行ひだと認められて居る事が、神界に於て大罪惡と認められる事もあるのです。それだから何事も神様が現はれてお裁き下さらぬ事には善と惡との立別けは人間の分際として、絶対に公平に出て来るものではありません。又人間の法律や國家の制裁力と云ふものは、有限のものであつて、絶対的のものでは無い、淺間山が噴火して山林田畑を荒し、人家を倒し、櫻島が爆發して數多の人命を毀損し、地震の鯨が躍動して山を海にし、海に山を拵へ家を焼き人を殺し、財産を全然掠奪して仕舞つても、人間の作つた法律で淺間山や地震や櫻島を被告として訴へる處もなし、放り込む刑務所も無し、裁判する事も出来ぬ様なもので到底駄目です。只何事も神様の大御心に任すより仕方がありません。』

斯く話す折しも次の間の病人、いやらしい聲を出して、

原彦 『ヤア田吾作田吾作、赦して呉れ、俺が悪かつた、お前は、大井川から俺に落されて死んで悔しからうが、今となつて如何する事も出来ない、之も何かの因縁』

ぢやと諦めて何卒俺の生命丈は助けて呉れ、ア、悪かつた悪かつた、赦して赦して

と叫び出した。

宗彦「ハテナ、此邊に田吾作と云ふ人があつたのですか」

乙「田吾作と云つたら皆我々の雅名です。田吾作は田畑を耕し、空兵衛は山林に

わけ入つて樵夫をやつたり薪物を刈つて來る人間の代名詞見た様なものですから、

あまり澤山の田吾作で誰が殺されたのやら譯が分りませぬ」

宗彦「それは分りましたが、然し一人に特定の名の付いた田吾作と云ふ男はあり

ますまいかな」

甲、乙一時に、

甲、乙「サア餘り聞きませぬなア、何でも宇都山の里に大變な周章者があつて、

その男を田吾作と云ふさうですが、それも實際の名か、一般的の百姓の名か、そ

いつア判然致しませぬ。少し慌ててやり損ひをする男を、此邊では宇都山の田吾

作みた様な奴だと云つて居ます、仄に話に聞いて居る許りで實際そんな方が有る

のか無いのかそれも分りませぬ」

隣となりの室しつより病人びやうじんの叫さけび聲こゑ、

原彦はらひこ「田吾作たごさくの幽霊いうれいどの、悪わるかつた悪わるかつた、何卒どうぞ助たすけて呉くれ……何なに、貴様きさまの樣やうな悪人あくじんを助たすけて堪たまらうかい、俺おれの生命いのちをとつた奴やつだ、貴様きさまの肉體にくたいに宿やどり腸はらわたを喰くひ、肺臟はいざうを抉えくり、胃袋ゐぶくろを捻切ねぢきり、苦しめて苦しめて鬪殺なぶりころしにしてやるのだ。此この怨うらみを晴はらさな措おかうか」

と原彦はらひこは自問自答じもんじたふてき的に呶鳴どなつて居ゐる。

甲か「不思議ふしぎな病人びやうじんでせうがな、何でも腹はらの中に死靈しりやうが這入はいつたり出でたりすると見みえます。今は屹度腹きつとはらへ這入はいつて居ゐると見みえて本人ほんじんと變かはつた聲こゑで云いつて居ゐます……あれが殺ころされた田吾作たごさくの怨靈をんりやうに違ちがひありません、何卒どうぞ一つ祈きたう禱たうをしてやつて下さいませいか、私達わたくしたちも村中むらぢゆうが代かはる代かはる五人ごにんづつ斯かうして不寢ねの番ばんをして居ゐるのですから、お露つゆさんも氣きの毒どくぢやが、吾々われわれ村中むらぢゆうの者ものも大變たいへんに手閒てまが取とれて困こまつて居ゐるのです」

宗彦むねひこは打うち頷うなづき裏うらの谷川たにがはにて口くちを嗽すすぎ手てを洗あらひ、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、徐々しつしつと病びやう

人の居間に入り来り枕頭に端坐し、兩手を組み三五教の奉齋主神の御名を唱へ、
天の數歌を二三回繰返すや否や、病人はムクムクと起き上り、目を剥き鼻を左右
に馬の様にムケムケと廻轉させ、舌を出し、

原彦「アア怨めしやなア、俺は田吾作の怨靈だ、此肉體を何處迄も苦しめ生命
をとらいで措くものかア」

と妙な手付をなし衰弱しきつて動けない病人が俄に立つて騒ぎ出す。宗彦は一生
懸命に天の數歌を奏上し、

宗彦「これこれ原彦さま、決して田吾作の怨靈が殃をして居るのではない、お前
の心の鬼が身を責めるのだ。神様にお詫をしてやるから、お前の罪は神素盞鳴尊様
の千座の置戸の贖ひの御徳に依つて最早救はれた、安心なされ」

原彦は形相凄じく、

原彦「アア怨めしやなア、何程救はれたと云つても、生命をとられた田吾作は何
處までも祟らにやおかぬ。親を殺し、本人は申すに及ばず、女房の生命をとり、
一家親類村中までも祟つてやるぞよ……」

宗彦 「お前は田吾作と云ふがその田吾作は今何處に居るのだ」

原彦 「田吾作は大井川の大橋の下で肉體は亡びたが、精靈は此處に惡魔となつて

憑いて居るのぢや哩のう、怨めしやア怨めしやア」

宗彦 「田吾作の顔には何か特徴があるか」

原彦 「特徴と云ふのは外でもない、眉間の眞ん中に大きな黒子があるばつかりだ、

俺の顔を見て呉れ、之が證據だ」

と原彦は宗彦の前に額を突き出す。

宗彦 「別に黒子も何もないぢやないか」

原彦 「お前は靈眼が開けて居ないから大方原彦の肉體を見て居るのだらう、私の

正體を目を光らして見て呉れたら眉間の黒子が分るだらう。あゝ怨めしい、キヤ

ツキヤツ」

と云ひ乍ら嫌らしい相好を遺憾なく曝して、又元の寢間へクスクス這込み「ウン

ウン」と苦しさに呻りを續けて居る。

お露 「もうし、宣傳使様、此病人は癒るでせうか」

宗彦「癒りますとも、眉間に黒子のある田吾作は死んでは居ませぬよ、確かにピンして生きて居ます、今に此處へやつて來るでせう、要するに神経病だ、心に犯した罪惡の鬼に責られて居るのです。今に當人がやつて來て「許す」と一言云つたら全快は請合です」

お露「何と仰有います、あの田吾作さんが生きて居られますか、そりや又如何した譯でせう」

宗彦「どうでも有りませぬ、實際生きて居るのですから今に實物をお目に掛けませう、田吾作が此處へ參る迄、次の室で休息して待つ事に致しませう」

お露「御苦勞様で御座いました、何卒奥でお茶なりと召し上り緩々御休息下さいませ」

宗彦は「有難う」と一禮し奥の間に行つて休息した。

甲「何と宣傳使様、妙な病人で御座いますなア、マア千人に一人位な者でせうか、さうして承はれば田吾作さまは生きて御座るとは、そりや又何と云ふ不思議でせう」

宗彦「凡て天地の間は不思議ばかりで満たされて居るのです、菜の葉一枚だつて考へてみれば實に不思議なものです。今の人間は石地藏を祈つて疣がとれたとか、脚氣が癒つたとか云つて不思議がつて居るが、そんな事は不思議とするに足りませぬ。第一人間は、ものを云ふのが不思議ではありませんまいか、何程立派な解剖學や生理學の上から調べてみても、聲の袋もなし、それに色々の言靈が七十五聲際限もなく出て來るのですから、是位不思議な事はありませんよ」

乙「さう聞けばさうですな、森羅萬象一として不思議ならざるは無しですなア」
斯く話す折しも田吾作、留公の兩人は門の戸を敲き、

田、留「モシモシ、一寸お尋ね致します、宗彦と云ふ三五教の立派な宣傳使は若しや此家にお立寄りでは御座いませぬか」

此聲にお露は慌てて門口に走り出で、田吾作の顔を見るより、

お露「アツ、貴方の眉間に黒子がある、田吾作さまでは御座いませぬか、エライ私の夫が貴方に對し御無禮を致したさうです、何卒堪忍してやつて下さい」

田吾作は何が何やら合點ゆかず、留公と共にお露の後に引添ひ、宗彦の憩へる

居間に入つた。

宗彦「ア、能う来てくれた、さはさり乍ら一寸此方へ来ておくれ」

と原彦の病室に伴ひ原彦を揺すり起した。原彦は病に疲れた身體を漸く起き上り、目を開き田吾作の姿を見るなり「アツ」と一聲、又もや寢具の上で打倒れ藻掻き苦しむ。田吾作は原彦の寤れたとは言へ何處とはなしに目付、鼻の恰好、口許の具合の十數年前大井川の橋の上に於て、河中に突き落した泥棒によく似て居るなアと半信半疑の態で打ち見まもつて居る。

宗彦「コレ原彦さま、お前に橋から突き落されて死んだ筈の田吾作は此通りピンピンして居る、お前の迷ひだから氣を取り直したが宜からうぜ」

田吾作「オイ、病人さま、久し振りだつたなア、十三年前の月夜の晩だつた、お前は狭い橋の上で俺の懐中の玉を強奪しようとする、俺はとられてはならんと争ひ、遂には組みつ組まれつ戦つた末、足踏外し濁流漲る大井川に眞逆様に顛落し、それより心は疎くなり、現世と幽界の境界の山の口迄歩いて行くと、後から大勢の俺を呼ぶ聲、振り返る途端に氣がついて見れば、高城山の麓の芝生の上に横た

はり、大勢の人が火を焚いて介抱をして居てくれた、お蔭で私は生命が助かった。それから宇都山村の住人となつて此通りピンピンと跳廻つて居るのだ、決して決して露程も怨んでは居らぬ。其時に私が執着心を離しさへすれば斯んな目に遇ふのでは無かつたのだ。エ、濟まぬ事をした、あの人に渡せばよかつたと始終懐中離さず其橋の邊を通り、その方に會うたら心好う進ぜようと思つてゐたのだ、それ……この玉だらう」

と懐中から出して、病人の手に渡した。原彦は初めてヤツと安心した刹那に病氣は輕快に向ひ、日を追うて恢復し、漸々肉もつき、十日程の後には全く元の壯健體となつて仕舞つた。

原彦夫婦を初め村人一同は執着心より恐るべき罪の發生し、其罪は忽ち邪氣となつて我身を責むると云ふ眞理を心の底より悟り、熊田の小村は擧つて宗彦の教を信じ、遂に三五教の信者となつて仕舞つた。

(大正一一・五・一三 舊四・一七 北村隆光録)

第三篇 三國ヶ嶽

第九章 童子教（六七一）

九重の花の都の山背

畏き神代に近江路や

色も若狭に丹波の

三國に跨る三國ヶ嶽

木立の茂みは高空の

月日を封じて物凄く

晝さへ暗き大高峰

鬼が大蛇か魔か人か

見るさへ凄き婆一人

聳えて高き岩の根に

假の庵を結びつつ

蛇や蛙を捕喰ひ

其日を送る物凄さ

此山麓に立竝ぶ

形ばかりの破れ家の

小さき棟も三四十

浮世離れし別世界

老若男女は谷川の

蟹や蛙を漁りつつ

餌食となして日を送る

鬼婆一人を棟梁と

仰いで遠く夜に紛れ

山城丹波近江路や

若狭能登まで手を延ばし

赤児の聲を探しつつ

隙さへあらば引捉へ

山の尾傳ひに逃げ歸り

婆の餌食に奉る

此曲津見は何者か

言向け和し世の中の

悩みを拂ひ救はむと

神素盞鳴大神の

御言畏み高天の

原に現れます言依別は

聖地に上り來りたる

心も清き宗彦に

依さし玉へば喜びて

一も二もなく承諾し

これぞ布教の初陣と

親兄妹に暇乞

明石峠を乗り越えて

道の熊田の一家

病に悩む原彦が

心の迷ひ吹き拂ひ

奇しき御稜威を現はして 里の老若男女をば

三五教の大道に 一人も残らず歸順させ

少時足をば休めつつ 原彦、田吾作、留公の

三人の信者を伴ひて 青垣山を繞らせる

平野の里や山國の 一本橋を打渡り

宮村、花瀬を後にして 三國ヶ嶽の山麓に

四人は漸く着きにける。

さしも三國に渡る大高山、杉の木立は鬱蒼として風を孕み、咆哮する聲、數百

千の獅子狼が一度に雄猛びする如く聞えて來る。夏とは言ひ乍ら何となく底冷た

き空氣漂ひ、谷川の音も何處となく物凄く、惡魔の囁くが如く耳を打つ。猿の群

は梢を傳ひて、キヤツキヤツと鳴き叫ぶ。四人は山麓を流るる深谷川の畔にドツ

カと坐し、旅の疲れを休め乍ら、ヒソビソ話に耽つて居る。

留公 隨分薄氣味の悪い谷間だないか。山國の丸木橋を越えてからと云ふものは、

人の子一人出會つた事もなし、時々左右の密林から怪しの聲、どうしても此處は、
大江山以上の魔窟らしい。オイ田吾作、此處までは喜び勇んでやつて来たものの、
首筋がゾウゾウとして、何んとも言へぬ気分になつて了つたぢやないか」
田吾作「宇都山村で、魚を漁つたり、麥畠に鋤杖ついて、雲雀の糞を頭から浴び
せられて居るのは、そりやチツとは骨が有るワイ。こんな山奥へ悪魔退治に來
たのだもの、どうせ満足に生命を持つて歸れないのは、出發の際から定りきつた
話だ。貴様宅を出る時の勢はどうだつた。鬼でも大蛇でも虎でも、狼でも、何で
も來い。此留公の腕には骨が有ると、力味返つた時の事を考へて見よ。こんな所
でそんな弱音を吹いて宣傳使のお伴が出來ると思ふか」
留公「そらそうだ。併し乍らモウ少し暖かい山ぢやと思つて居たに、夏の最中に
斯う寒くつては耐れないぢやないか。斯んな事と知つたなら、裕の一枚も持つて
來るのだつたが、薄い單衣一枚では堪へられない。俺は一つ、宇都山村まで引返
して、着物を着替へて出直して來るから、お前御苦勞だが、宣傳使の御伴をしてボ
ツボツ登りかけて呉れ」

田吾作「ハ、ハ、ハ、隣近所か何その様に、さう着々と着替に歸ねるものか。巧い辭令を作つて、態よく遁走するつもりだらう。口程にもない代物だなア。ヨ、今からビリビリ慄うて居よるなア」

留公「何程留めようと思つても、ガチガチと齒が拍子木を打つものだから仕方がないワ。モシモシ宣傳使様、私を此處から……實際の事言へば、歸らして貰ひたいのです」

宗彦「それだから伴れて行かぬと言ふのに、お前が無理に來たのぢやないか。宣傳使は一人旅、決して同伴はならぬのだ。私に相談は要らぬ、自由行動を取つたがよからう」

留公「ハイ有難う御座います。お蔭で命が助かりました。あなた方も、どうぞ無事で歸つて下さいませ。キツと、私は此處でお別れしても、あなたの事は忘れませぬ。お茶湯でも獻げて冥福を祈ります」

田吾作「オイ留公、冥福を祈るとは何だ。死ぬに定つた様な事を言ひやがつて、吾々の首途を祝する事を措いて、貴様は弔ふのだな」

留公「弔ふのか、呪ふのか、祝ふのか、どつちか一つの内だ。エー長居は恐れ、

こんな生臭い風が吹くからには、太い長い奴がノロノロと今にやつて来るだらう。

宣傳使は一人と仰有つた。遠慮は要らぬ、原彦、お前は先へ行け。さうして田吾

作は俺の尻に従いて歸るのだ。サアサア歸つたり歸つたり」

原彦「私は生命を助けて貰つた御恩返しに、御案内役となつて來たのですから、

宣傳使の爲に生命を棄てた所で、別に缺損にもなりませぬ。元々です。此場に及

んで男らしくもない、歸れますものか」

留公「生命の安い奴は行つたが宜からう。……オイ田吾作、貴様は生命が大事だ

らう。お勝の事もチツとは思つてやれ」

田吾作「お勝がなんだ。神様の御用のお伴をするのに、そんなことを氣に掛けて

居つて勤まるものかい。貴様勝手にしたがよからう」

留公は、

留公「蛙の行列向う見ず、生命知らずの馬鹿者」

と口ぎたなく罵り乍ら、坂路指して韋駄天走りに、霧の中に姿を没した。

田吾作「ハ、ハ、ハ、ハ、宣傳使様、隨分妙な活劇否悲劇が演ぜられましたなア。何れ彼奴は今言つた様な臆病者ぢやないから、先驅けの功名手柄をやらかさうと思つて、キット單騎登山と道を變へて出かけやがったのでせう。途中でアツと言はせる様な藝當を演ずるのかも知れませぬから、怪しき者が出たら油斷をなさいますなや。キット留公の化者に定つてゐます。彼奴は何時でもああ云ふ事をして喜ぶ癖があるのです。それで私も勝手に歸んだがよからうと、あなたの御言葉を幸ひに歸なしてやりました」

宗彦「面白い男ですな。何れ岩窟の附近まで往つたら、鬼婆の眞似でもして現はれるのでせう。原彦さん、サア案内を頼みませう」

原彦「私も御案内とは申しましたが、實は初めての事で一向不案内です。併し私の通る所は貴方も通れるでせう。露拂や蜘蛛の巣拂に、先へ行きますから、従いて来て下さい」

と不案内の路を谷に沿うて、トントんと登り行く。二人は後を追ふ。前途に激潭飛沫の谷川が横たはつて居る。四五人の男女が熊の皮を洗ひ晒らして木の梢に架

け渡し風を當てて乾かして居る。さうして何れも此れも皆、黒い熊の皮や、赤い猪の皮を身に纏うて立働いて居た。

原彦「オーイ、オーイ、其處に居る五六人の御連中さま、三國ヶ嶽の婆アの岩窟は、どつちやへ行つたら良いのかな」

川向ひの男、無言の儘、指先で……此谷川を渡り、東へ指して行け……と手眞似で知して居る。

原彦「ア、此奴ア唾と見えるワイ。併し乍ら此谷川を渡つて東の方へ行けと云うたのだらう。……モシモシ宣傳使様、私が一寸瀨踏みをして見ませう。大變流れも急なり、水量も多いから、萬一私が死ぬ様な事があつたら、キット渡らない様にして下さい。先づお毒見……否お水見を勤めませう」

と尻を捲つて早くも谷川を渡らうとする。

田吾作「オイ原彦、死ぬのはチツと惜しいぢやないか。お水試なんかせなくとも分つてる。どれ程水の達者な河童の兄弟分でも、此急流がどうして渡れるものか。マア危きに近寄らんがよからうぞ」

原彦「私は命を既に宣傳使様に差上げてあるのだから、運を天に任して渡つて見る」

と無理無體に川瀬を横ぎり、漸く辛うじて對岸に着いた。五人の男女は之を見て驚き、「ア、ア、ア、アー」と聲を立て、一目散に歩み慣れし山の細路を傳うて、霧の林に姿を沒した。

原彦「ヤア有難い。澤山な熊の皮が竝べてある。乾いた奴も相當に有るワイ。サア此奴を一つ身に纏うて登つてやらう。……オイオイ田吾作、早う渡つた渡つた。割とは淺かつた。大丈夫だよ」

田吾作「サア宗彦さま、お渡りなさいませ。私が後から従って行きます。もしも誤つて水の藻屑にならしやつた所が、義理の兄弟の私が、決して棄てては置きませぬ。キット死骸は拾つてあげます。サアあなたからお先へお渡りお渡り」

宗彦「そこまで徹底的に受合つて貰へば、私も安心だ」

と戲談半分に喋舌り乍ら、尻を捲つて漸く對岸に着いた。田吾作は手を拍つて、田吾作「アハ、ハ、ハ、ハ、本當の登り路は此方にあるのだ。そんな方へ行かうものな

ら、近江の國へ往つて了ふぞ」

原彦は川の向うから大きな聲を出して、

原彦「コレ田吾作、そんな事が分つて居るのなら何故早くに知らして下さらぬの

だ」

田吾作「知らしてなるものか。俺のお土産に其猪の皮を全部ひつ抱へて此方へ渡

るのだ。宣傳使様も四五枚搔攫へてお歸りなさい。其爲に此田吾作が計略で、向

ふへ渡らしたのだ」

宗彦「ハ、ハア、一杯喰はされましたな。併し失敗が幸ひになるとは茲の事だ。

何れ他人にも要るだらうし、原彦さま、お前と二人、持てる丈持つて向ふへ渡ら

うかな」

と大きな熊の皮をひん抱き谷川に足を入れる。原彦も體一面に熊の皮をくくりつ

け、漸くにして再び谷川を渡り、田吾作の前に引返して來た。

田吾作「皆さま大い御苦勞で御座いました。お土産に一番飛切の上等を頂戴致し

ませう」

原彦「イエイエ是れは私の分丈だ。生命も危ない此谷川を、どうして二人前も背負うて渡れるものか、お前の分はチャンと向ふに、屑ばかり残してある。人の苦勞で徳を取るといふ事は、神様の大變に戒め玉ふ所だ。サアサア自分の物は自分で處置をつけるのだよ」

田吾作「そんな事は、遠の昔から御存じの田吾作だ。釋迦に經を説く様な事を言うて貰ふまいかい」

早くもザブザブと對岸へ渡り、洗ひ立ての選り残りのツクツクばかり引抱へ、田吾作「ヤア重い奴ばかり除けて置きやがった。併し己れの欲する所能く人に施せ。欲せざる所は人に施す勿れと云ふ事が有るなア」

とワザと大音聲に呼はり乍ら、藤蔓に残らず縛りつけ、自分の腰に結び、ザアザアと引ずり乍ら歸つて來た。

田吾作「宣傳使さま、私の智慧は大したものでせう。神智神策、水も洩らさぬ所まで水を利用し、此通り澤山の獲物を占領して來ました。ヤツパリ役者が七八枚も上だ。千兩役者だからなア」

と獨り悦に入つて居る。

原彦「チツと絞つてあげませうか。こりや干さねば重たくて持つて往けますまい」

田吾作「不言實行だよ」

原彦「不言實行とは初めて聞きますが、どう云ふ意味ですか。言つて下さいな」

田吾作「言はないのに氣がついて實行するのが不言實行だ。言つてやるとよいが、

天機を洩らすと雨が降る。不言の教無爲の化だ。マアマア考へて社會奉仕を勵む

が、御神徳の入口だな、アハ、ハ、ハ」

原彦「宣傳使様、不言實行の譯を聞かして下さいませぬか」

宗彦は黙々として、濡れた皮を取り上げ、一生懸命に絞つては木の枝に引つか

ける。原彦も黙つて見て居る譯にも行かず、同じく皮を絞つては懸け、絞つては

懸けて風に乾かさうと、車輪の活動を行つて居る。田吾作は、

田吾作「ア、それが不言實行だよ。分つたか」

原彦「まだ分りませぬ」

田吾作「分らなくても、實地さへ出来ればよいのだ。現今の奴は宣傳だけは立派

だが少しも實行が伴はない。併しまアマア漸く及第點に達した。宗彦様は率先して不言實行をやられたから六十五點、お前は漸く四十五點だ。五點の事で落第點になる所だよ」

原彦「ますます分りませぬ」

田吾作「原の腹が暗くつて、胸が開けぬから、實地の事が目があるても見えず、田吾作の立派な生きた教が耳へ這入らず、嗅出す事も出來ず、舌は有つても味はふ事が出來ないのだ。斯う思へば何にも知らずに實行する者位幸福な者はないワ

イ」

宗彦「有難う御座いました。お蔭で田吾作の宣傳使より六十五點頂戴しました。

サア是れでモウ三十五點頂戴致しませうか」

と一番立派な熊の皮を選び出して、田吾作の背中に着せる。

田吾作「ヨシヨシ、モウ試験濟だ。希望通り三十五點を與へる。これで満點だ。

〔満天〕下に神教を宣傳しても恥ぢることなき大宣傳使だ。お芽出たう。銀のセ

コンドでも賞與に與りたいのだが、生憎持つて居ないから、親讓りのへソンドで

辛抱するのだなア、これでも十二時が来るとよく知つて居る」

原彦「私にも、せめて二十點下さいな」

と自分の攫へて来た中より、最も優れたる毛皮を取り出し、田吾作の背中に乗せる。

田吾作「ヨシヨシ、物品【一點】俺に呉れたから、【一點】を増してやらう。總計四十六點だ、アハ、ハ、ハ、」

田吾作は原彦の顔を眺め乍ら、又もや、

田吾作「不言實行 不言實行」

と節をつけて謠ふ様に繰返して居る。原彦は狼狽へて、彼方の皮をかやして見、此方の皮を髑つて見、田吾作の背中を撫でて見るやら、宣傳使の足許の草鞋が切れて居るのではなからうかと、キリキリ舞ひをして居る。田吾作は一層大きな聲で、節をつけて、

田吾作「不言實行 不言實行」

を又もや繰返して居る。原彦はハツと膝を叩いて、片方に落ちてゐた棒の様な木

切切れを拾ひろひ、毛皮けがはを兩端りやうはしに括くくりつけ、肩かたに擔かついで、

原彦はらひこ「サア私わたくしが不言實行ふげんじつかうのお伴ともを致いたします。不言菩薩ふげんぼさつに實行菩薩じつかうぼさつさま様、サアお出いでなさいませ」

田吾作たごさく「普賢菩薩ふげんぼさつは聞きいた事ことがあるが、實行菩薩じつかうぼさつは聞きき始はじめた」

原彦はらひこ「實行菩薩じつかうぼさつといへば、三口さんく様の事ことだよ。瑞みづの御靈みたまの大神おほかみさまだ。本當ほんたうに月げつ

光わう（結構けつこう）な神かみさまと云いふ事ことだよ」

田吾作たごさく「アハ一月いっげつ光菩薩くわつくわうぼさつの洒落しやれだな。洒落所しやれどころかい、是これから先さきは不言實行ふげんじつかうで勝かつの

だ。最前さいぜんの五人ごにんの男女だんぢよを見みい。一口ひとくちも言いはず、不言實行ふげんじつかうの標本へうほんを示しめして、手早てばやく

逃にげやがつたぢやないか。あれ位くらゐ慈悲じひ深い奴やつは有あつたものぢやない。其そのお蔭かげで吾々われわれ

は月光げつくわうな恩惠おんけいに浴よくしたのだ、アハ、、、ドレ田吾作たごさくも不言實行菩薩ふげんじつかうぼさつと出でかけよ

うかい」

と先さきに立たちて羊腸やうちやうの小徑こみちを辿たどり進すすんで行く。田吾作たごさくは歩あゆみ減へらした細ほそい路みちを、

曲々まがまがと舞まひ乍なら、先さきに立たちて稍平坦ややへいたんな地ち點てんに着ついた。

田吾作たごさく「ア、不言實行組ふげんじつかうぐみは何なにをして居ゐるのか。足あしの遅おそい事ことだなア」

と呟いて居る。そこへ横合から三人の五六才と覺しき男の子、一人は赤裸となり顔に手を當てて泣いて居る。一人は裸の儘で面ふくらしして怒つて居る。一人は二ヤニヤと笑ふ。

田吾作「ヤア此奴ア三國ヶ嶽の化物だな。こんな所で三人上戸が出て來やがつて、酒でも有つたら不言實行してやるのだが。生憎酒もなし……八、八赤裸だ。ヨシヨシ考へがある。早く原彦の奴、毛皮を持つて來やがると良いのだけれどなア」と云ふ折しもハアハアと息を喘ませ、兩人は登つて來た。田吾作は物をも言はず、原彦の擔いで居る荷をボツタクリ、手早くほどいて、其中の小ささうな皮を選び別け出した。原彦は、

原彦「不言實行だつて、泥棒まで實行して良いのか」

と脹れる。田吾作は三人の童子を指し示した。宗彦、原彦は見るより「ヤア」と倒れむばかりに驚いた。よくよく見れば三人の童子の背後から五色の光明が輝き、麗しき靈衣に包まれて居る。田吾作は少しも氣が付かず、慌てまはして、適當の毛皮を取り出し、三人に一々着せて廻つた。三人は黙つて毛皮を取り外し、大地

にパツと敷しいて、各自めいめい其上そのうへに行儀ぎやうぎよくキチンと坐すわつた。

宗彦むねひこ「これはこれは何神様なにがみさまかは知りませぬが、よくマア現あらはれて下くださいました。

私わたくしは是れより山頂さんちやうの岩窟いはやに割據かつきよする鬼婆おにばばを言向ことむけ和やはす爲ために参まゐります。どうぞ御守ごしゆ護ごを御願おねがひ致いたします。」

笑童子わらひご「アハ、七尺しちしゃくの男子だんしが……而も宣傳使せんでんしの肩書かたがきを持ち、岩窟がんくつの鬼婆おにばばを

退治たいぢせむと、此處ここまで勇み進すすんで登のぼり來き乍ながら、人の助たすけを借からうとするのか。八

ツハツハ可笑をかしい可笑をかしい、依頼心いらいしんの強つよい男をとこだなア。」

宗彦むねひこ「恐れ入おそりました。モウ決けつして依頼いらいは致いたしませぬ。何れいつの神様かみさまか知りませぬ

が、ついお頼たのみ申まをすとか、御守護ごしゆごを願ねがひますとか云いふ事が、吾々われわれの常套語じやうたうごになつ

て居ゐますので心こころにもなき卑怯ひけふな事ことを申まをしたので御座ございます。どうぞ見直みなほし聞直ききなほし

て下くださいませ。」

泣童子なきどうじ「アンアン、情無なさけない宣傳使せんでんしぢやなア。三人さんにんも荒男あらをとこが、たつた一人ひとりの婆ばば

アを當あてに出でて來きよつて、何なんの態さまぢや。斯こんな事ことでどうして三五教あななひけうの神徳しんとくが現あらはれ

ようぞ。思おもへば思おもへば厭いやになつて來きた。これでは國治立大神様くにはるたちのおほかみさま、素盞鳴尊様すさのをのみことさまが何なに

程骨を折り、心を碎かしやつても、こんなガラクタ宣傳使ばかりでは、神政成就も覺束無いわいの、……オンオンオン」

宗彦「どうぞモウ見直し聞直し下さいませ。是からキツと勇猛心を發揮し、婆アの千匹や萬匹は、善言美詞の言靈の神力に依つて吹き散らしますから、どうぞ泣いて下さいますな」

泣童子「捕らぬ狸の皮算用をしよつて、當もない事に威張つて居る……其心根が可憐らしい。一寸先は暗の世ぢや。なんにも知らぬ人民は、足許に火が燃えて來る迄分らないのか。ア、ア可哀相なものぢや。どうして人間は是れ丈、物が分らぬのだらうな……オンオンオン」

宗彦「誠に汗顔の至りで御座います。さう仰しやれば……さうですが、何事も神様にお任せ致して進むので御座います」

怒つた顔の童子、面ふくらし目を剥き、童子「惟神、惟神と口癖の様に言ひやがつて、難を避け易きに就き、自分の責任を神様に轉嫁し、惟神中毒病を起し、大きな面をして天下を股にかけ、濁つた言

靈たまの宣傳歌せんでんかを謠うたひ、折角せつかくの結構けつこうな世よの中なかを濁にごす奴やつは貴様きさまの様やうな代物しろものだ。チツとも足元あしもとに目めが付つかず、尻しりが結むすべぬ馬鹿者ばかものだ。それでも誠まことの道みちの宣傳使せんでんしかい。貴様きさまの様やうな穀潰こくつぶしが澤山たくさんに世よの中なかに、ウヨウヨと發わ生きやがるものだから、世界せかいの人民じんみんが苦くるむのだ、エーエー腹はら立たしい。神かみを笠かさに着きたり、杖つゑに突ついたり、尻敷しりしきにしたり、汚けがらはしい、盗ぬすんで來きた熊くまの皮かはを俺達おれたちの背中せなかに乗のせよつて、ケツケツけがらはいワイ。尻敷しりしきにしてやつてもまだ蟲むしが承知しょうちせないのだ。コラスかう小ちひさい子供こどもの様やうに見みえても、至大無外しだいむぐわい、至小無内しせうむない、千變萬化せんべんばんくわの結構けつこうな神様かみさまのお使つかひだぞ。貴様きさまの量見次第りやうけんしだいで、閻魔えんまともなれば、鬼おにともなり、大蛇おほろちともなつて喰くて了しまうてやらうか。イヤ背筋せすぢを立たち割わり鉛なまりの熱湯ねつたうを流ながし込こんで、制敗せいばいをしてやらうか。三國みくにヶ嶽がだけに大蛇おほろちが居をるの、鬼婆おにばばが居をると吐ぬかして、言こと向むけ和やはすの、征服せいふくするのとは何なんの事ことだい。鬼婆おにばばも大蛇おほろちも、鬼おにも惡魔あくまも、貴様きさまの胸むねに割據かつきよして居ゐるのを知らぬのか。鬼婆おにばばを言こと向むけ和やはさうと思おもへば、貴様達きさまたちの腹はらの中なかの鬼婆おにばばから先さきへ改心かいしんさして出でて行ゆきやがれ。大馬鹿者おほろち奴め。ウーン〽と目めを剥むき出だし、大おほきな口くちを開あけ、咬かぶり付つく様やうな勢いきほひで、突つつ立たち上あり、三さん人にんの顔かほ

をギョロギョロと睨めまはす。三人は一度に大地に頭を下げ、三人「誠に取違ひを致して居りました。イヤもう結構な御神徳を戴きました。モウこれから改心を致します」

笑童子「アハ、ハ、ハ、一寸よいと得意がつて無暗に噪やぎ、一寸叱言を聞いては直に悄氣返るカメリヨンの様な男だな。大きな圖體をして、こんなチツポケな子供に叱られて、それが怖いのかい。神界にはそんな妙な弱い弱い人足は一人も居りはせぬぞや。神界の喜劇よりも、よつぽど面白い面白い。アハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、ハ」

と臍を抱へて笑ひ轉ける。

泣童子「アア情無事事を見せられたものだ。これでも現界では選りに選つて選まれた特別選手ぢやさうなが、其他は推して知るべしだ。瑞の御靈の祖神様も嘸御骨の折れる事だらう。オイオイオイ。あまり悲しうて涙も出やせぬわいなア。宣傳使と云ふ者は、何とした腑甲斐ないものだらう。蛸の様に骨も何も有りやせぬワ。こんな事で、どうして八岐の大蛇が退治が出来るものか、世の中は益々悪

鬼羅刹の横行闊歩を擅にさせるのみだ。どうして現界には誠らしい者が無いのだらうか、アンアンアン」

田吾作「モシモシ子供の神さま、さうお歎きなさいますな。廣い世界には一人や二人は立派な者が無いとも言へませぬ。現に此處に唯一人有るぢやありませんか。さう取越し苦勞をして、泣くものぢやありませんか。世の中は何事も善言美詞に宣り直すのが天地の御規則だ。泣いて暮すも一生なら、笑つて暮すも一生だ。結構な此世の中に、何が不足でメソメソと泣くのだ。わしは「悔み事と泣き事は大嫌ひであるぞよ。勇んで暮して下されよ」と云ふ神様の教を守つて、世の中を大樂觀して活動して居るのだ。お前さまもチツとは思ひ直して改心なさつたらどうだ。「悔めば悔む事が出来て来るぞよ」……と云ふ事を知つとりますか。ヤ、まだ子供だから分らぬのも無理はない」

泣童子「わしも朝から晩まで泣いて暮した事はない。今日初めて泣かねばならぬ事が出来たのだわいのう……アンアンアン……折角骨折つて、生命懸けで熊を捕り、皮を綺麗に洗ひ、爺さま婆アさまの着物にしようと思つて、楽しんで居つた

人間の物品を、横奪した泥棒根性の宣傳使に説教を聞かされるかと思へば、残念で残念で、是が泣かずに居られようか。モウどうぞ今日限り泥棒根性はやめて下さい……アンアンアン……それに付けても言依別神様から、大切な御命令を受けた宗彦のデモ宣傳使、二人の奴が盗人をするのに、なぜ黙つて居つたか、……イヤ自分から率先して泥棒の手本を見せよつたぢやないか。斯んな事でどうして誠の道が開けると思ふか。アア日暮れて道遠しの感益々深しだ。どうしたら人間らしい人間が、一人でも出来るだらう。泥棒に聖山を汚されて取返しのならぬ事をした哩……アンアンアン」

宗彦「イヤ決して決して泥棒をすると云ふ様な考へはチツとも有りませぬ。あの様な所に棄てておいては、又泥棒が攫へて行つちやならない……それよりも吾々が暫く拜借して、又歸りがけにや、舊の所へ御返しをして歸る積りだつた。世の中は相身互だからと思つて、一寸借つたのですよ。心の底から泥棒する根性は有りませぬ」

怒童子「エーつべこべと此期に及んで卑怯未練な言ひ譯をするのが氣に喰はぬワ

イ。貴様は女殺しの後家倒し、其上嬢泣かせの家潰し、澤山な人を泣かして来た揚句、不知不識とは云ひながら、平氣の平三でお勝と〇〇になつて居た汚れた人足だ。何程言依別神様から大任を仰せ付けられたと言つて、一も二もなく御受けして來ると云ふ事が有るものか。貴様はそれでも清淨潔白な人間だと思つて居るのか。此の岩窟の鬼婆よりも、モ一つ悪い奴だ。心の底から改心すればよし、マゴマゴして居ると、天狗風を吹かして吹き飛ばしてやるぞ。天下の娑婆塞ぎ奴。ここを何處だと心得てゐる。貴様の目には惡神の巢窟と見えるであらうが、誠の神の目から見れば、どこもかしこも皆天國淨土だ。貴様の心に地獄が築かれ、鐵條網が張られ、鬼が巢を組んで居るのが分らぬか」

三人は頭を鐵槌にて打碎かるる様な心地し、一言も發し得ず、大地にピタリと鰭伏し、暫くは頭を得上げず、慄ひ戦いて居た。半時ばかり經ちしと思ふ頃、得も謂はれぬ美はしき天然の音樂耳を澄まして響きわたる。三人はフト頭を擡げ四邊を見れば、童子の影もなく又一枚の獸皮も無くなつて居る。

田吾作「神様から大變なお目玉を頂戴したものだ。原彦の奴率先して不言竊盜を

やるものだから、斯んな目に遭つたのだよ。併し乍らマアマア結構な教訓を受け
たものだ。先づ自分の心の中の鬼婆を征服して掛らねば、何程努力しても駄目だ
ワイ」

原彦「三人の愁笑怒の神様が現はれて、噛んで呑む様に、詳細に堂々と教へて下
さるのに、お前が口答へをするものだから、到頭怒鳴りつけられ、縮みあがつて、
大きな七尺の男が斯んな馬鹿な態を見たのだ。チツト是れから言靈を控へて貰は
ねば、此先はどんな事が突發するか分つたものぢやありませんか。ナア宗彦の
宣傳使様」

宗彦「何事も神様のなさる事。惟神に我々は任すより仕方が有りませぬ」
田吾作「それ又覺えの悪い、今惟神と云つて怒られたぢやありませんか。惟神中
毒をすると、怒り神さんが又現はれますぞや。貴方こそ慎んで貰はねばなりません

ぬ」

宗彦「さうだと云つて、我々は惟神の道に仕へて居る者だ。惟神を言はなければ、
宣傳も何も出来ぬぢやないか。鶏にコケコーと鳴くな、鳥にカアカア囀るな、釣

鐘かねになんば敲たたかれてもゴンゴンと鳴ならずに沈黙ちんもくせよと云いふ様な註文ちゅうもんだないか。そんな天地てんち不自然ふしぜんな事ことがどうして實行じっかう出来るものかい」

田吾作たごさく「惟神かむながら、不言實行ふげんじっかうさへすれば良いのですよ。何事なにごとも心こころと行おこなひを惟神かむながらにして、口くちだけは暫しばらく言いはない方が宜よろしかる。材木ざいもくでもカンナがらをかけて見みなさい、一遍べん々いっ々べん細ほそくなるぢやないか。あまり執拗しつこうカンナがらを使つかつて居をると、結局しまひにや絲いとの様やうになつて、結構けつこうな宣傳せんでん使しかむ神柱かむしじゆの資格しかくが消滅せうめつして了しまひますワ」

宗彦むねひこ「ハ、ハ、ハ、ハ、餘程よほど怒おこり神様かみさまの御言おことばが感應こたへたと見みえるワイ。ありや一體いったいどこから來きた神様かみさまだと思おもつて居をるのだ」

田吾作たごさく「神界しんかいの事ことは我々われわれに分わかるものぢや有りませぬが、マア天てんから天降あまくだられたと云いふより仕方しかたが有ありますまい」

宗彦むねひこ「馬鹿ばか言いふな、あの怒おこり神かみさまは宗彦むねひこさまの本守護神ほんしゆごじんだ。泣なき神かみさまが貴様きさまの本守護神ほんしゆごじん、笑わらひ神かみさまが留公とめこうの守護神しゆごじんだ。チツト貴様きさま改心かいしんせぬとあの通とほり守護神しゆごじんがベソを搔かいて居をるぢやないか」

田吾作たごさく「そりやチト違ちがひませう。笑わらつて居をるのが私わたしの守護神しゆごじん、怒おこつて居をるのがあ

あなたの守護神、泣いとる奴が留公の守護神に違ひありません。結構な御用を仰せ付かり乍ら、お前さまはまだ腹の底に曇りがあると見えて、本守護神が怒つて居るのだ。良い加減に改心をしなさらぬと、どんな地異天變が【おこ】つて【おこ】つて、【おこ】りさがすか知れませぬぞ。お前さまの大將面して威張つて歩くのがあまり可笑しうて、田吾さんの本守護神が笑つて居るのだ」

宗彦「どうでも良いぢやないか。怒る神もあれば笑ひ神もあり、泣き神もある。實際のこたア、三柱の神共共通的に守護して御座るのだ」

原彦「モシモシ私丈は本守護神がどうなりました」

田吾作「お前の本守護神はまだ現はれる幕ぢやない、地平線下の身魂だから、土の上へ出る所へは往かぬ。併し乍ら孟宗竹でさへも土を割つてニユーと首を突出すのだから、どつか其邊に頭をあげかけてあるかも分らぬぞ。チツト探して見たらどうだ」

原彦「アハ、ハ、ハ、身魂と筍と一つに見られちゃ、原彦も迷惑だ。丸でドクトルの身魂の様に、田吾さんが仰しやいますワイ。疑ふのぢやありません。随

分道理に違うた事を言ふお方ですな。

「竹の子の番人見れば藪にらみ」

アハ、ハ、ハ、オイ藪にらみの田吾竹さま」

田吾作「議論は後にせい。筍の身魂と云ふ事は、モウつい、日日薬で竹々と分つて来る。チクと身魂を練薬して、俺の言ふ事を膏薬（後學）の爲に聞いて置くのだな。……エー何を薬々と笑ふのだい。薬價い（厄介）者奴、それよりも身魂の

煎薬（洗濯）が一等だぞ」

原彦「これはこれはイカい（醫界）お世話になりました。漸く醫師（意思）が疎通しました。モウ此上決して、醫（異）議は申しませぬ」

田吾作「キット醫薬（違約）をするでないぞ。俺の云ふ事を守れば、キット薬九層倍の報いが出て来る。力一杯薬（約）を守つて、此上は口答へをしてはならぬぞ。俺の云ふ事はチツトは苦い事もある。併し良薬は口に苦しだ。薬（厄）雑魂を下痢させて、神靈の注射を爲し、身體一面何の醫（異）状もないとこまで清めて、是れから悪魔征伐に向ふのだ。心に煩ひのある時は病が起ると云ふ、其病の

宗彦「アハ、ハ、ハ、口も達者な男だが、随分足も達者だ……ヨウヨウ、一人の聲かと思へば大勢らしいぞ。こりや安閑としては居られない。私も行つて調べて見ようかな」

と首を傾げて居る。原彦は、

「マア少時御待ちなさいませ。今に田吾さまが歸へつて来れば、様子が分りませうから、大方最前出た泣きの守護神が極端に泣きの本性を發揮してるのかも知れませぬ。最前の様なお叱言を頂戴すると困りますから、マアゆつくりと此處に待ちませうかい」

宗彦「そうだな。待つてもよいが、併し何だか氣がイライラして来た。田吾作一人遣つて置くのも心許ない。………そんなら此處に待つて居るから、原さま、お前往つて来て呉れないか」

原彦「ハイ、そりやモウさうです。あまり何ですから、何となく氣分が何しませぬ。ならう事なら、何々様と御一緒に願ひたいものですなア」

宗彦「分つたやうな分らぬやうな事を云ふぢやないか。ハツキリと言つたらどう

だ
」

原彦 「現在私の心が、あなたには分りませぬか。天眼通、天耳通、漏盡通、宿命通、自他神通、感通に天言通、七神通の阿羅耶識を得たと云ふ宣傳使ぢやありませんか、一を聞いて十を知る身魂でない、誠の御用は出来ぬぞよ」……と神様が仰有いませう。さうすれば貴方は最前の百點を返上なさらねばならぬ破目に陥りますよ」

宗彦 「俺は天言通はお神徳を戴いて居るが、どうもまだ人語通は得て居ないのだ。況して曇つた身魂の囁きは尚更判別がつきかねる。何程近くに居つても、御神諭の通り「燈臺下は眞暗がり、遠國からわかりて来るぞよ」……と云ふのが本當だからなア」

原彦 「左様か、左様ならばあなたも何々の割とは何々ですな。私は今迄チツト許り八丁笠を買ひ被つて居りました」

宗彦 「さうだらう、御互様だ。お前もモウチツト勇氣が有るかと思へば、實に脆いものだ、田吾作でさへも、一人で探険にいったのに、わしの側にくつついて、

慄ふるうて居をるとは實じつに見み上げたものだ。生命いのちを宣傳せんでん使しに差さ上げると云いつた癖くせに、ヤ

ッパリ生命いのちが惜をしいと見みえるワイ。きつく俺おれも買かひ被かぶつたものだワイ」

原彦はらひこ「初はじめに言いつたのは、アラ見本みほんですよ。見本通みほんどほりの物品ぶつびんを製せい造ぞうして輸ゆ出しゅつでもし

ようものなら、海關かいくわん税ぜいを澤山たくさん取とられて、今日こんにちの烈はげしい商戰しやうげんに零敗ぜろはいを取とります

ワ」

宗彦むねひこ「アハ、ハ、ハ、お前まへは口くちばかりの男をとこだなア」

原彦はらひこ「さうですとも、ハラから出口でぐちの神かみが表おもてに現あらはれて、此世このよを惡あく【に】立直たてなほし、

善ぜんの身魂みたま【を】改心かいしんさせるお役やくですもの……」

宗彦むねひこ「惡あくに立直たてなほし、善ぜんの身魂みたまを改心かいしんさすとは、そら何なにを言いふのだ」

原彦はらひこ「イヤ一寸ちよつと違ちがひました。「二」と「ヲ」との配はい置ちを誤あやまつたのです。惡あく【を】

立直たてなほし、善ぜんの身魂みたま【に】改心かいしんさせるのです。上うへに付つくか、下したに付つくか、「に」……

……にか、「を」にか、どつちやにせよ、チツト許ばかりの間違まちがひだ。さう一字いちじや二字にじ

配はい置ちが違ちがつたと言いつて、氣きの小ちひさい事ことを言いふものぢやありませんぬワ。アハ、ハ、ハ、」

俄にはかに傍そばの小柴こしばの中なかよりガサガサと音おとを立て、現あらはれて來きたのは田吾たごさく作さくであつた。

宗彦「ヤア田吾作か、様子はとうだなア」

田吾作「最早讎敵は攻め寄せて候へば、あなたに代つて一戦、御身は早く此場を遁れて下さりませ……と口には言へど御名残……チ、チ、チ、チンチンだ」

宗彦「ハ、ハ、ハ、ハ、そんな冗談言つてる所ぢやなからう。どんな事が起つて居つ

たか、早く聞かして呉れい」

田吾作「ハイ申上げます。一方の大將は大岩石を楯に取り、一丈有餘の大木の小

枝に甲冑を鎧ひ、一生懸命に阿修羅王の如く荒れ狂ひ、采配採つて號令をなすあ

り、此方の谷間よりは、又古今無雙の豪傑樹上に陣取り、負ず劣らず聲を限りに

キヤツ キヤツ キヤツ キヤツの言靈戦、勇ましかりける次第なり、ハアハア

ハアハアだ。ウツフツフツ ウツフツフツフウ」

宗彦「なアんだ、ちツとも分らぬぢやないか」

田吾作「ソラさうでせうとも。實地目撃した私でさへも、テンと了解の出来ない、

猿芝居、否猿合戦ですもの……」

宗彦「ハ、ハ、ハ、ハ、千匹猿の喧嘩だつたのか。なアーんだ、しやうもない。……」

サアサア愚圖々々しては居られまいぞ。此前途で又々大蛇の芝居か、熊のダンスでも開演されて居るだらう、面白い無料観覧と出かけよう』
(大正一一・五・一四 舊四・一八 松村眞澄録)

第一〇章 山中の怪〔六七二〕

田吾作「朝日は光る月は照る 武志の森の小夜砧

宇都山郷を立出でて 三五教の宣傳使

神のまにまに宗彦が 後に隨ひ來て見れば

誠明石の山道は 忽ち霧に塞がりて

不動の瀧も雲隠れ 一步二歩探り寄り

水音合圖に留公が 留るも聞かず眞裸體

蛙かはづの面つらに水行みづぎやうを ザワザワと浴あび乍ながら
 手て早はやく衣類いるあを肩かたにかけ 霧きり押おしわけて山頂さんちやうに
 上のぼつて四方よもを眺ながむれば 丹波たんば名物めいぶつ霧きりの海うみ
 彼方あちら此方こちらにポコポコと 山やまの頂いただき浮うき出いでて
 宛然さながら繪ゑを見みる如ごとくなる 景色けしきに名な残ごりを惜をしみつつ
 歩あゆみの下へ手たな留とめ公こうを 抱かかへるやうに可いた愛はりつ
 明石あかしの里さとも乗のり越こえて 道みちの傍かたへのひと一ひとつ家やに
 病やまひに惱なやむ原彦はらひこが 身みの禍わざはひをとり除のけて
 此處ここにいよいよ四よにん人づ連づれ 宗彦むねひこ司つかさの後あとを追おひ
 山國やまくに川がはのひと一ひとつ橋ばし 渡わたる折をりしも川下かはしもに
 ザンブと立たちし水煙みづけぶり 唯事ただごとならじと田吾たごさく作くが
 脚あしを速はやめて川かはの邊へに 驅はせつけ見みればこは如何いかに
 雪ゆきを欺あざむく白しろい顔かほ 優やさしき細ほそき手てをあげて
 流ながれの中なかに立岩たちいはの 蔭かげに潜ひそみて聲こゑ限かぎり

救たすけを叫さけぶ眞ま最さい中ちゆう

見みるに見みかねて田た吾ご作さくが

仁みろく慈こころの心こころを發は揮つきして

わが身みを忘わすれ飛とび込こめば

川かはに落おちたる妙めう齡れいの

美び人じんと見みえしは大おほ江え山やま

鬼おにの身み魂たまの再さい來らいか

青あをい角つのをば額がく上じやうに

ニユツと生はして目めを剥むいて

鰐わに口ぐち開ひらきカラカラと

笑わらうてけつかる厭いやらしさ

波なみに揉もまれた田た吾ご作さくも

進しん退たい茲ここに谷きまりて

溺でき死しをするかと思おもふほど

息いきも苦くるしくなつた時とき

何なんだか知しらぬが妙めうな聲こゑ

聞きえ來きたるとみるうちに

裸はだ體かになつた俺おれの身みは

巖いはの上うへに衝つつ立たちぬ

人にん三さん化け七しち鬼おに娘むすめ

惡あく魔まの奴やつが睨にらみ居ゐる

コリヤ堪たまらぬと氣きを焦いらち

宗むね彦ひこさまや留とめ公こうを

聲こゑを限かぎりに招まねけども

臆おく病びやう風かぜに襲おそはれた

いの一いち番ばんに宣せん傳でん使し

宗むね彦ひこさまを始はじめとし

留とめ公こう、原はら彦ひこ兩りやう人にんは

青い顔して慄へゐる
エーもう駄目だもう駄目だ

斯んな卑怯な腰抜けを
力にするのが間違ひよ

モ一此上は是非もない
地獄の釜のド天井

一足飛びに飛ぶ心地
川へザンブと踊り入り

鬼の娘の肩をとり
心中しようか待て暫し

たつた一つの此生命
死ぬのはチツト早かると

日頃手練の游泳術
悠悠騒がず急流を

渡つて岸に駆け上り
後振り返り眺むれば

鬼の娘にあらずして
見るも怖ろし大蛇の姿

ア、欺された欺された
俺は夢でも見て居たか

頬を掴つて調ぶれば
やつぱり頬はピリピリと

微に苦痛を訴へる
水は何うだと手に掬ひ

嘗めて見たれば矢張り水
瑞の身魂の御守護は

清く涼しく此通り
俺は結構な修業した

筑紫つくしの日向ひむかの立花たちはなの
小戸をどの青木あをきヶ原がはらに降おり

上かみの流ながれは瀬せが速はやい
下しもの流ながれは瀬せが弱よわい

瑞みづの身魂みたまや三栗みつくりの
中瀬なかせに下おりて心地こちよ好よく

楔みそぎ袂はらひの神業かむわざを
首尾しゆび克よく了をへて三人さんにんが

茫然ぼうぜん自失じしつの爲體ていたらく
アフンとして居ゐる其前そのまへに

ニユツと現あらはれオイ留公とめこう
原彦はらひこ何なにをして居ゐるか

ちつとは確しつりしてくれと
癩しやくに障さはつて横面よこづらを

ポカリとやつて見みた所ところ
神力しんりきこもる鐵腕てつわんに

一堪ひとたまりもなく顛倒てんたうし
風かぜに木この葉はの散ちるやうに

さしもに廣ひろい大川おほかはを
毬まりを中空ちうくうに投なげし如ごと

二人ふたりの奴やつは飛とび散ちつた
それより宗彦むねひこ宣傳せんでん使し

田吾たごさく作さくさまの神力しんりきに
肝きもを潰つぶして今迄いままでの

態度たいどは忽たちまち一變いつべんし
心こころの底そこから我がを折をつて

田吾たごさく作さくさまを様付さまづけに
言靈ことたま變かへた可笑をかしさよ

丸木の橋を後にして 旗鼓堂々と来て見れば

錦の衣を纏ひたる 山姫さまが左右より

化粧を凝らして田吾作を ちよつと待つてと呼び止める

三國ヶ嶽の曲神を 征伐道中の此身體

お門が廣いサア放せ 花瀬の里を後にして

谷を飛び越え岩傳ひ やうやう三國の山麓に

辿りついたる折もあれ 留公の態度は一變し

徐々弱音を吹きかける コリヤ面白い面白い

屹度彼奴のことならば 奇抜な芝居を打つである

勝手にせよと突きやれば 留公の奴は喜んで

尻ひつからげスタスタと 今來し道を下り行く

後に残つた三人は 激湍飛沫轟々と

音喧しき谷川の 邊りを傳ひわけ登る

川を隔てて四五人の 得體の知れぬ老若が

熊くまの皮かはやら猪ししの皮かは
櫛たすき十字じふじにあやどつて

木き々の梢こすゑに干ほし乍ながら
残のこつた熊くまの生皮なまかはを

谷たにの流ながれに浸ひたしつと
物ものをも言いはず洗あらひ居ゐる

一いつ行かうの中なかの周章あわてもの者
腹はらの腐くさつた原彦はらひこが

欲よくに恍とほけてザブザブと
生いのち命まを的まとの谷渡たにわたり

見みるより五人ごにんの老若らうじやくは
この勢いきほひに辟易へきえきし

物ものをも言いはず手真てま似ねして
雲くもを霞かすみと遁にげて行ゆく

續つづいて宗彦むねひこ宣傳せんでん使し
又またもや谷たにを打渡うちわたり

欲よくに限かぎり無なき熊鷹くまたかの
面つらの皮剥かははぎヌースしき式

遺のこるくまなく發揮はつきして
矛ほこも交まじへぬ戰利品せんりひん

鼻高はなたか々ただかとうごめかし
不ふげん言じつ實行かうと洒落しやれ乍ながら

田吾たご作さくさんが捕獲ほくわくした
濡ぬれた皮かはをば汗あせかいて

絞しぼつてくれた殊勝しゆしやうさよ
迷まようた路みちを踏ふみ直なほし

小柴こしばをわけてテクテクと
胸むなつき坂ざかを這はひ上あがる

忽ち茲に三人の

童子の姿現はれて

泣き出す笑ふ又怒る

七尺有餘の荒男

三尺足らずの幼兒に

叱り飛ばされ散々に

油の汗を搾られて

謝り入つた不甲斐なさ

童子の姿は忽ちに

煙と消えた其後に

耳の鼓膜を破りつつ

傳はり來る怪聲に

三國ヶ嶽の大秘密

探る手段とならうかと

怖氣づいたる兩人を

後に残して田吾作が

小柴押わけ怪聲を

辿り辿りて千仞の

谷の傍に來て見れば

木傳ふ猿の叫び聲

案に相違の自棄腹

スゴスゴ歸つて兩人を

わが言靈に齧かし

面白可笑しく上り行く

聽ては名高き鬼婆の

岩窟の棲處も見えるだろ

神の賜ひし言靈の

伊吹の狭霧を極端に

神力強い田吾作が
イの一番に發射して

高天原の蓮華臺
錦の宮の御前に

功を建つるは目の當り
ア、勇ましや勇ましや

これから乃公が司令官
宗彦さまよ原彦よ

互に胸を打ち開けて
〔腹〕を合して田吾作が

指揮命令を遵奉し
蜈蚣の姫の成れの果て

人を取り喰ふ鬼婆や
それに隨ふ曲神を

一泡吹かせ三五の
教の道に救はむは

今日の當り見る様だ
ア、面白い面白い

神が表に現はれて
善と惡とを立別ける

田吾作ここに現はれて
神と鬼とを立別けて

此世を造りし皇神の
貴の御前に復命

申すも餘り遠からず
來れよ來れいざ來れ

敵は幾萬ありとても
怖るる勿れ怖るるな

神は汝と俱に在り 神は我身に宿ります

ア、惟神々々 御靈幸はひましませよ

と呂律も廻らぬ口から出任せの歌を謠ひ、田吾作は勢鋭く、山上目蒐けて進み行く。幼なき赤兒に乳をふくませ乍ら下り來る妙齡の美人唯一人、稍面部に憂愁の色を浮べ乍ら、灌木の茂みより浮いたやうに現はれた。

田吾作「ヤア山姫の奴、俺の圓滿清朗なる言靈に感動し居つて、感謝の意を表するために現はれたのだな。コレハコレハ山上の御婦人、山の神様、出迎ひ大儀でござる」

女「オホ、、、」

田吾作「コリヤ山女、俺を誰だと心得て居る。七尺の男子が物申して居るのに、無禮千萬にも吾々を冷笑いたすとは怪しからぬ代物だ。汝は何といふ魔神であるか。あり體に申上げる。愚圖々々致せば此の鐵腕が承知を致さぬぞ」

女「オホ、、、」

赤兒あかご「フギア フギア フギア」

田吾作たごさく「宗彦むねひこさま、原彦はらひこさま、チツト加勢かせいして下くださらぬか。随分ずぶん怪あやしい代物しろものです

がなア」

宗彦むねひこ「最前さいぜんからお前まへの歌うたを聞きいて居をれば、随分ずぶん豪勢かうせいなものだつた。何事なにごとも自分じぶんで

なければ出来できないやうな業託ごふたくを列ならべたぢやないか」

田吾作たごさく「業託ごふたくは業託ごふたくとして此際このさい一臂いつびの補助ほじよを願ねがはねば、言靈會社ことたまくわいしゃも經營難けいえいなんに陥おちいり、

破産はさんの運命うんめいに瀕ひんするかも分わかりませぬ。どうぞ嘘うそ八百株はつしゆほど持もつて下くださらぬか。さ

うして原彦はらひこさまには代言だいいげん三百株さんびやくかぶほど御願おねがひします」

宗彦むねひこ「アハ、ハ、ハ、」

原彦はらひこ「ウフ、ハ、ハ、」

女をんな「オホ、ハ、ハ、」

赤兒あかご「フギア フギア フギア」

田吾作たごさく「エー貴様きさま等は泣ないたり、笑わらうたり人ひとを馬鹿ばかにするのか。貴様きさまが泣笑なきわらひで

責せめるなら俺おれは怒おこりの言靈ことたまだ。「おこり」といふものは間歇性かんけつせいの病氣びやうきで、隔日かくじつに

来るものだが、俺は毎日毎晩【確實】に責めてやるから、左様思へ

女「オホ、、、」

赤兒「フギア フギア フギア」

田吾作「エー又泣いたり笑ったり、此の結構な神國に生れて、泣いたり笑ったり

する奴があるか。謹み畏み眞面目になつて御神恩を感謝せぬかい」

宗彦「モシモシ御女中、斯様な處に赤ん坊を抱いて現はれ給うたのは、何れの神

様でございますか。どうぞ御名を名告り下さいませ」

田吾作「エー宗彦の宣傳使、何を慌けてござるのだ。此奴は三國ヶ嶽の古狐だ。

古狐に御丁寧な敬ひ言葉を使ふといふ事がありますか。大方眉毛を讀まれて了つ

たのでせう。アア御用心御用心」

と言ひつつ頻りに眉に唾を指尖で發送してゐる。

田吾作「アア留公は豫ての計畫を忘れ居つたか。なんぼ待つて居つても現はれて

はくれず、力に思ふ宣傳使は狐につままれる。何程智謀絶倫の俺でも、マア二人

の氣違ひを看病し乍ら敵地に進むことは出来ない。誰か出て来て此足手纏ひの氣

違ひを引留めてくれるものがあるまいかなア。近くに癪狂院があれば入院させた
いものだが、深山の事とて、仰天院ばかりで精神病院らしいものも無し、何うし
たらよからう。無線電話をかけて言依別様の應援を願ふ譯にも行かず、ア、困つ
た破目になつたものだ。イヤア待て待て、これから無言靈話をかけて留公を呼ん
でやらう」

女は大きな髻をクレツと捲つて見せた。熊のやうな眞黒の毛を一面に生し、見
る見る間に上半身は純白となり、後半身は純黒の獸となつてガサリガサリと歩み
出し、三間程行つてはギヨロツと後を向き、又三間程行つてはギロリツと振向き、
幾十回とも無く繰返し乍ら山上目蒐けて登り行く。

田吾作「どうですか、宗彦さま、原彦さま、天眼通も此處まで應用出来れば結構
なものでせう。無言靈話を高天原へかけたところ、忽ち數萬の神軍此處に現はれ
給ひしその御威勢に怖れ、さしにも兇暴なる曲神も、目も身體も白黒させて正體
を露はし遁げて行つたでせう。これでも田吾作が命令を聞きませぬか」

宗彦「それは、まぐれ當りだよ。お前は未だ宣傳使の肩書がないのだから、何と

云つても表面に通らない。腐つても鯛だ、名は實の主だから矢張り宣傳使と云ふ名に怖れて、悪魔が正體を露はしたのだ。如何に悪魔だつて名も無き奴等に降伏するものか、無名の人物に降伏するやうなことでは、悪魔の體面に關するからなア」

田吾作「アハ、ハ、ハ、よう仰有いますワイ、宣傳使のレツテル一枚位を金城鐵壁と頼んで、何事もそれでやつて行かうと云ふのは實に無謀だ、無恥だ、依頼心を極端に發揮したものだなア。宣傳使なんかは地の高天原から紙一枚下つて來たが最後、直に首落ちになるのだからなア。」

宗彦

一、此度の三國ヶ嶽の言向戦に不都合の廉有之を以て、評議の上其職を免すべきもの也。

言依別命

とこれだけだ。あんまり肩書を力にして貰ふまいかい。それよりも腹の中の第一鬼を征服し、本守護神即ち天人の御發動を御祈願するのが一等だ」

宗彦「よう小理屈を囀る男だなア。私も妹の婿に百舌鳥や燕を持つたかと思へば残念だワイ、アハ、ハ、ハ、」

原彦「モシモシ貴方等は義理の兄弟ぢやありませんか、見つともない、喧嘩はお止しなさいませ。兄弟牆に鬨ぐとも外其侮りを防ぐと云ふことぢやありませんか。喧嘩したければ家へ歸つて、いくらでも御やりなさい。此處は敵前否敵の領地へ這入つて來て居るのですからなア」

田吾作「敵地は敵地、喧嘩は喧嘩、兄弟は兄弟と區別を立てねば、國政整理上都合が悪い。何も彼もゴモク飯のやうに混同されては、社會の秩序が紊れて了ふ。

總て分業的になつて來た文明の世の中だ。兄弟は他人の始まりと云ふ事があるが、私の兄弟は一種特別だ、他人は兄弟の始まりとなつたのだからなア、アハ、ハ、ハ、」

宗彦「もう好い加減に猫【じやれ】の様な喧嘩は止めようかい。花ばつかり咲かして居る山吹では仕方がない。サアこれからが戰場だ」

原彦は心配相な顔をして、

原彦「田吾作さま、あの通り宣傳使が仰有るのだから、お前も今暫く沈黙して下

さい。最前から矢釜敷う仰有つた彼の不言實行とやらを、何處へ落しなさつたのか」

田吾作「目下熟考中だ。さう八釜敷う云つてくれない。何程、普賢菩薩の俺でも、俄にさう奇智名案が湧くものではない。今心の畑に智慧の種子を蒔いたところだから、せめて十日や二十日待つてくれないと、蕪とも菜種とも見當がつかぬ哩。

アハ、ハ、ハ、」

と他愛も無く笑ひ乍ら、大木の根に腰をかけて横臥する。四邊暗澹として天日を没し、闇の帳は固く閉された。深山の常として猛獸の吼り狂ふ聲、天狗の木を捻折るが如き怪しの物音、間斷無く聞えて来る。原彦は此の物凄き聲に肝を奪はれ、聲をも立て得ずビリビリと慄ひ上り、田吾作の袖を確と握り小聲にて、
原彦「オイ田吾作、コリヤ何うなるのだらう。随分氣分が悪い事はエーないぢや

ないか」

田吾作「そうだ、あまり氣分がよくない事はない哩。併し吾々の小宇宙に變動を來し、震災の厄に見舞はれて居る所だなア」

原彦「さう高い聲で言つてくれな。宣傳使が目を開けて聞かれたら態が悪いワ」
田吾作「態が悪いなんて、よう吐すなア。貴様の舊悪は「みんな」宣傳使の前で、
「うつつ」になつて喋つたのだから、今になつてそんな「テレ」隠しをしたつて
駄目だよ。随分昔は悪人だつたなア。俺が愛宕山を越えて結構な黄色の寶玉を懐
に持ち、保津の里迄やつて來ると、森蔭から頬被りをして又ーと現はれた奴は誰
だつたいのー。随分彼處も此處も劣らぬ凄しい所だつたねー。さうして何々とか云
ふ腹の悪い男が俺の玉を嗅つけ、腹をペコペコ、鼻をピコピコ、「ハラ」ハラ
「ヒコ」ヒコさせ乍ら現はれて來やがつて「モーシモーシ旅の御方、私は此邊の
獵人でございます。最前からの雨に火繩も濕り、困難を致して居りますれば、ど
うぞ提燈の火を御貸し下さいませ」と出て來居つたのだ。さうすると田吾作と云
ふ旅人が「ハテ心得ぬ、此の淋しき山道の、しかも森林の中より狩人が現はれる
とは合點が行かぬ。晝ならば兔も角、夜分に猪が目につく筈はない。こんな不合
理なことを言ふ奴は、確かに猪の獵夫ではなからう。懐の我が玉を獵する曲者か、
但は追剥か」と流石の奇智神謀に富んだ旅人は稍躊躇の態であつた」

原彦「オイオイそんなことを言ふものぢやない。もう好い加減に止めてくれ」
田吾作「マア好いぢやないか。此の夜の長いのに、ちつと言はしてくれ、口に蟲が湧く哩。エー一寸五分間休息を致しました。お客様方御待たせをして済みませぬ。これから前段の引續きを一席講演致しまして御高聞に達します」
原彦「さう昔の事を思ひ出し、心氣昂奮させた所が仕方がないぢやないか。もう好い加減に止めて欲しいものだなア」
田吾作「俺のは天下の公憤だよ。決してお前に對して私憤を洩らすのぢやない。又お前と俺との話でも何でも無い。過ぎし昔の夢物語で、決して俺の腹も原彦も悪いのぢやない。お前はこんな事を聞くと、むかついて宗彦が悪くなるだらうが、これも時の廻り合せだ。忍耐は幸福の基だから、忍耐をして面白い話を聞くのだよ。……時しもあれや怪しき何者かの足音がする。よくよく見れば一頭の手負ひ猪だ。獵夫と名乗つた男は忽ち肝を潰し、キヤツと聲を立て旅人の身體に「しがみ」ついた。旅人は心の中に思ふやう。四足の一匹位に膽を潰すやうな奴だから、まさか悪人ではあるまいと哀憐の情が勃然として、心中に萌芽し……」

原彦「そんなむづかしい事を云つて、解るものかい」

田吾作「解らぬのは有難いのだぞ。坊主のお經だつて、ダダブダダダブダと拍子の抜けた聲でずるずるべつたりに棒讀みにするから、人間に解らぬから有難いやうなものだ。お經といふものは不可解なのが調法なのだ。俺のも少し和讃「じみて居るが、これでも新奇流行のアホダラ經を聞くと思つて聞いて見よ。随分利益があるぞ。第一怖ろしいと云ふ觀念を忘れ、夜が長いと云ふ苦しみを其間だけなつと救はれるのだ。此位現當利益の御蔭はありませぬ。併し此内に一人位は耳に應へる優婆塞があるかも知れぬ。それも修行だと思つて聞いて居れば遂に習慣性となり、初めには耳についた汽車の音が、終ひには何ともないやうになるのと同じことだ。マア辛抱してお日待ちの説教を聞くと思つて聞くがよいワ」

宗彦「アア喧しいなア。何をヒソビソとお前達は言つて居るのだ。黙つて寝ないか。最前から聞いて居れば獵夫がどうしたの、斯うしたのと仕様も無い昔話を持ち出して、乞食坊主のホイト節のやうなことを云つてゐたぢやないか。好い加減に寝え寝え。又明日大活動をやらねばならぬから肉體の休養が肝腎だ」

原彦「宣傳使さま、何と云つても田吾さまが、耳の痛いことを喋るのですもの、

チツト叱つて下さいな」

宗彦は早くも眠りに就たと見えて何の應答も無い。

田吾作「そーれから、そーれから、

鱧、鱧、鰈、鰈、矢柄（エーはばかり乍ら）無精山道樂寺ナマ臭厄介坊主の

自墮落上人御招待に預りました 抑も愚僧が萬國修行の根元

戒行、難行、苦行、故郷の 住めば都を後に愛宕の山を乗り越えて

闇を冒してスタスタと 保津の里までやつて來ました

時しもあれや森蔭に 七尺有餘の荒男

現はれ出でて皺唄れた 聲を張り上げコレコレモーシ旅の人

提燈の明かり貸して下さんせ 聞いて旅人立止まり

此の闇黒に提燈の 火が欲しい奴は何者ぞ

夏の夕べの火取蟲か 飛んで火に入り身を焼いて

死しんで了しまふのを知しらないか　　そんな馬ば鹿かな事こと止よせ止よせと
後あとをも見みずに進すすみ行ゆく　　性しやうこ凝ごりも無なく怪あやしの男をとこ
オツトどつこい一寸違ちよつとちがうた　　折をりから猪しし奴めが飛とんで來きた
怪あやしの男をとこは驚おどろいて　　猿ましらのやうな聲こゑをあげ　　此こ奴いつはよつぽど弱よわ蟲むしと
キヤツキヤと言いうてしがみつく　　此こ奴いつはよつぽど弱よわ蟲むしと
心こころを許ゆるして道みちづ伴づれに　　なつてやつたがわが不ふ覺かく
大おほ井いの川かはの袂たもとまで　　來きたる折をりしも其そ奴やつめが
コレコレモ一ひとシ旅たびの人ひと　　お前まへの懷くわい中ちゆうに光ひかるもの
一寸私ちよつとわたしに貸かしてくれ　　貸かさな斯かうぢやと高たか飛び車しゃに
拳げんこ固こをかためて攻せめ寄よせる　　此こ方なたも癡しれ者もの〔ひつ〕ぱづし
腕うでくび首つか搦なんで中ちゆうてん天てんに　　力ちからを籠こめて投なげやれば
空くう中ちゆうの舞まひを舞まひ納をさめ　　遙はるかむ方かうの川かは中なかへ
はまつて死しんだと思おもひきや　　蛙かはづのやうな態さまをして
草くさの中なかからガサガサと　　やつて來き居をつて旅たび人びとが

胸倉むなぐらグツト引ひ掴つかみ 川かはへザンブと投ほり込こんだ

怪あやしの男をとこは肝腎かんじんの 玉たまが無ないので力ちから拔ぬけ

青あをい顔かほしてノソノソと 疵きず持もつ足あしの何處どことなく

歸かへつて行いたが其その跡あとは 何處どこかの松まつの竝なみ木原きはら

根元ねもとに埋うめられ肥料こえとなり 小ちひさい村むらの離はなれ家やの

明石あかし峠たうげの麓ふもとなる 何處どこかの松まつの竝なみ木原きはら

首くびをおつるが婿むことなり 【ハラ】ハラし乍ながら十五じふご年ねん

胸むねも【ヒコ】ヒコ十五じふご年ねん 終つひには病やまひを惹ひき起おこし

明日あすをも知しれぬ難儀なんぎの場ば 三あな五な教ひけうの宗彦むねひこが

留公とめこう、田吾たご作さく兩りやう人にんの 立派りつぱな家來けらいを引ひきつつれて

お出いでましたるその御おかけ ケロリと癒なほつた人足にんそくが

今いまは三國みくにの山登やまのぼり 猛獸まうじう毒蛇どくじやの唸うなり聲こゑ

聞きいてブルブル慄ふるて居ゐる ア、面おも白しろい面おも白しろい

エー無精ぶしやう山道さんだう樂寺らくじ なまぐさ厄介やくかい坊主ぼうずの自墮じだ落上らくしやう人にんが

此の所に現はれまして

諸行無常や 是生滅法

やがて寂滅爲樂の愁歎場

ブツブツ唱へ奉る

チャカポコ　チャカポコ

ポコポコポコ

此時一寸先も見えぬ闇黒の中より聞き慣れぬ妙な鼻聲交りの婆の聲が聞えて来た。

婆「ハテ訝かしやな、俺は三國ヶ嶽の鬼婆である。今日三五教の身魂の研けた立派な宣傳使が、當山へわれを退治せむと企て、上り來ると聞き、これこそ天の節の到來と喉を鳴らして待つてゐた。蛙や「くちなは」はモウ喰ひ飽いた。赤兒も最早飽いて來た。宗彦と云ふ奴、魂の綺麗な奴と聞いた故、嚙ぶつて喰うたら甘からうと、此間から楽しんで待つてゐた。どうやらこれが宗彦らしい。さうして二人の奴は、どれもこれも口ばかり大きい奴で、ちよつとも實のない奴だ。三匹が三匹とも、よう斯んなガラクタが揃うたものだ。アー「あて」が違うた。この年寄が足許の見えぬやうな闇黒をうまい餌食があると思つて出て來たのに、

薩張り梟鳥の宵企み、夜食に外れたやうなものだ。それでも尻の傍には、少し甘さうな肉が付いて居るだらうから、これなつと喰てやらうかな」

田吾作「コリヤ婆のやうな聲を出しやがつて、何を吐すのだ。尻なつと喰へ、貴様がそんな作り聲をしたつて、田吾作さんはよく知つて居るのだ。まだ貴様のお出幕ぢやないぞ。氣の利いた化物はモウ足を洗つて寝る時分だ。言依別命さまに願つた事を早く往つて計畫せぬかい。馬鹿だなア、陰謀發覺の虞があるぞ。化するならモツと假聲を上手に使へ。留……イヤウーン留度も無く馬鹿ばかり垂れやがつて、何處の呆け曲津だ。愚圖々々致すと承知せぬぞ」

原彦は又小聲で、

原彦「オイ田吾作さま、相手になるな。あんな化物に此の闇黒で相手になつたところで、どうすることも出来ぬぢやないか」

田吾作「八釜敷う云ふない。俺の言葉を留公……オットどつこい留めようとしたつて、斯う馬力がかかつてからは、容易に止まるものぢやないワ」

留公「田吾作、原彦、宗彦様様、又明日御目にかからう。頭から岩窟の婆が鹽つ

けて嘔ぶつてやらう。それを楽しんで居つたがよからう」

宗彦「あの聲は婆の聲のやうでもあり、鼻聲だが何處ともなしに留公に似たところがあるぢやないか、ナア田吾作さま」

田吾作「マア何でもよろしい哩。何れ明日になつたら解りませう。サアサアモ一寝入り」

と横になり、喋り草臥れて他愛もなく寝込んで了つた。

宗彦も亦寝に就く。原彦は時々怪しき聲の響き来るに脅かされ、二人の中に挟まつて一睡も得せず、一夜を明かしける。

(大正一一・五・一四 舊四・一八 外山豊二録)

第一章 鬼婆(六七三)

夜は漸くに明け離れ、木の間に囀る諸鳥の聲に送られて、三人は足に任せて進

み行く。大岩窟を背景に茅葺き屋根の三四十、軒を並べて立つて居る。

田吾作「サア、とうとう三國ヶ嶽の鬼婆の大都會が見えて来た。戸數無慮三十餘萬、人口殆ど嘘八百萬と云ふ、一大都會だ。大分に俺達も足が變になつたから、定めし都會には高架鐵道もあるだらうし、自動車、電車の設備も完全に出來て居るだらう、一つ乗つて見ようかなア」

原彦、田吾作の肩を揺り、

原彦「オイ、田吾作さま、これからが肝腎だ、今から呆けてどうするのだ、確りせぬかいな。片方は岩窟にたてかけた藁小屋が三四十竝んで居るだけぢやないか、そんな狂氣じみた事を云うて呉れると俺も淋しうなつて來た」

田吾作「アハ、ハ、ハ、此處は餘つ程馬鹿だなア、一寸景氣をつけるために、誇大的に廣告して見たのだ。蛇喰ひや蛙喰ひの半獸半鬼の巢窟だ。これからもう馬鹿口は慎んで不言實行にかからう」

宗彦「お前たち二人はいよいよ戰場に向つたのだから確りしてくれないと困るよ。又決して亂暴な事はしてはならないから、慎んでくれ。頭の三つや四つ撲られた

位で、目を釣り上げたり、口を歪めるやうでは、此度の御用は勤まらぬから、兔に角忍と云ふ字を心に離さぬやうにするのだ。忍と云ふ字は刃の下に心だ。敵の刃の下も誠の心で潜つて敵を改心させるのだから、くれぐれも心得てくれ

田吾、原の兩人は小聲で「ハイハイ」と答へながら進んで行く。二百人許りの老若男女が一つの部落を作つて居る。さうして此處の人間はどれもこれも皆啞ばかりになつて居る。蜈蚣姫の鬼婆が計略で嵌口令を布くかはりに、皆茶に毒を入れて呑まされたものばかりだ。恰度啞の國へ來たも同様である。田吾作は些しも此事情を知らず、一つの家に飛び込み、

田吾作「一寸、物を尋ねますが、婆アの館はどう往つたら宜敷いかな」

中より四五人の男女、ダラダラと戸口に走り出で、不思議な顔をして何れも口をポカンと開けて、ア、、、と啞のやうに云つて居る。田吾作は聲を張上げて、田吾作「婆アの所は何處だと問うてゐるのだ」

天賦の言靈器と聽聲器を破壊された一同は、何の事だか少しも分らず、唯口を開けて、ア、、、と叫ぶのみである。

田吾作「モシ、宣傳使さま、何と言つても返事もせず、唯口を開けてア、と云うて居る唾見たやうな奴許りですな、次の家へ行つて尋ねて見ませうか」

宗彦「お前に一任するから、何卒、私が當選するやうに戸別訪問をして、清き一票をと丁寧にお辭儀に資本は要らぬから頼んでくれい」

田吾作「何ぼ資本が要らぬと云つても、さうペコペコ頭を下げては頭痛がします哩。『投票』もない事を仰有るな、人の選挙（疝氣）を頭痛にやんで、耐ります

かい。何程氣張つたつて解散の命令が下つたら、それこそ元の默阿彌ですよ」

宗彦「免も角お前に一任する」

田吾作「承知致しました。在野黨と思つて選挙干渉をやらぬやうにして下さいや。モシモシ此の家のお方、婆アのお住居は何處だ、知らしてくれないか、決して投票乞食ぢやないから安心して云つておくれ」

家の中から又もや四五人の男女、怪訝な顔して門口に立ち現はれ、口を開けてア、と云ふばかり。あゝ此奴も駄目だと、田吾作はまた次へ行く。行つても行つても、ア、責に遇はされて一向要領を得ない。とうとう一戸も残らず戸口調

査を無事終了して仕舞つた。されど何の得る所もなく、婆アの姿も見當らなかつた。

三人は是非なく腰掛に都合の好い岩を探して、ドシンと尻を下ろし、暫く息を休める。赤ん坊を懷中に抱いた女、幾十人ともなく、不思議さうに三人の前に立ち現はれ、口を開けて、ア、ア、ア、とア聲の連發をやつて居る。

田吾作「エ、怪つ體な所だな、矢張三國ヶ嶽の邊は野蠻未開の土地だから、言語が無いと見える哩」

と話して居る。其處へ容色優れたる一人の女が現はれ來り、宣傳使に會釋し、是亦ア、ア、を連發しながら北の谷間を指ざし走り行く。この女は玉照姫の生母お玉であつた。婆の手下の者に誘拐され、この山奥に連れ込まれてゐたのである。

婆の考へとしては、玉照姫を占奪する手段として、先づ生母のお玉をうまうま与此處へ奪ひ歸つたのである。三人はお玉の顔を一度も見た事がないので、そんな秘密の伏在する事は夢にも知らず、お玉の跡を追つて、スタスタと驅出した。

四五丁ばかり谷に沿うて左へ進むと、壁を立てたやうな巨岩が幾つともなく谷

間に碁列して居る。お玉は手招きしながら、岩窟の穴を潜つて姿を隠した。三人は其後から、ドンドンと足を速めて岩窟の中を五六間許り進む。此處が鬼ヶ城山に割據して居た鬼熊別の妻蜈蚣姫が自轉倒島に於ける第二の作戦地であつた。蛇、蛙、山蟹、其他獸類の肉はよく乾燥さして岩窟の中に幾つともなく釣り下げられてある。

田吾作「アイ御免なさい、バラモン教の鬼婆アの住家は此處で御座いますか」
婆「此處が鬼婆蜈蚣姫の住家だよ」

田吾作「ア、左様で御座いましたか、これは失禮致しました。なんと立派なお館ですな、これでは風雨雷電、地震も大丈夫でせう。吾々もせめて半日なりと、こんな結構な館に暮りたいものです哩」

婆「お前は一體何處の人ぢや、そして又二人も伴を連れて來て居るのかな」
田吾作「ハイ、實の所は三五教の豫備宣傳使を拜命致しまして、今日が初陣で御座います。此通り、宗彦、原彦と云ふケチな野郎を連れて居ります。大變腹を減らして居るさうですから、蛙の干乾でも恵んでやつて下さいな」

婆「折角の御入來だから、大切な蛙ぢやけれど、響應であげませう。この蛙は當山の名物お殿蛙と云つて、蟲の藥にもなり、一切の病氣の妙藥だ。田圃にヒヨコヒヨコ飛んで居る青蛙や糞蛙とは些と撰を異にして居るのだから、其積りで味はつて食がりなさい。お前さんは蛙飛ばしの蚯蚓切りだからなア」

田吾作「チヨツ、馬鹿にして居やがる哩」

原彦「オイオイ宣傳使の化サン、そんな事を言うてくれては困るぢやないか」

田吾作「困るやうにお願いしたのだよ、昔、竹熊が龍宮城の使臣を招待した時には、百足や蛎蜥、【なめくじ】などの御馳走を食はしたと云ふぢやないか、鰈か

鰯だと思つて食ひさへすりやよいのだ。お前は食はず嫌ひだなくて、蛙嫌ひだから困る、アハ、ハ、ハ」

婆「三人ともそんな所に立つて居ずに、サアサア足を洗つてお上りなさい。今晚は悠くりと話ませう。お前は三五教の宣傳使が初陣だと云つたな」

田吾作「ハイ、申しました、全く其通りです」

婆「そんなら尚結構だ、なまりはんぢやくの、苔の生えた宣傳使は何うも強太う

て改心が出来ぬ。お前はまだまだほやほやだから、十分の【教理】も聞いて居やせまい」

田吾作「私は【郷里】を立つて来たところですが、何と妙な事を仰有いますな」
婆「ハ、ハ、ハ、お前は餘つ程無學者と見える哩、【けうり】と云ふ事は【故郷】

の意味ぢやない、三五教の筋はどうだと問ふのだ」

田吾作「つい、【きより】きよりして居ましたので筋も何も分りませぬ」

婆「ア、そうだらうそうだらう、筋が分つたら阿呆らうて三五教に居れたもの

ぢやない。筋が分らぬのが結構だ。サアこれから此處で百日ばかり無言の行をし

て、其上言靈を開いて、バラモン教の宣傳使になるのだよ。お前、此處へ來る道

に澤山の家があつたらうがな、皆無言の行がさしてあるのだ」

田吾作「あの儘ものが言へなくなるのぢやないのですか、どうやら聾のやうです

が」

婆「聾は尚更結構だ。モ一つ荒行をすれば目も見えぬやうになつて仕舞ふ。だけれど目だけは退けて置かぬと、不自由だと思つて大目に見てあるのだ。百日の行

をして好いものもある、十日で好いものもある、修業さへ出来たら口も利けるやうに、耳も聞えるやうにチヤンとしてあるのだ

田吾作「婆アサン、そりあ無言の行ぢやない、云はれぬから云はぬのだらう、云へる口を持つて居つて云はぬやうにし、聞える耳を持つて居て聞かぬやうにして居るのなら、行にもならうが、しよう事なしに云はざる聞かざるはあまり行にもならないぢやないか」

婆「そんな理屈を云ふものぢやない、信仰の道には理屈は禁物だ。人間の分際として、さうガラガラと鈴の化物のやうに小理屈を云ふものぢやない哩」

田吾作「へエ」

と首を傾ける。

宗彦「私は三五教の宣傳使です。今宣傳使と云つて居つた男はまだ卵ですから、何を云ふか分りませぬ」

婆「ア、さうだらうと思つた。何だか間拍子の抜けた理屈を捏ねる人だ。人間も大悟徹底すると、神様の廣大無邊の御威徳が分つて、何とも云はれぬやうになつ

て仕舞うて黙つて居て改心するやうになるものぢや、流石にお前は偉い、最前から婆の云ふ事を耳を傾けて聞きなさつた。偉いものだ、言葉多ければ品少し、空虚なる器物は強大なる音響を發すと云うて、ガラガラドンドン云ふ男に限り、智慧もなければ信仰も無いものだ。お前は三五教の宣傳使なら、あの青彦、紫姫、常彦、龜彦、悦子姫と云ふ没分曉漢を知つて居るだらうなア」

宗彦「イエイエ私達三人は、宇都山村の者で御座いまして、唯一度聖地へ参り、暫く修業を致しましたが、そんなお方にはお目にかかつた事も御座いませぬ、何處か宣傳に廻つて御座るのでせう」

婆「どうぞぢや、お前も三五教を止めて、私の弟子になつたら」

宗彦「有難う御座いますが、各自に自分の宗旨は良く見えるものです。私は貴女に改心をして貰つて、三五教に歸順して頂かうと思ひ、遙々と参つたのですよ。何うです、私の云ふ事を一通りお聞き下さつて、其上で入信なさつたら」

婆「ア、いやいや誰人が三五教のやうな馬鹿な教には入る奴があるものか、改心をしてくれなんて、そりやお前、何を云ふのだい。是程澄み切つた塵一つない

御霊の鬼婆だ、改心があつて耐るものか、改心するのはお前等の事だ」

宗彦は拍手し、天津祝詞を奏上し初める。婆は驚いて、

「コレコレ皆様、祝詞も結構だが折角拵へた蛙の御飯、お氣に入らねば食べて貰はいつでもよいが、せめて神様に供へたのだから、御神酒とお茶をお食り下さい、それで悠くりとお祝詞を上げなさい。私も一緒に上げさせて頂くから」と無理に引き留る。

宗彦「辨當は此處にパンを所持して居ますからお茶を下さいませ」

婆「お神酒は好だらう、自然薯で醸造へた美味しい酒がある。一つあがつたら何うだな」

宗彦「イヤ、茶さへ頂けば結構です」

田吾作「婆アさま、論戦は一先づ中止して、そんなら暖かいお茶をよんで下さい、今晚悠くりと言霊戦を負わず劣らず開始しませう。そして負た方が従ふと云ふ事に致しませうか」

婆「ア、面白からう面白からう、そんならさう致しませう。バラモン教の神様は、

御神徳が強いから、迂闊御無禮な事を云はうものなら罰が當つて口が利けなくなるから、心得て物を云ひなさいや。ア、どれどれ手づからお茶を温めて上げよう」と次の間に立つて行く。暫くあつて婆アは土瓶に茶を沸騰らせ、婆「サアサア茶が沸いた、皆さま澤山呑んで下さい、これも婆の寸志だ。バラモン教だつて、三五教だつて、神と云ふ字に二つはない。互に手を引合つて御神徳のある神様の方へ歸順するのだな。此婆も都合によつては三五教に歸順せぬものでもない、オホ、、、」

三人は何の氣も付かず、婆の注いだ茶を呑んではパンを食ひ、呑んでは食ひ、喉が乾いたと見えて土瓶に一杯の茶を残らず平らげて仕舞つた。

三人は俄に息苦しくなり、言語を發せむとすれども、一言も發する事が出来なくなつた。三人は顔を見合せ、ア、、、とア聲の連發をやつて居る。

婆「アハ、、、…好いけれまたもあればあるものだ。とうとう婆の計略にかかりよつた。口も利けず、耳も聞えず、憐れなものだ。お玉を首尾好く手に入れ、又三五教の宣傳使や卵を三人收穫した。如何に頑強な三五教でも、玉照姫の親を

取られ、又大切な宣傳使を取られ、黙つて居る事は出来まい。屹度謝罪つて返して貰ひに来るのだらう。其時には玉照姫と玉照彦とを此方へ受取り、其上に返してやつたらよいのだ。併し乍ら玉照姫が黄金なら、此奴は洋銀位なものだから先方も此位では往生致すまい。マア時節を待つて鼠が餅をひくやうに二人三人と引張込み、往生づくめで假令玉照彦だけでも此方のものに仕度いものだ。鬼雲彦の大將は脆くも波斯の國に泡食つて逃げ歸つて仕舞はれた。併し乍ら私は女の一心岩でも突き貫くのだ。此處で斯うして時節を待ち、大江山、鬼ヶ城を回復し、三五教の錦の宮も往生させて、バラモン教として仕舞ふ蜈蚣姫の計略は旨々と端緒が開けかけた。ア、有難い事だ。一つ此處でお玉に酌でもさして酒でも飲まうかい、そして三人を肴にしてやらうかい。これこれお玉、お酒だよ。これ程呼んで居るに何故返事をせぬのか、オ、さうさう、耳の聾になる薬を吞まして置いた。聞えぬも無理はない。つい私も餘り嬉しくて、精神車が何處かに脱線したと見える、オホ、「

と獨言を云ひながら笑壺に入つて居る。三人は無念の齒噛みをなし、躍り上がった

て破れかぶれ、婆を叩き伸めしてやらうと心に定めて見たが、何うしたものが體がビクとも動けなくなつて居る。言靈を應用するにも肝腎の發生器の油が切れて、且つ筒口が閉塞して居るのだから、如何ともする事が出来ず、口は自然に紐が解どけて、頤と一緒に垂れ下り、ポカンと開いて来る。三人は一度に涎をタラタラ流し、顔を見合せ、首を振り、ア、と僅に聲を發する許りであつた。

婆は愉快げに安坐をかき、長い煙管で煙草を熏べ、酒を呑み、

婆「オイこりや、阿呆宣傳使、俺の智慧はこんなものだぞ。蜘蛛が巢をかけて待つて居る處へ茅蟬が飛んで来て引かかるやうなものだ、動くなら動いて見い、言靈が使えるなら使つて見い、耳も聞えまい」

と長煙管の雁首で耳の穴をグツと突いて見る。宗彦は耳の穴を突かれてカツと怒り出した。されど何うする事も出来ぬ。此度は婆は煙草の吸殻を宗彦の口の中にフツと吹いて放り込み、

婆「熱からう、そりや些と熱い、火だからのう。加之にえぐいだらう、えぐいはズだ。煙草のズに、えぐい婆の御馳走だから、序に此酒も飲ましてやるか。イ

ヤイヤ待て待てこいつを飲ましてやると私の飲むのがそれだけ減る道理ぢや、マ
アマア斯うして二ヶ月も三ヶ月も固めて置けば大丈夫だ、若い奴が二三日したら
おほえやま 大江山の方から歸つて来るだらうから、其時この生木像を穴庫へでも格納さして
もよい哩、マアマアそれ迄は頭を叩いたり、耳に煙管を突つ込んだりして、バラ
モン教の御規則通りの修業をさしてやるのだ。なんと心地好い事だ。是で八岐の
をろち 大蛇さまもさぞ御満足だらう。嗚呼大蛇大明神様、喜びたまへ勇みたまへ。婆の
うでまへ 腕前は此の通りで御座います、何うぞ此手柄により、鬼熊別の失敗の罪を赦して
くだ 下さいませ。天にも地にも無い私の夫、神様の御用を縮尻つて、死んで神罰を蒙
り、地獄の釜の焦起しにせられるのも女房として見て居られませぬ、何卒私と一
緒に、今ぢや御座いませぬが、命数の盡きた時は天國にやつて下さい。南無八岐
ちだいみやうじんさま 大蛇大明神様、ハズバンドの罪を許したまへ、拂ひたまへ、清めたまへ、金毛丸
び 尾の命みこと

と祈願して居る。此時岩窟の口より、聲も涼しく宣傳歌を謠ひ來る男があつた。

男をとこ 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて分わける

此この世よを造つくりし神かみ直なほ日ひ

心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

唯ただ何なに事ごとも人ひとの世よは

直なほ日ひに見み直なほし聞きき直なほし

身みの過あやまちは宣のり直なほす

三あな五な教ひけうの神かみの教のり

綾あやの聖せい地ちに現あれませる

言こと依より別わけ命のみこともて

三み國くにヶ嶽がの曲まが津つ見みを

言こと向むけ和やはすそのたために

三あな五な教ひけうの宗むね彦ひこが

宇う都づの里さとをば後あとにして

足あしに任まかせてテクテクと

これの岩いは窟やに來きて見みれば

悪あくにかけは抜ぬけ目めなき

鬼おに熊くま別わけが宿やどの妻つま

顔かほ色いろ黒くろき蜈むか蚣で姫ひめ

小こ智ち慧ゑの廻まはる中ちゆう年としま増ま

此この岩いは窟やどに陣ぢん取りて

四よ方もの人ひと々びと欺あざむきつ

赤あか子この聲こゑを聞ききつて

十じ里ふり二十に里じふり三十さん里じふり

遠とほき道みちをば厭いとひなく

手て下したの魔ま神がみを配くばり置おき

此この岩がん窟くつに連つれ歸かへり

朝あさな夕ゆふなにさいなみて

悪あくの限かぎりを盡つくしつつ 日ひに夜よに酒さけに酔ゑひ狂くるふ

宗彦むねひこ、田吾作たごさく、原彦はらひこは 婆ばばが引ひき出す口車くちぐるま

知らず識しらずに乘のせられて 毒茶どくちやをどつさり飲のみまはし

口くちも利きかねば耳利みみきかず 五體ごたいすくみて一寸いっすんも

動きうごきの取とれぬ破目はめとなり 眼めばかりきよるきよるきよるつかせ

其上そのうへポカンと口くちあけて 涎よだれを流ながシアゝゝと

鳴なりも合あはざる言靈ことたまを 連發れんぱつするこそいとしけれ

天あめの眞浦まつらの神司かむつかさ この留公とめこうの腹はらを知しり

肝腎要かんじんかなめの神策しんさくを そつと知しらして下くださつた

宗彦むねひこ、原彦はらひこ、田吾作たごさくは 知しらず識しらずに魔まが神かみの

罨わなに陥おちいり今日けふの態さま 助たすけてやらねば三五あななひの

神かみの教をしへが立たち兼かねる サアこれからは留公とめこうが

神かみに貰もらうた言靈ことたまの 御稜威みいづをかりて三人さんにんの

危難きなんを救すくひ玉照たまてるの 姫ひめの命みことを生うみませる

お玉たまの方かたを救すくひ出だし 鬼おにのお婆ばばを言こと向むけて

この岩窟いはやどを改良かいいりやうし 三あ五な教ひけうの皇神すめかみの

御靈みたまを齋祀いつきまつりつつ ミロクみよの御代さきの魁がけを

仕つかへまつらむ頼たのもしさ 嗚呼あ惟かむ神ながら々々かむながら

御靈みたま幸倍さちはへましませよ

と謠うたひつつ三人さんにんが前まへに現あらはれ來きたる。婆ばばは身しん體たい竦すくみ、身み動うごきなならず、目めをばちつ
かせ苦くるしみ居ゐる。この時とき、岩窟がんくつの奥おくの方ほうより涼すずしき女をんなの聲こゑ、

神かみが表おもてに現あらはれて

誠いましめ給たまふ時ときは來きぬ

錦にしきの宮みやと仕つかへたる

お玉たまの方かたは妾わらはなり

珍うつつの寶たからを奪うばひ取とり

善ぜんと惡あくとを立たて別わけて

四よ繼つ王わうの山やまの聖せい麓ろくに

玉照たまてる姫ひめの生うみの母はは

桶をけ伏ふせ山やまに隠かくされし

逃にげ行ゆく姿すがたを見みるよりも

妾は驚き身を忘れ 跡を追ひかけ山坂を
 驅ける折しも木影より 現はれ出でたる曲神の
 手下の奴に見つけられ 手足を縛ばりいろいと
 苦しき筈を受けながら 憂をみくにの山の上
 この岩窟に押し込まれ 蜈蚣の姫てふ鬼婆に
 茶を勧められ一時は 息塞がりて言靈の
 車も廻らぬ苦しさに 朝な夕なに三五の
 神の御前に黙禱し 居たるに忽ち喉開き
 胸は涼しく晴渡る されど妾は愼みて
 唯一言も言擧げを なさず唾をば装ひつ
 珍の寶の所在をば 今迄探り居たりしぞ
 神の恵の幸ひて いよいよ茲に宗彦が
 言依別のみことのり 身に受けまして出でたまひ
 顔を合せて居ながらも 一面識もなき故か

悟り給はず吾配る
眼に心留めまさず

やみやみ毒茶を飲み玉ふ
その様見たる我が心

劍を呑むよりつらかりし
あゝ惟神々々

神は此世に在さずやと
女心の愚にも

愚癡の繰事繰返す
時しもあれや表より

涼しく聞えし宣傳歌
耳をすまして伺へば

三五教の教の聲
地獄で佛に遇ひしごと

心いそいそ今此處に
現はれ來るお玉こそ

天の岩戸も一時に
開くばかりの嬉しさよ

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして

宗彦、田吾作、原彦の
病を癒やし給へかし

悩みを助け給へかし

と歌ひつつ此場に現はれたり。不思議や三人は俄に身體自由となり、耳も聞え、

口も縦横無碍に動き出した。

田吾作「イヤ、留公さま、よう来てくれた。もう一足早ければこんな目に遇ふのだ無かつたに、しかし乍ら最前途中で見たお女中さまが、今聞けば玉照姫さまの御生母と云ふ事だ、何とマア神様の御経綸は分らぬものですなア」

お玉「皆さま、良い處へ来て下さいまして結構で御座いました。實はこの婆アの手下の者共が、ミロク神政成就の御寶を、桶伏山から盗み出し、此岩窟に秘藏して居たのを、今朝になつて所在を知り、何とかして逃げ出さうと思つて居たのですが、婆アの監視が酷いので、どうする事も出来ず、誰人が助太刀に来て下さつたらと思つて居た矢先、貴方のお出で、こんな結構な事はありませぬ。サア一時も早くこのお寶を持つて聖地へ歸りませう」

と後は嬉し涙に聲さへ曇る。

宗彦「ア、さうで御座いましたか、私は言依別命様より、是非共三國ヶ嶽へ行つて来いと仰せられて、魔神を征服せむと出て来たのです。貴方が此處に囚はれて御座る事も、今の今迄夢にも知らなかつた。サア是からこの婆アを言向け和はし、

寛る寛ると凱旋致しませう」

お玉「到底婆アには改心の望みはありませぬ、自分から斯うして靈縛にかかつて居るのですから、これを幸ひに皆さん聖地へ歸りませう。此お寶は嚴重に封をして置きました、私が捧持して歸ります。前後を警固して下さい。此婆アは半日許り靈縛の解けないやうに願ひ置けば、追ひかけて来る氣遣ひもありませぬ。五六十人の手下の荒くれ男が、今日に限つて、何れも遠方へ出稼ぎに行つた留守の間、これ全く天の恵みたまふ時でせう。サアサア長居はおそれ」

とお玉の方は歸綾を促す。

宗彦を先頭にお玉、田吾作、留公、原彦と云ふ順序で、宣傳歌を高く謠ひ、四邊の木魂に響かせながら、聖地を指して目出度く凱旋することとはなりける。

岩窟の中には進退自由を失つた婆ア唯一人、谷の彼方には淋しげに閑古鳥が鳴いて居る。

(大正一一・五・一四 舊四・一八 加藤明子録)

第一二章 如意寶珠（六七四）

心の色も照山の麓に建てる高殿は

錦の宮の社務所と世に鳴り渡る秋の風

紅葉の錦散り敷きて寒さ身に沁む時もある

頭に霜を戴きし三五教の宣傳使

黒姫、高姫、青彦や紫姫は終夜

眠りもやらずヒソヒソと秘密の話に耽り居る。

高姫「皆さま、高い聲では云はれませぬが、玉照彦様、玉照姫様御兩人も大切だが、それよりも、もつともつと肝腎要の根本の生粹の神政成就のお寶が紛失したのを皆さま知つて居ますか」

青彦は「エ、ツ」と頓狂な聲を出し、驚いて仰向きに倒れようとしてやつと身

を支へた。

高姫「コレコレ、青彦さま……お前の名は若彦ぢやが……つい口癖になつて云うたのだから忪へて下されや。若葉の色は青いから若彦でも青彦でもよう通ひますからな……然し、ちつと氣を沈めて聞いて下さい。外の人に斯んな話が聞えたら高天原は大騒動ぢや、何とか工夫せねばなるまい。こんな事はまだ誰にも言うては無いのぢやが本當に心配の事が出来て居るのだよ」

黒姫「心配な事とは何事が起りました、妾の力に及ぶことなら生命を捨てても御用を聞かして貰ひませう」

高姫「實はお玉の方がバラモン教の惡神に攫はれて仕舞ひ、今に行方が分らぬの
で言依別命様にも申上げ、心配をして居るのぢや」

是を聞いて黒姫、紫姫、若彦は眞蒼白な顔をし「へエ」と言つたきり呆れて、互に目と目を見合すのみで途方に暮れて居る。

高姫「お前さま、お玉の方が攫はれたと言つてそれだけ吃驚する様な事では仕方がないぢやないか、ちつと胸を据ゑなさい。「身魂が研けて居らぬと眞逆の時に

びく付くぞよ。身魂さへ研いて置けば如何な心配が起つても胸が据つて樂に凌げ

るぞよ」とお筆先に有りませうがな、まだまだ吃驚の親玉がモ一つありますぞや

紫姫「高姫さま、吃驚の親玉とは如何な事です、何卒聞かして下さい。妾も力一

杯出来る事なら勤めさして頂きますから

高姫「親玉と言つたら玉を盗られたのぢやがなア

紫姫「あのお玉の方をですか」

高姫「お玉もお玉ぢやが、そんな玉とは玉で玉が違ふのぢや。天地がデングリ覆

る様な大騒動ぢや。皆さまに言うて上げ度いけれど、あまり胸が据つて居らぬの

で如何する事も出来ない。ア、ア、神様の、もつと確りしたお道具に成る人

が欲しいものだなア

黒姫「玉とは何で御座います」

高姫「金の玉ぢや、それを盗られたのぢや」

黒姫「それは言依別様ですか、高山彦さまですか、そんな處を……また誰が如何

して……穢しい……取つたのでせう」

高姫「エー、合點の悪い人ぢや、鞆丸と違ひますよ。桶伏山に埴安彦神様が匿して置かれた、青雲山から持つて來られた神政成就の元津御靈の黄金の玉、如意寶珠の寶物を……皆が氣をつけぬものだから、到頭盜られて仕舞うた。こりや屹度バラモン教が攫へて去んだのに違ひない、大變だらうがな」

黒姫「大變です、如何したら宜しからう、言依別命様に伺ひませうか」

若彦「困つた事になりましたなア、そつと伺つて來ませうか」

高姫「そんな事は此間から幾度も幾度も、妾がそつと言依別の教主に相談に行つて居るのぢやけれども、何とか、かんとか言つて、「マア黙つて居つて下さい、何とか神様がして下さるでせう」なんて、キヨロリ、カンと大山が崩れて來ても動かぬと言ふやうな態度をして御座るものだから、妾は、もう氣が揉めて揉めて、立つても居ても居られぬから、今日はお前さま達に寄つて貰つて、何とかせねばならぬと思ひ、相談をするのぢや」

黒姫「これは又、どえらい失敗をしたものですな、夜警にも廻る者が無かつたのかいな」

高姫たかひめ「その夜警やけいぢやて、三五教あななひけうの信者しんじやらしう見せて這入はいつて來よつて、其奴そいつが手てび引きして黄金こがねの玉たまを盗ぬすみ、何處どこかへ逃にげて行きよつたのぢや。それだから神様かみさまが各めん自めに氣きをつけて置おけと仰おつしや有あるのぢや。若わかい者ものの眠ねむたい盛さかりに夜警やけいをさして、寢ねつきの惡わるい年寄としよりが、無理むりに寢ねようとして無精ぶしやうをかまくものだから、神様かみさまが改心かいしんの爲ために罰ばつをあてなさつたのぢや。之これから年寄としよりは夜寢よるねぬ事ことにして下ください。その代り晝ひるは何程いくらなりと寢ねて、夜よきりは氣きを付つけて貰もらはねば、之これから先さきに如何どんな事ことが起おこるか分わかつたものぢやない。若わかい者ものを晝遊ひるあそばし夜夜警よきりやけいをさすと、屹度きつと碌ろくな事ことは出來はしない。夜分やぶんは宵よひから寢ねさせ、晝働ひるはたらけば宜よいのぢやに、第一だいいち幹部かんぶのやり方かたが御神慮ごしんりよに叶かなぬものだから、斯こんな心配しんぱい事ことが起おこるのぢや。黒姫くろひめさま、ちつと氣きをつけなされや」
黒姫くろひめ「ハイハイ、氣きをつけます。何なんと言いつても身魂みたまの因縁いんねん性來しやうらいだから仕方しかたがありませぬワ。惡あくの御用ごようをさされる身魂みたまと善ぜんの御用ごようをさされる身魂みたまと、神様かみさまが立別たてわけて見みせて下くださるのぢやから、最前さいぜんも高姫たかひめさまが「神かみさまの罰ばちが當あたつた」と仰おつしや有あつたが、そりやチツトお考かんがへ違ちがひぢやありませんか。神様かみさま自みづからがお仕組遊しぐみあそばす肝腎かんじんの寶たからを敵てきに盗とられて迄まで、妾達わたしたちに罰ばちを當あてるなんて…可怪をかしいぢやありませんか。

妾等わたしらが盗とられたのぢやない、畢竟つまり神様かみさまが神業かむわざの寶たからを盗とられなさつたのぢや、謂いはば神様かみさまに罰ばちが當あたつたのぢや。さうぢやから素盞すさのをのみこと鳴尊なると様さまは善よい所ところもあるけど、變性へんじや女子うによしだから間あひさに大縮尻おほしくじりをなさるのぢや。緯よこは梭さとくが落おちたり絲いとが切きれると言いふのは、こここの事ことでせう。經たては一ひと條すぢを立て通とほしてさへ居をれば斯こんな事ことは無ないだけれどなア。アア然しかし時世ときよじ節せつには神様かみさまも叶かなはぬのだから、妾等わたしらは一いつ旦たん改心かいしんした以上いじやうは、時ときの天下てんかに従したがふより外ほかに道みちは有ありませぬ、大將たいしやうがしつかりしてくれぬと下したの者もの迄までが難儀なんぎをする。一いつ匹びきの馬うまが狂くるへば千匹せんびきの馬うまが狂くるふとやら言いうて、良よい大將たいしやうの神様かみさまが欲ほしいものだ。如何どうしても變性へんじやう女子うによしの身魂みたまが我がを張はつた時ときは斯こんな懲戒みせしめが出て來くるのぢや。神かみさんだつて矢張やつぱり失敗しつぱいはあるのだからなア』

若彦わかひこ『これ、黒姫くろひめさま、そりやちつと量見りやうけんが違ちがひはせぬか、言いへばお前まへさま達たちの取締とりしまりが悪わるいから斯こんな事ことになつたのぢや。自じ分の責せき任にんを棚たなへ上あげて二ふたつ目めには瑞みづの御靈みたまさんへ責せき任にんを持もつて行ゆくのぢやな、何程なにほど千座ちくらの置戸おきどを負おうて下くださる神かみさまぢやと言いうても……そいつア餘あんりぢや、お前まへさまの論法ろんぽふは脱線だつせんだらけぢやないか』

黒姫くろひめ『ちつとは脱線だつせんもしようかい、天變地異てんべんちいの大騷動おほさうどうが起おこつとるのだから……一ひと

つや二つ汽車電車の脱線はありさうなものぢやふた きしゃ でんしゃ だつせん

高姫たかひめ「何時いつまで斯こんな事をことを言うて居をつた所とこで、黄金こがねの玉たまは歸かへつて來くる氣遣きづかひも無な

し、お玉たまの方がかた戻もどつて御座ござる筈はずもない。ここはひと一つ我々われわれが千騎せんき一騎いつきの活動くわつどうをして、

生命いのちをまと的にこがね黄金たまの玉とりかへを取返とりかへし、お玉たまの方かたを探さがして歸かへつて來こねば、第一だいいち我々われわれ初め貴あな

女等たがたの責任せきにんが濟すみますまい〇

此時このときガラガラと表おもての戸とを開あけて這入はいつて來きた二人ふたりの男をとこ、若彦わかひこは目早めばやく見みて、

若彦わかひこ「ヤア、お前まへはテルヂーにまへコロンボぢやないか、しつかり夜警やけいをして居あるか

な〇テルヂー「夜警やけいも神妙しんめうにやつて居あますが、黄金こがねの玉たまを、前まへに來きて居をつた徳とくの野郎やらう

奴め、バラモン教けうの蜈蚣むかで姫ひめの間者まはしものと共謀ぐるになりやがつて、ソツと玉たまを盗ぬすんで行きや

がつてからと言いふものは、何なんの爲ために夜警やけいをするのやら有名無實いいうめいむじつ、馬鹿ばからしうて

夜警やけいも「やけ」氣味きみになつて來きます哩わい〇

高姫たかひめ「なに、あの徳奴とくめが此間このあひだから姿すがたを見みせぬと思おもへば、彼奴あいつが手引てびきをして居をつた

のか。何なんと悪わるい奴やつぢやな、それで人ひとに心こころを許ゆるすでないぞよと神様かみさまが仰有おつしやるのだ、

皆さまよう聞いて下さいや、うまい事言うて來ても神に伺はねば相手になつては往かぬとのお筆先を餘り軽く見て居つたから、斯んな事になつて仕舞ふのぢや」
黒姫「モシ高姫様、貴方は何時も徳さんは偉い、誠の人ぢや、あんな人ばかり信者になつて居つたら、三五教は一遍に世界の掌を翻す事が出來ると云うて褒めそやし、お前も徳さまを見習うて手本にしなさいと仰有いましたな。貴方の仰有る事を聞いて手本にでもして居つたものなら、今頃は如何な騒動がオツ始まつて居るやら分りやしませぬぞえ。鼈に尻の穴を吸はれた様な惨目な目に成つて仕舞ふのだ」

高姫「黒姫さま、お前は何を言ふのぢやぞえ、誰がそんな事を言うたのぢや。一寸一遍手洗でも使うて來なさい」

言依別命は何となく心いそいそして寝られぬままに、月の光を浴び、杖をついてブラブラと此高殿の前にやつて來た。屋内の争ひ聲に耳をとめ、自ら雨戸を引き開けて進み入り、
言依別「ヤア皆さま、遅う迄エライ勉強ですな、何ぞ結構なお話でもありませんか

な

高姫たかひめ「貴方あなたは高天原たかあまはらの大將たいしやうぢやありませぬか、能ようそんな氣樂きらくな事ことを言いうて居をら

れますな、肝腎かんじん要かなめの根本こつぽんのお寶たからを紛失ふんしつし、お玉たまの方かたの肉にくの宮みやは行方ゆくへ不明ふめいとなつて、

妾達わたしたちが夜よも碌ろくによう寝ねず、此この通とほり目めを赤あかうして心配しんぱいをして居あますのに、貴方あなたは何なん

ともありませぬか。貴方あなたが餘あまり平氣へいきな顔かほして御座ござるものですから、幹部かんぶの連中れんちゆうさ

まが誰たれも彼かれも、いや惟神かむながらとか、御都合ごつがふだとか言いつて、盡つくすべき事ことも盡つくさず、懷中ふところ

に手てを束つかね、握にぎり麻羅まらでポカンとみて居をるのぢや、ちつと確しつりして下ください」

言依別ことよりわけ「ハ、ハ、ハ、ハ、エライ御心配ごしんぱいを掛かけて濟すみませぬな、神様かみさまは拔目ぬけめが有ありま

せぬから、さう心配しんぱいはなさいますな」

高姫たかひめ「拔目ぬけめの無ない神様かみさまなら、なんで其そんな大切たいせつな玉たまを盜とられなさつたのぢや。神かみ

さまだつて此方こちらから氣きをつけて上あげなければ如何どうなるものか、こんな不調法ぶてうはふばか

りなさる、筆先ふでさきにも「何卒誠どうぞまことの者ものは神かみに氣きをつけて下くだされよ」と現あらはれて居をるぢ

やないか、能ようマア、ほんにほんにそんな陽氣やうき浮氣うはきで如何どうして此高天原このたかあまはらの城しろが保たも

てますか、大勢おほせいの者ものの統一とういつが出來できますかい」

言依別ことよりわけ「黄金こがねの玉たまも、お玉たまの方かたも、何れ明日あすの朝あさか晝頃ひるごろには此處ここへ歸かへつて見みえま
すよ。神かみさまがちゃんとと仕組しくんで居をられるから……貴方等あなたがたが何程なにほど鯨じやちになつても駄だ
目めですよ」

此時このとき門もんの戸とを慌あわただしく叩たたき、

「モシモシ、言依別ことよりわけ神様かみさまはお見みえになつて居をりませぬか」

黒姫くろひめ「誰たれだいなア、無作法ぶさはふな……戸とを割われる程ほどポンポン叩たたいて……ヤアお前まへは谷たに

丸まるぢやな、身體しんたい維これ谷丸處たにまるどころぢや、早はやう彼方あつちへ行いつて夜警やけいをして來きなさい」

鬼丸おにまる「エー、滅相めつさうな夜警やけいどころですかい、大變たいへんな事ことが起おこりました。何卒どうぞ早はやう言依ことよりわ

別神様けのかみさまに歸かへつて貰もらひ度たいのです。實じつの處ところは此間このあひだ盜ぬすまれた黄金こがねの玉たまとお玉たまの方かたが今いま

表門おもてもんまで無事ぶじに歸かへられました」

言依別ことよりわけ「宗彦むねひこも一いっ緒しょに歸かへつたかな」

鬼丸おにまる「ハイ、宗彦むねひこさまも、その外ほか三人みたりのお伴とももついてお歸かへりになりました」

言依別ことよりわけ命のみことは莞爾にこにこし乍ながら鬼丸おにまるを伴ともなひ表門おもてもんへ進すすみ行ゆく。

高姫たかひめ「サア黒姫くろひめさま、青あをさま、若わかさま、紫むらさきさま、如何どうしよう如何どうしよう、大變たいへんぢ

や大變ぢやたいへん」

若彦わかひこ、紫姫むらさきひめ、黒姫くろひめ、高姫たかひめは嬉しさの餘り室内しつないを狼狽うろたへ廻まはつて居ゐる。お玉たまの方かたに

抱だかれて黄金こがねの玉たまの御神體ごしんたいは一ひとまづ錦にしきの宮みやの殿内でんない深ふかく納をさまり給たまうた。あゝ惟かむながら神かた靈たま幸ちはへませ倍ませ坐せ世せ。

言ことより依わけ別け命のみことは祝意しゆくいを表へうし立たつて宣傳歌せんでんかを歌うたひ始はじめたり。

☞ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも 誠まことの力ちからは世よを救すくふ

三あなな五ひけう教けうの神寶かんだから 黄金こがねの玉たまの如意寶珠にょいほつしゆ

バラモン教けうの曲神まががみに そつと盜ぬすまれ言依ことよりの

別わけの命みことは驚おどろいて 錦にしきの宮みやに馳はせ参さんじ

玉照彦たまてるひこや玉照たまてるの 姫ひめの命みことに伺うかがへば

寶珠ほつしゆの玉たまは三國嶽みくにだけ バラモン教けうの副棟梁ふくとうりやう

心こころの鬼おにヶ城山やうぎんに 砦とりで構かまへし鬼熊おにくま別わけの

醜しこの魔神まがみの宿やどの妻つま

蜈蚣むかでの姫ひめの鬼婆おにばさま

岩窟いはやの中なかに立たて籠こもり

貴うづの寶たからを奪うばひ取り

お玉たまの方かたと諸共もろともに

占奪せんだつせりと聞ききしより

我われは神しん勅ちよく畏かしこみて

人ひとに知しらさず三五あななひの

道みちの司つかさの新しん參ざん者もの

天あめの眞ま浦うらが弟おとこなる

心こころの清きよき宗彦むねひこに

旨むねをふくめて霧きりの海うみ

渡わたりて三國みくにの山奥やまおくに

遣つかはしければ宗彦むねひこは

使命しめいを果はたし漸やうやうに

お玉たまの方かたと諸共もろともに

いそいそ此處ここに歸かへりけり

玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの

神かみの命みことの神司かんづかさ

お玉たまの方かたの三みつ靈みたま

黄金こがねの玉たまの五いつ靈みたま

三みつと五いつとの睦むつみ合あひ

此處ここに愈いよいよあななひ

神かみの教をしへは輝てり渡わたる

三五さんごの月照彦つきてるひこの神かみ

思おもひも此處ここに足眞彦だるまひこ

教をしへは四方よもに弘子彦ひろやすひこの

神かみの命みことと現あらはれて

悪しき病も少名彦

高照姫や純世姫

尊き教も龍世姫

神の命や豊國姫の

埴安彦や埴安姫の

天津神等八百萬

是の聖地に神集ひ

祝ぎ給ふ嬉しさよ

御靈幸倍坐しまして

天津日嗣の永久に

圓山姫の守られし

再び此處に復りまし

光と現はれ給ふらむ

人が勇めば神勇む

愈神の御光も

眞澄の姫の鑑なす

御代も豊に國治立の

瑞の御魂のお喜悅

清き御魂も勇み立ち

國津神等八百萬

今日の生日の喜悅を

あゝ惟神々々

世は久方の空高く

動かぬ御代と守りませ

黄金の玉は恙なく

五六七神政の神業の

勇めよ勇め諸人よ

吾は言依別命

コーカス山ざんや齋苑館いそやかた 珍うづの都みやこのエルサレム

エデンの園そのに現あれませる 御神みかみも共ともに喜よろこびて

堅磐かきはときは常磐じょうばんに何いつ時つまでも 榮さかえませよと祈いのりつつ

日ひの出神でのかみや日ひの出別でわけ 木この花はな姫ひめの御活おはたらき動

天地てんちの神かみも三五あななひの 教をしへの司つかさも信まめ徒ひとも

歡えらぎ喜よろこび舞まひ遊あそぶ 鶴つるの齡よはひの末すゑ長ながく

龜かめ萬ばん歳ざいの永とこ久しへに 守まもらせ給たまふ此この教をしへ

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 御靈みたま幸さち倍はひ坐ましませよ

(大正一一・五・一四 舊四・一八 北村隆光録)

靈たまの礎いしず (六)

一、第一天國たる最高最勝の位置を占たる天國の天人の姿は、實に花の如く、黄金の如く、瑠璃光の如く、且金剛石の幾十倍とも知れないやうな、肌の色を保つて居る天人ばかりである。そして大抵は有色人種、殊に黄色人種が多く、白色人種は其數に於て餘程少數である。之を第二、第三の天國の住民より仰ぎ見る時は、只單に像が強力なる光輝を放射して居るやうで、充分に見分けることが出来ない。又第二、第三の天國には白色人種も多數に住み、有色人種も多數に住居して居る。そして白色人種は白色人種で團體を造り、ここに集合し、有色人種は比較的に少いやうである。

又宗教の異同に依つて、人靈の到る天國も違つて居る。佛教信者は佛教の團體なる天國へ上り、耶穌教信者は耶穌教の團體なる天國へ上り、回々教信者は回々教の團體なる天國へ上り、それ相應の歡喜を攝受して、天國の神業に従事して居る。また神道の信者は神道の團體なる天國に上り、神業に従事して居る。そして神道の中にも種々の派が分かれ、各自違つた信仰を持つて居るものは、又それ相當の團體にあつて活動し、歡喜に浴して、天國の生涯を樂んで居る。

一、如何なる宗教と雖も、善を賞し惡を憎まない教の無い限り、何れの宗教信者も各自天國へ上り得る資格は在る。併しその教にして充分に徹底したものは、堂しても高き優れたる天國が開かれてあるから、不徹底にして、靈界の消息に暗いやうな宗教の天國は實に最下方にあつて、見聞の狭い人間のみの團體が造られてある。現代の教や教などは、倫理的教理のみに墮して居て、肝腎の靈界の消息を教へない、否靈界の真相を徹底的に知悉して居ないから、却て中有界に逍遙する人間が多い。

凡て天國の團體に加入し得るものは、神を固く信じ、篤く愛し得るものである。不信仰にして天國に到る者も有るが極めて少數である。何れの宗教も信ぜず、守らず神の存在を知らずして天國へ往つたものは、大變に魔誤付き、後悔し、且つ天國や死後の生涯の在りしことに驚くものである。又現界に在る時、熱心に宗教を信じ、神を唱へながら、天國に上り得ずして中有界に迷つたり、甚だしきは地獄へさへ落つる人間もある。神佛の教導職にして却て天國に上り得ず、中有界に迷ひ、或は地獄に落つるものは隨分に澤山ある。神佛を種にして、現界に於て表

面善人を装ひつつ、内心に信仰なく、愛無く、神佛を認めない宣教者は、死後の生涯は實に哀れなものである。又熱心にして良く神を認め、愛と信とに全き者は、死後天國の團體に加入し、歡喜を盡しつつあるに引替へ肝腎の天國の案内役ともいふべき宣教者が、却て地獄落が多くて天國行きが尠いのは、所謂神佛商賣の人間が多い故である。現界に於て爲すべき事業も、又商賣も澤山にあるに、それは關係せず、濡手で粟を掴む様なことや、働かずして、神佛を松魚節に使つて居る、似而非宗教家ぐらゐ、靈界に於て始末の悪いものは無く、且つ地獄行きの多いものはない。

一、高天原に於ける團體は、大なるものは十萬人もあり、五萬人、三萬人、一萬人、五千人、尠い團體になると四五十人のもある。故に各自の團體の天人は、自分の團體の一人でも多くなることを希望して居るから、天國へ上り來る人間に對して、非常なる好感を以て迎へる。

一、又天國の團體にある天人は、何れも男子なれば現界人の三十才前後、女子なれば二十才前後の若い姿である。この故は現界人の肉體は物質界の法則に由つて、

年々に老衰して頭に白雪を頂き、身體に皺の寄るものであるが、人間の靈魂や情動は不老不死であつて、どこ迄も變らないものだから、精靈界の天人は年が寄つても、姿は變じない。

故に、現界に於て八九十才にて死んだ人間も、精靈界の天國へ復活した後は、その強壯な靈魂の儘で居るのだから、決して老衰するといふことは無い。天人にも五衰といふ説があるが、それは決して天人の事ではない、靈界の八衢に彷徨して居る中有界の人間の事である。故に天國へ往つた時に、自分の現界の父母や兄妹、又は朋友、知己なぞに會つても一寸には氣の付かない如うなことが澤山にある。その故は自分の幼兒たりし子は既に天國にて成長し、老たる父母は自分と同様に壯者の靈身を保ちて居るからである。然れど能く能く見る時は、何處ともなしにその佛が残つて居る。精靈の世界は凡てが靈的の要素から成り立つて居るから、現界の事物の如く、容易に變遷するものではない。是が精靈界と肉體界との相違せる點である。

ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十二月

靈たまの礎いしず（七）

凡すべての人は死しして後のち

天國てんごく淨土じやうどに昇のぼり行ゆく

無限むげんの歡喜くわんきに浴よくすべき

人間にんげん特有とくいうの資質ししつあり

これ神かみごころ大和魂やまとたま

佛者ぶつしやの所謂いはゆる佛性ぶつしやうぞ

そもそも人は色々いろいろと

輪廻りんね轉生てんしやうの門もんを越こえ

禽獸きんじう蟲魚ちうぎよの境涯きやうがいを

涉わたりて現世げんせに人間にんげんと

生うまれ來きたりし者ものもあり

高天原たかあまはらの天人てんにんが

男女だんぢよ情交じやうかうのその結果けつくわ

靈子れいしとなりて地ちに蒔まかれ

因縁いんねんふかき男子だんし女子ぢよし

陰いんと陽やうとの水火すいけの中なかに

交まじはり入いりて生うまるあり

人ひとの靈魂みたまは至精しせい至微しび

過去くわこと現在げんざい未來みらいとの 區別くべつも知らず生き通とほし

幾萬劫いくまんごふの昔むかしより 生死せいしの途みちを往來わうらいし

善果ぜんくわを積つみて人間にんげんと 漸やうやく生うまれたる上うへは

如何いかでか高天たかまの天國てんごくへ 昇のぼり得えられぬ事ことやある

ア、惟かむながらかむながら神々かみ々々 神かみの仁慈じんじぞ有ありがた難がたき。

神かみの御子みこたる人ひとの身みは 善惡ぜんあく正邪せいじやに拘かかはらず

高天原たかあまはらの天國てんごくへ 上のぼりて諸もろの歡樂くわんらくを

味あぢはひ得うべき萌芽ほうがあり これを稱しょうして神性しんじやうといふ

偶たま根底たまねそこの暗界あんかいへ 墜おちて苦くるしむ者ものあるは

體主たいしゆ靈從れいじう利己りこ主義しゆぎや 我性がしやう我執がしふの妖雲えううんに

おほはれ自らみづか身を破やぶり 自らみづか地獄ぢごくの因いんを蒔まき

自ら苦悶の深淵に 沈み溺るる魂のみぞ
さは然りながら天地を 造り玉ひし主の神は
至仁至愛に坐しませば 極悪無道の人間も
容易に悪ませ給ふ無く 天国浄土に救はむと
天の使を地に降し 神の尊き御教を
うまらにつばらに隈もなく 開かせたまひて世の人を
導き給ふぞありがたき。

神の御眼より見給へば 聖人君子も小人も
智者と愚者との區別なく 一切平等に映じ給ふ
これぞ仁愛のころなり 實相眞如の太陽は
生死の長夜を照却し 本有常住の月神は

煩惱ぼんなうの迷雲めいうん破却はきやくなし

現世げんせの人は昔むかしより

例ためしもあらぬ聖代せいだいに

いとも尊たふとく生うまれ遇あひ

仁慈じんじの教をしへを蒙かうむりて

心こころの暗やみを押開おしひらき

天國てんごく淨土じやうどの手引てびきをば

開示かいじされたる尊たふとさは

渡りわたに舟ふねを得えし如ごとく

金剛こんがう不壞ふゑの如意にょい寶珠ほつしゆ

雙手もろてに受うけしその如ごとく

暗夜あんやに炬火きよくわを得えし如ごとく

ア、惟かむながら神かむながら々々

神かみの仁慈じんじの限かぎり無なく

窮極きうきよくなきに咽むせびつつ

感謝かんしゃの波なみに漂ただよひぬ

そもそも人ひとの心しん靈れいは

幸福かうふく以外いぐわいの物ぶつ々に

對たいして一切いっさい無感むかん覺かく

なるべく造つくられ居をるものぞ

故ゆゑに諸人しよじんの心しん靈れいは

無限むげんの歡喜くわんきを永遠えいゑんに

享うけむが爲ために存在そんざいす

人ひとの心しん靈れいの歡喜くわんきとは

一々いちいち知ち悉しつし理り解かいする

ことに由よりての歡喜くわんきなり

此この世よに生うまれて何事なにごとも

知ち悉しつし得えられず理り解かいせず

暗黒無明の生涯あんこくむみやう しゃうがいを 送るもの程おく もの ほど悲しみの
深きものこそ無なかるべし 第一だいいち死後の生涯しごの しゃうがいに
對して無知識たい むちしきなることは 悲哀ひあいの中なかの悲哀ひあいなり
ア、惟かむながらかむながら神々々 御靈みたまさち幸はひましませよ。

大正十一年十二月

(昭和一〇・六・五 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第二〇卷 如意寶珠 未の卷

終り